0042272000

0042272-000

255. 2－40

西洋教育史

目黒書店

第1巻

昭和9

AHC

25. 9. 27

コ3001
さ

帝國圖書館藏書

西洋教育史

第一卷 希臘編

石山脩平 著

東京 目黑書店發兌

昭和四年

255.2-40

序言

一

一人の偉大なる教育思想家の唯一篇の古典と雖も、それの眞に良心的なる研究は、生涯の努力に値する。然るに今多くの人々の事業と思想とを通じ、幾つかの時代を連ねて、西洋教育史全體の通史を叙述せんとするこの企ては、若し次の事情と程度とを辯明しないならば、無智の暴擧として嗤はれるであらう。事情といふのは專ら私自身の職責にかゝはる當面の必要を意味する。私はこの兩三年來高師生徒に對する西洋教育史の講義を擔當し、古代から最近までの通史を毎年繰返してゐるのであるが、一週僅か二時間で一年間にこの通史を講了するためには、教室の講義以外に、參考書による自習を生徒に要求しなければならぬ。所が從來本邦に於て刊行せられた西洋教育史は、今日の高師生徒の如く優秀なる素質を具へ且教育者としての專門的教養に精進する者に取つては、概し

てその程度が低きに失し、分量的にも不足である。殊に古代及び中世に關しては——二三の特殊研究を除いて——通史としての叙述は甚だしく閑却せられてゐる。而も古代・中世を閑却して近世を理解せんとすることは、少くとも歴史的研究を重視する者の自家撞着と言はねばならぬ。斯かる事態に直面して私は取敢へず希臘・羅馬及び中世の教育史を従來よりも精細に叙述することの必要を痛感し、なほ餘裕あらば近世教育史をもこの基礎工作の上に建直さんことを考へた。本書はこの計畫の第一巻である。それは従來の通史に比べては程度と分量とを増加してゐるけれども、特殊研究として後日更めて企てらるべき希臘教育史に比べては甚だ粗雑なる啓蒙的述作に過ぎない。本書に當然與へらるべき非難は、この事情と程度とを釋明することによつて幾分緩和せられるであらう。

二

通史の第一巻たる本書は單に幾冊かの續刊と並立する一冊たるに止まらず

して、西洋教育史全體の源流を探求し、後の時代に展開せらるべき諸々の教育事實及び教育思想の原型を提示するものであらねばならぬ。私は自らの淺學にも拘らず、希臘民族自身の偉大さによつて、本書が斯くの如き源流的・原型的内容の幾分を暗示し得るであらうことを希念する。そしてまさにこの希念の故に私は本書をば、特に初めて教育に關する書物を讀むべき生徒——事實私の講義は斯かる生徒に向つて行はれる——に對し、單なる歴史的叙述を超えて、教育精神を喚起し且教育の理論的反省の定型的方式を修得させることを意圖して執筆した。資料の選擇も、項目の排列も、論述の筆致も、その當否はすべてこの意圖に關聯して批判せらるべきである。

三

上述の提言は固より私の計畫と念願とを表明したに止まる。本書がその成果に於て斯かる條件を完備してゐると僭するものでは決してない。却て本書の稿を脱した時は——多くの著作家が恐らくは經驗するであらう以上に——私自

身が本書の缺陷を自覺した時である。努めて希臘原典に依據すべきことを心に誓ひながら、少からぬ部分を近世語の譯書で間に合せたり、全體に亘つて精讀すべき古典の多くを單なる通讀乃至抄讀に止めたり、既成の哲學史や教育史の所說をそのまゝ借用したりして、危くも成つた本書は、今直ちにその補正に着手すべき必要を、誰よりも先づ著者自身に痛感せしめる。而も希臘教育史の眞實の意義は、それが後世に於て幾度か呼び出され、その都度新鮮なる力を與へて來た點に存することを思へば、羅馬編以下續稿の論述は同時に、飜つてこの希臘編に加へらるべき補正の必要を益々多く發見せしめるであらう。斯くして私の希臘教育史研究は寧ろ今より始められたと言はねばならない。否、希臘教育史は私に取つては、すべての始であり、終であり、永遠の課題であり、不斷の生命である。

四

本書の公刊に際して衷心の感謝を獻ぐべき多くの人々の指導誘掖の中、わけても恩師小西重直先生、波多野精一先生、菊池慧一郎先生の洪恩を玆に記さねばならぬ。七年前の春、京大入學の當初、小西先生が教育學概說といふ講義題目の下に實は西洋教育史の骨子を講述せられ、又大教育思想家の古典を通じて教育精神を感得することが教育に志す者の第一の修養であることを諭されたのは私をして先づ教育史研究へと向はしめた最初の動因である。波多野先生はその講義の第一時間目に、希臘・羅甸の古典的教養が生と學とのために如何に重要であるかを懇々と說かれ、演習に於てもプラトンやアリストテレスの原典に就て直接に指導せられた。特に菊池先生には、希臘語の初步からプラトン研究に至るまで、日夜手を取つて教導せられ、往年の私塾を偲ばせる様なその情愛と鍛錬とによつて、私の勉學は根本的に方向づけられた。私はこれ等の諸先生が本書の如き企てを寧ろ叱責せられるであらうことをひそかに恐れながら、それにも拘らず將來の一層大いなる鞭撻を受けるために、敢て未熟なる自己を表現し、同時に生涯の努力を以てしても報い切れぬ洪恩に對して、謝意の一端を表明する次第である。

序言

なほ本書の上梓に當り、校正や年表・索引の作製等に高師生徒の協力を得たことが少くない。併せ記して謝意を表する。

昭和九年五月

石山脩平

欠

MISSING

教育段階の哲學的基礎……五三〇
教育段階の辨證的性格……五三六
〔三〕プラトーンの教育方法論
ソークラテース的方法のプラトーン的自覺……五三八
對話法の可能根據としての想起說……五四一
想起說提唱の教育的動機……五四三
對話法の過程と想起說の證明……五四五
對話法の廣狹二義とその教育的意義……五五〇
想起の廣狹二義とその教育的意義……五五四
プラトーンの史的地位……五五八
第五節　クセノプオーンとイソクラテース
一　クセノプォン
その略歷及び著書……五六〇
その教育思想……五六三
二　イソクラテース
その略歷及び著書……五六六
その教育事業……五六七

第六節　アリストテレース
一　アリストテレースの生涯
家系及び幼時……五六八
アカデーメイアに於ける修學……五六九
小亞細亞遊歷……五七〇
アレクサンドロス大王の教育……五七一
リュケイオンに於ける教育……五七二
晩年の不遇……五七四
二　アリストテレースの教育思想
アリストテレースの教育思想の取扱方……五七五
アリストテレース形而上學の教育的意義……五七五
アリストテレース心理學の教育的意義……五七七
アリストテレースの倫理說と教育……五八四
アリストテレースの國家論と教育……五八四
一般陶冶と職業陶冶……五八五
教育の段階……五八六
アリストテレースの史的意義……五八八

第四章　新希臘時代第二期(世界主義時代)
第一節　希臘文化の世界化
世界主義時代……五九〇
希臘文化の世界的傳播……五九一
第三節　文化の中心とその教育的職能
アテーナイの諸學派……五九二
アカデーメイア學派……五九三
逍遙學派……五九三
ストア學派……五九四
エピクーロス學派……五九五
アテーナイの大學……五九六
アレクサンドレィアの學府……五九七
ペルガモン其他の中心地……六〇〇
第三節　思想界の大勢とその教育的意義
世界主義時代の思想界……六〇〇
ストア學派の思想……六〇一

エピクーロス學派の思想……六〇四
懷疑派の思想……六〇七
世界主義時代思想界の全體的特色……六〇八
希臘より羅馬へ……六〇九
結語 希臘教育の全體的特質
附錄
第一 希臘教育史年表……一
第二 希臘教育史研究文獻……一〇
第三 希臘教育史索引……一七
卷末 附圖

圖版目次

1 クレーテー島ニ於けるクノーソス王宮址(前一五〇〇年頃のもの)……一三
2 クレーテー島の陶器(前二〇〇〇年頃のもの、ツアクロより發堀、ヘラクレイオンのクレーテー博物館所藏)……一三
3 ティリュンスに於ける婦人の狩獵(後期ミュケーナイ藝術を代表する壁の浮彫、アテーナイの國民博物館所藏の斷片によつて、ゲルハルド・ローデンヴアルド氏の再構成せるもの)……一五
4 トロイア城址の東面城壁(前面に見えるのは第八層)……一六
5 トロイアの成層の推定圖(Iは前史時代、Vはミュケーナイ時代、IXは羅馬時代の層)……一六
6 彈唱しつゝあるホメーロス(ホメーロスが歌を以て外國の船夫達を魅了する圖、フイリポトウ畫)……一五
7 ホメロースの胸像(ナポリ國立博物館所藏)……一四
8 三女神とパリスの裁判(ヘルメースに導かれてパリスの前に進むアプロディテーとアテーナーとヘラ、希臘花瓶の繪)……一七
9 アマゾーン女人軍の戰(前五〇〇年頃のアッティケー州の花瓶の繪、ナポリ國立博物館所藏)……五〇

10 オデュセウスとセイレーネス(大英博物館所藏の花瓶の繪)……三七
11 神々と巨人達との戰(前五〇〇年頃のアッティケー州の花瓶の繪、伯林國立博物館所藏)……九四
12 スパルタの遠望……一〇三
13 スパルタ青年の角力……一一八
14 アテ・ナイの遠望(ヘルマン・フォーゲル畫)……一二四
15 立法者ソロー(ヘルマン・フォーゲル畫)……一三三
16 アテーナイの學校(希臘の皿にドゥリスによつて畫かれた繪)……一四一
17 希臘學童の蠟板習字(紀元後四・五世紀頃のもの、伯林國立博物館所藏)……一四一
18 アテーナイの體操敎習所(前五世紀頃のアッティケー州の花瓶の繪、大英博物館所藏)……一四三
19 アテーナイの青年の騎馬行進(パルテノーンの浮彫)……一四五
20 オリュムピアの平面圖……一五六
21 オリュムピア競技優勝者の凱旋(ロイテマン畫)……一六三
22 オリュムピアの遺跡……一六六
23 埃及に於けるピュタゴラス……一九一
24 ペリクレース(プェイディアス時代の大理石胸像、バチカン博物館所藏)……二〇五
25 パルテノーン……二〇五
26 ディオニュソス劇場……二〇六
27 アイスキュロス……二〇七
28 ソプォクレース……二〇八
29 エウリーピデース……二〇九
30 ソークラテース……二一八
31 臨終のソークラテース……二七一
32 プラトーン(ナポリ國立博物館所藏の胸像)……四四〇
33 アカデーメイアに於けるプラトーンとその學徒……四四八
34 プラトーンに於ける洞窟の譬喩……五〇八
35 プラトーンに於ける認識の段階……五三五
36 イソクラテース……五六六
37 アリストテレース……五七三
38 アレクサンドロス大王(一八三一年ポンペイに發見されたる象眼細工)より。
ナポリ國立博物館所藏……五九一
39 アレクサンドレイアの平面圖……五九八
40 ペルガモンの公共營造物……五九九
41 エピクーロス……六〇五

西洋教育史〔第一卷　希臘編〕

序說　希臘教育史の地位とその時代區分

一　希臘教育史の地位

西洋教育史の原型　希臘民族の教育的業績は、一般文化に於けると同樣に、他の古代諸民族のそれに比べて拔群の光輝を放ち、爾後の西洋教育史全體を貫く一大潮流の源泉をなしてゐる。更に、羅馬中世及び近世の教育事實竝びに教育思想の諸形態が、希臘に於けるそれ等の變容乃至發展として理解せられるといふ意味から、吾々は希臘教育史上の諸契機をば、西洋教育史全體の謂はば原型的なるものとして取扱ふことが出來るであらう。固より希臘民族と雖も完全無缺ではなく、又時代の古さの故に免れ難き幼稚未開の側面を具へ、特に地理的障壁と種族的偏見とが生み出せる不斷の對立抗爭に禍せられて、彼等の歷史の大部分

1) J. Burckhardt, Griechische Kulturgeschichte. Bd I. S. 11.

は紛亂と暴虐の歴史でありベックの言へる如く、「希臘民族は多くの人々の信じてゐるよりも遙かに不幸であつた。[1]」然しながら彼等の面目は、斯くの如き古代諸民族に共通なる暗黒面によつて抹消せらるべきではなく、寧ろその間に輝き出でてそれを照破し美化するかの如き一大光耀の故に、益々讃仰せられねばならぬ。吾々はこの光輝ある業績が、西洋文化史竝びに教育史を貫いて、如何に力強き生命を生きて來たかを、先づ一瞥したいと思ふ。

希臘文化の地位 周く人々の認める通り、科學・哲學・藝術・政治組織等を始めとして、文化の殆んどあらゆる領域は希臘にその始源を有する。假令他の諸國例へば埃及・ヴォイニケー（フェニキア）其他の諸國に端を發した西洋文化が少くないにもせよ、それ等は希臘民族の手に受取られることによつて、豊かに高く培はれ、洗錬・深化・整頓せられて、永遠の生命を得るに至つたのである。そしてそれ以後に勃興した諸々の文化は、或は自らの助長や基礎づけに希臘を學び、或は自らの行詰りを希臘への回顧によつて打開し、斯くて新しき文化の深化・向上・更生は常に希臘文化への復歸を、否寧ろ希臘的精神の發展を物語るものであつた。即ち第一に羅馬國民の卓抜の功績として讃へられる武力及び法制も、その始源は希臘より學び受けたものであり、その整備・充實も、それによつて世界を蓋へる大版圖を開拓・統制し、その上に希臘文化を移植し繁榮せしめる地盤を用意するに役立つた觀がある。實に、捕へられたる希臘は猛き勝利者を捕へ、そして學藝を荒れたるラチウムに持込んだ[1]のであつて、羅馬武力の希臘征服はやがて希臘文化の羅馬征服に外ならなかつたのである。次に基督教の興起は希臘羅馬の異教文化に對立する新契機を生み出し、そこに凡そ人間性に於ける、そして又歐洲文化の潮流に於ける所謂「異教的・基督教的二元[2]」を顯現するに至つたのであるが、それにも拘らず、基督教が理論的根據を以て歐洲人の内面生活を規制し得るためには、希臘哲學を學び取つて自らに奉仕せしめねばならなかつた。更に近世文化の動因となれる文藝復興運動が、當初に於ては羅馬文化を、やがてはその本源たる希臘文化を復活せしめたものであることは言ふまでもなく、新興ゲルマン民族は、その初め基督教に歸依することによつて蠻野粗笨の域を脱したのであるが、それのみでは未だ十分に自我の要求を充足し得ず、遡つて希臘精神に逢着して眞に全幅の共鳴を感じ、發剌たる進展を遂げ得たのである。而も最近の藝術及び一般思想界に於けるヴィンケルマン、ゲーテ、フムボルト等の新人文主義運動を想ひ、一代の巨人ニーチェの名と勢力とを偲び、又哲學界に於けるコヘン、ヴィンデルバント、ブッセル、ハイデッガー等の思想の基調を考へる者は、希臘精神が今日なほ如何に強く歐洲人の精神生活を支へてゐるかを認めざるを得ないであらう。希臘民族の文化史的業績は、實に斯かる永遠の潮流と豊富なる形態とを、源流として蓄へ原型として用意した點に存するのである。

1) Graecia capta ferum victorem cepit et artis intulit agresti Latio. (Horatius, Epistulae. II. 1, 156) 2) The Pagan-Christian dualism.

希臘教育史の重要性 教育の分野に於ても亦希臘民族は、彼等の特性と環境とに制約せられた獨自の歴史的業績の中に、凡そ教育事實竝びにそれへの理論的反省が一般に取り得べき諸形態を、最も素朴に鮮明に且典型的に表現した。故に前述の如き西洋文化史上に於ける希臘的精神の復興發展は、その都度希臘的教育の理想・内容乃至方法を蘇らしめて、それが西洋教育史上の一大基本潮流をなして來たのである。(これを具體的に指摘することは本書の主要課題である)。尚最近の教育思想界に於けるヴィルマン、ナトルプ、シュプランガー等の所論を底深く捉へる者は、そこに希臘精神の教育的生命が愈々新に生かされつゝあることを知るであらう。斯くして恰も希臘哲學史が、知識内容としては比較的貧弱であるにも拘らず、哲學的思索の典型的形式を展開させてゐる點に於て、全哲學史中最も教授價値のある部分とされてゐる如く[1]、希臘教育史も亦教育事實が取り得べき諸々の様相、教育思想の構成さるべき諸々の契機を、單純ながらも模式的に提示して、教育者及び教育學徒への常に新鮮なる刺戟・指針を與へてゐる。吾々が西洋教育史の出發點に於て、希臘教育史をば、從來の通史の慣例を破つて遙かに詳しく取扱はんとする所以は、上述の如き希臘民族の偉業に對する感激に基づくと共に、又斯かる取扱によつてのみ西洋教育史の眞に内面的なる理解を期し得ると信ずるからである。

1) Windelband, Lehrbuch der Geschichte der Philosophie. 1921. S. 22.

二 希臘教育史の時代區分

希臘教育史の時代區分 希臘教育史は、政治史並びに一般文化史を背景として、通常次の如き時期に分たれる。即ち先づ全體を古希臘時代と新希臘時代とに大別し、その各々を更に二期に小分して、結局四つの時期に區分する。[1]

(一)古希臘時代第一期　前史時代　前十世紀頃まで
(二)古希臘時代第二期　古典時代前期　前六世紀終頃まで
(三)新希臘時代第一期　古典時代後期　前四世紀中頃まで
(四)新希臘時代第二期　世界主義時代　前二世紀中頃まで

古希臘時代第一期 古希臘時代の第一期は前史時代であつて紀元前十世紀頃までを指す。この時期に就いては歴史的記錄の徴すべきものがなく、主としてホメーロスの詩により、創業期希臘民族の活動や思想が想察せられるに過ぎないから、これを「ホメーロス時代」とも名づけ、それはまた諸々の英雄達の活躍を傳へてゐることから「英雄時代」とも呼ばれる。この時期に關する教育史は、主としてホメーロス(併せてヘーシオドス)の詩に現はれた世界觀・人生觀を通して、希臘教育史を一貫する基調としての民族精神を捉へると共に、これ等の詩篇が直接に

1) P. Monroe, A Text-Book in the History of Education. 1923. p. 61.

指示せる當代の教育事實及び教育思想を探し求めて、事實上希臘教育史の發端たらしめることを任務とする。然し吾々はこれ等の詩篇の背景を知るために、希臘民族進出以前にエーゲ世界を占據してゐた先住民族の文化並びに斯かる舞臺に希臘民族の進出して來た徑路を概觀することを、前史時代の叙述内容に加へねばならない。

古希臘時代第二期　古希臘時代の第二期を以て始まる歴史時代は所謂「ドーリア族侵入」の成就せる頃を發端とする。即ち前十五世紀頃より南下し初めたるドーリア族は前十一世紀頃までにペロポンネーソス半島に根據を固めてスパルタを建設し、更に早くより南下せるイオニア族もこの頃までにアテーナイ及び小亞細亞中部地方の植民都市を建設し、エオリア族も亦小亞細亞北部地方を占據して、こゝに希臘諸種族の相競へる發展を現出したのである。この時期は、希臘民族が都市國家[1]を地盤として獨自の特色ある生活形態を維持したことの故に、吾々はこれを古典時代に數へ、且次の思想的古典時代と區別するために古典時代前期と名づける。教育史はこの時期に關して通常、國家主義教育の原型としてのスパルタの教育と、自由人の教養の原型としてのアテーナイの教育とを取上げる。然し吾々はこの外に、全希臘民族を結合して國際的教育の偉大なる效果を擧げた所の汎希臘的祝祭、特にオリュムピア競技の事實とその教育的意義とを考察しなければならぬ。更に古來希臘社會の一般的

1) πόλες.

風習として教育的に重要なる意義を帶びて居り、且後のソークラテース、プラトーン、アリストテレース等の教育思想の主要契機となつた所の社會的事實即ち愛者（エラステース）と愛弟子（パイデイカ）との同性愛的關係が、吾々の教育史に於ては大いに注意せられる。そして又希臘本土に先立つて學的に興隆した植民地の所謂自然哲學者達の活動及び思想をば、一面にはそれ自體の重要性の故に、他面には次の希臘黄金時代の文化と教育との源泉たる意義に於て、特に教育的觀點より概觀しなければならぬ。

新希臘時代第一期　新希臘時代の第一期は前五世紀初頭の波斯戰役（前五〇〇年—四七九年）を期としてアテーナイが希臘の政治的竝びに文化的中心地となつた頃から始まる。特にペリクレース治下のアテーナイが文化のあらゆる領域に於て空前の繁榮を示したことは、この時期の代表的特質であるから、これをまた「ペリクレース時代」と呼ぶことも出來る。教育史に於ては、このペリクレース黄金時代の後を受けて、希臘人の生活と思想とが漸く爛熟し混亂し頽廢しつゝあつた頃に、それへの批判的意義を帶びて現はれた所の教育思想が前景に立つ。而も希臘教育史の源流的原型的意義は就中この時期の教育思想によつて荷はれてゐるのである。即ちソフィステース等の教育活動と教育思想、それを機緣として發揮せられたソークラテースの教育者的人格と事業と思想、それ等の意義の把握と深化とに向けられたプラトーンの

思索、それを更に學的概念と體系とに整序せるアリストテレースの業績、これ等は希臘教育史上の精華として、爾後の教育史に幾多の原型を供し、永遠に盡きざる源流をなしてゐる。吾々の教育史はそれ故にこの時期の叙述に最大の努力を拂はねばならぬ。通常希臘の古典時代と呼ばれるのは、ペリクレース黄金時代を代表とするこの新希臘時代第一期を指すのであるが、吾々はさきに古希臘時代第二期を古典時代前期と名づけた事情により、この所謂古典時代をば古典時代後期とする。斯く前後二期を併せて廣義の古典時代に含ませる所以は、これ等の時期に於ける希臘民族が、未だ世界的傳播と混化とに陷らざる獨自の希臘的生活と思想とを、それ自らの舞臺に於て典型的に培ひ發揚したからである。(註)

新希臘時代第二期 新希臘時代の第二期は、右の古典時代の後を承けて、希臘民族と彼等の

1) Classicus. 2) Servius Tullius(r. 578–34 B.C.)

註 「古典[1]的」とは本來「第一級」を意味し、それは羅馬の第六代の王セルウィウス・トゥルリウス[2]が市民を土地所有額によつて五階級に分つた場合の第一階級を指した語である。藝術史上に於けるこの語の用法は多義であるが、何れにしても模範的・典型的なる優越性がそこに含まれてゐる。吾々は希臘文化が他文化との混化による質的低下を示す前の、純粋な、本來の、希臘的面目を保てる場合にこれを古典的と呼び、その中に都市國家時代の生活と黄金期の思想とを含ませたのである。

1) Ἕλληνες. 2) πολίτης. 3) κοσμοπολίτης. 4) ἑλληνίζειν.
5) The Cosmopolitan Period. 6) Droysen(1808–84), Geschichte des Hellenismus.(1836–43) 7) The Hellenistic Period. (Der Hellenistische Zeitalter.)

文化とが、その本來の鄉土を失つて世界的に傳播し、他の諸民族特に羅馬國民の中に融け入つた時期である。」卽ちカイローネイアの一戰(前三三八年)を劃して希臘民族の自立は失はれ、アレクサンドロス大王の遠征(前三三四年—三二三年)を通じて彼等とその文化とは亞細亞・亞弗利加に擴められ、羅馬の希臘征服(前一四六年)を期として希臘文化の羅馬征服は促進せられた。希臘教育史の最終期は斯くして前四世期中葉より前二世期中葉までを含む。

「この時期に於て希臘民族[1]は從來の都市國家の「市民[2]」たることを失つて「世界の市民[3]」となり、而も世界を希臘化することによつて世界を獲得した。吾々はそれ故に「世界市民時代」の意味に於てこれを「世界主義時代[5]」と名づけ、又史家ドロイゼン[6]に從ひ、世界の「希臘化時代」の意味に於てこれを「希臘主義時代[7]」と呼ぶ。このふ實質的變化、その主たる中心地に於ける研學の施設狀況等を背景として、教育事實の上に齎らされたる新徵候を捉へ、又この時期の哲學を代表するストア派、エピクーロス派竝びに懷疑派が教育思想的に如何なる意義を有するかを考察し、斯くして衰亡途上の希臘を教育的觀點に於て描き出すことを任務とするのである。

第一章 古希臘時代第一期〔前史時代〕

第一節 先住民族の文化

エーゲ世界の先住民族 希臘民族が古代諸民族中拔群の文化的水準に達し得た所以は、固よりその卓越せる天分に因るのであるが、他方また彼等の進出して來た舞臺に、先住民族の高き文化が既に開拓されてゐて、彼等が(移住の當初は却つてこれを破壞した樣であるが、やがて)よくこれを學び採つたためである。この點は、例へば先進文化の殆んどなかりしチベリス河畔に國を建てた羅馬人が、比較的長い間遲々たる文化の道程を辿りつゝあつた事情と對照して注目すべき事實である。希臘民族がバルカン半島とその附近の島々竝びに小亞細亞の沿岸地方に現はれて來る前に、これ等の「エーゲ世界」は先住民族によつて占められ、獨自の文化を發展せしめて所謂「エーゲ文明」を形成してゐた。この先住民族は、古くはヘーロドトス[1]がカーレス[2]」(カリア人)又は「レレゲス[3]」と呼び、近くはクレッチメル[4]が言語學上の立場から「小亞細亞人」と名づけた種族であり、一般には「エーゲ人又は(彼等の子孫が地中海岸に榮えたことから)「地中海人種」と呼ばれてゐる白色人種であるが、その起源や系統は明かでない。

1) Herodotos, I. 171. 2) Κᾶρες. 3) Λέλεγες. 4) P. Kretchmer, Einleitung in die Geschichte der Griechischen Sprache, 1896. S. 28.

エーゲ文明の發見 所謂「エーゲ文明」を發見して希臘文化史に重要なる前史を提供したのは、近世考古學の功績である。彼は初め商人であつたが、獨學を以て好事家的考古學者となり、一八七〇年及び一八八二年にトロイアを、一八七六年にミュケーナイを、一八七八年にイタカを、一八八〇年にオルコメノスを、一八八四年にティリュンスを發掘し、これ等の發掘品は大部分伯林の民族學博物館に寄贈し、且夫々の研究成果を著書に於て發表した。シュリーマン[1]の外、獨逸のデルフェルド[2]、英國のエヴァンス[3]其他の學者の努力も加はつて、前記諸地方の外に、クレーテー島を始として、ペロポンネーソス半島のスパルタ、プュロス、アッティケー州のアテーナイのアクロポリス、エリス州のオリュムピア、小亞細亞のミレトス等も發掘せられ「エーゲ文明」の廣汎なる範圍が明かにせられた。今これ等の文化をその主たる中心地によつて分類すれば大略次の如くに推定せられる。

クレーテー文化 「エーゲ文化の第一の中心地はクレーテー島[4]である。この島は亞細亞・阿弗利加・歐羅巴の交叉點に位し、殊に古代文化の先進國たる埃及へは、ホメーロス詩篇によるも僅か五日航程の近距離にあつてその刺戟影響を受けたらしく、且氣候地味等も文化の基礎條件として十分なるものがあつた。クノーソス[5]とプァイストス[6]との兩都市がその中心であるが、就中クノーソスに都せる代表的支配者ミノース[7]王家の名に因んで、この島の文化の推移は、初期ミノース

1) H. Schliemann (1822—90) 2) W. Dörpfeld (1856—) 3) A. Evans (1851—) 4) Κρήτη. 5) Κνωσσός. 6) Φαιστός. 7) Μίνως.

1) Kamares style.

1. クレーテー島に於けるクノーソス王宮址

時代(前三〇〇〇年—二〇〇〇年)、中期ミノース時代(前二〇〇〇年—一六〇〇年)、後期ミノース時代(前一六〇〇年—一二〇〇年)の三期に小分せられる。初期ミノース時代の文化は銅製の武器、道具類や線描的裝飾の土器や象形文字を以て象徴せられる。中期ミノース時代の文化は所謂カマレス式[1]の土器(イダ山中のカマレスと呼ばれる洞穴から發見されたもの)を以て特徴づけられ、それには複雑な文様と種々の彩色と花卉や海棲物の生動的な描寫とが表はされてゐる。この時代に象形文字は畢線文字に改造せられたが、今日なほその讀解は不可能である。又この期に於てクノーソスとファイストスとに建てられた宮殿は、全島が一つ又は二つの強大な國家として統制されてゐたことを想はせる。そしてこの島の宮殿が城廓を具へてゐないことは、航海術の一般的未熟若くは外的脅威を感じなかつたことを暗示してゐる。後

1) Hagia Triada. 2) Ζεύς. 3) Εὐρόπη.

2. クレーテー島の陶器

期ミノース時代はクレーテー文化の極盛期であつて、所謂ハギア・トリアダ[1]に於ける宮殿、その壁畫、滑石製の容器の浮彫等はこれを偲ばせる材料である。それ等は觀察の正確緻密さと、表現の生動性とに於て、當代の畏敬すべき美術眼を窺はせると共に、中には又漸くにして形式の固定化、色彩の錯雜不鮮明化等による文化爛熟の徴候を示せるものもある。今これ等三期を通じてクレーテー文化の主要契機を摘記するならば、先づ支配者たるミノース王はゾイス[2]とエウローペー[3]の子であり國王且立法者でクノーソスに都し、ゾイスと親交を續けてゐたと傳へられてゐる。この傳說はミノース王家の強き權力と希臘民族との平和的交渉を物語るものと思はれる。又ファイストス附近

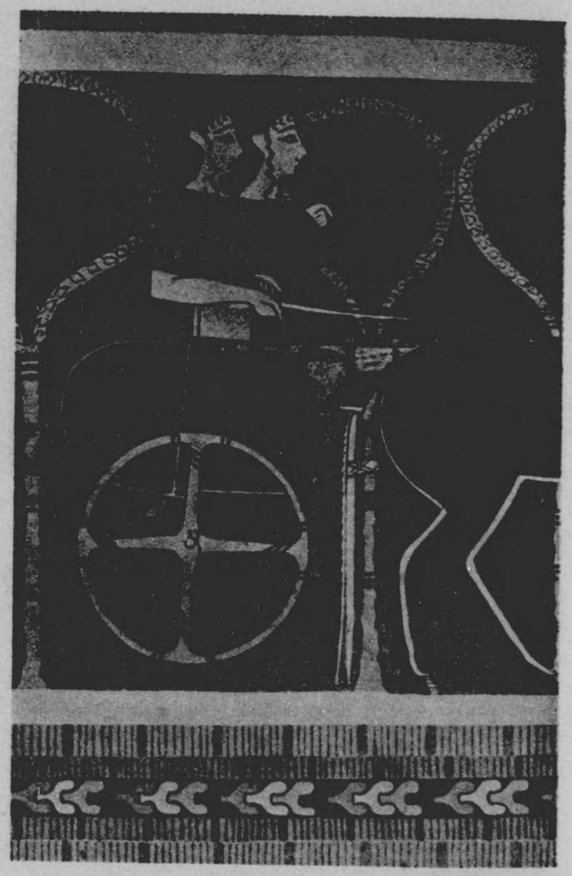
に數哩に亙つて列立せる墳墓は王權を中心とする貴族階級の勢力を示し、宮殿內部の倉庫や搾油室は王權及び貴族特權の基礎が土地の農產物(穀物·無花果·葡萄等)に存したことを證明し、王宮の側にある棧敷らしき場所は貴族間に行はれた騎士的訓練としての武術試合を想像せしめる。宗教的崇拜の對象としては、牡牛の形をしたミノース、兩刃の斧ラブリュス[1]、牛頭人身のミノタウロス[2]等がある。ラブリュスの禮拜場と思はれる迷宮ラブリントス[3]にミノタウロスが封じ込まれてゐて、アテーナイから毎年男女兒各七人宛の人身御供がこれに獻ぜられたといふ傳說は、アテーナイに對するクレーテー島勢力の優越を暗示するものであらう。

ミュケーナイ文化 エーゲ文化の第二の中心地は希臘の本土アルゴリス州なるミュケーナイ[4]である。それは相接近せるティリュンス[5]と共に、クレーテー島や埃及と希臘本土との交通の要衝に當つてゐたものと思はれ、これ等先進文化の刺戟を受けつゝも、又希臘本土固有の制約を負うて、獨自の文化を發展せしめ、前一五〇〇年乃至一二〇〇年頃に大いに榮えた。これが所謂「ミュケーナイ文明」である。後世の希臘人が巨人キュクローブス[6]の作と考へた程に巨大な石を積み重ねた「キュクロープス城壁」、それに附屬した「獅子門」、各種の黃金製器物を納めた竪穴墓傳說の王アガメムノーンの父アトレウスの墓と傳へられる巨大な穹窿墓、堅固な城壁に圍まれたティリュンスの城塞等の遺跡によつて、强大な、而も相對立抗爭せる王權、勢力ある貴族階級、死者

1) Labrys. 2) Minotauros. 3) λαβύρινθος.
4) Μυκῆναι. 5) Τίρυνς. 6) Κύκλωψ.

1) Ὀρχομενός. 2) Vaphio. 3) Καδμεία. 4) Τροία.

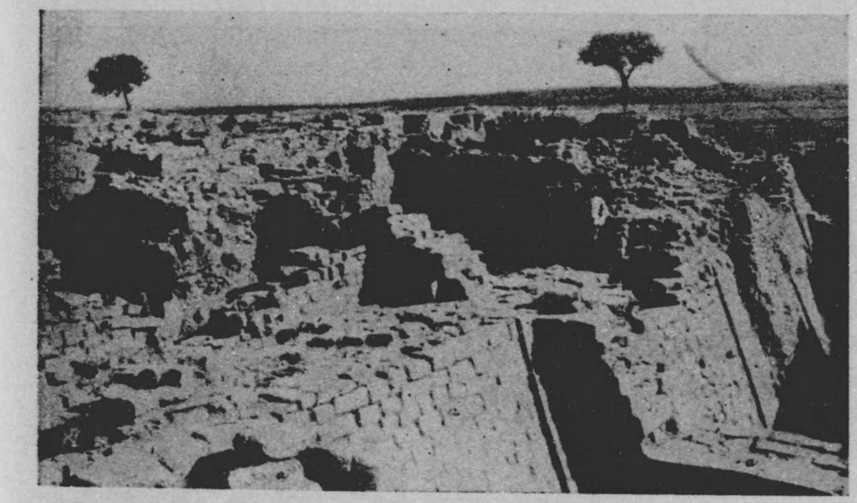
に對する崇拜等の文化的特色を窺ふことが出來る。更にボイオティア州のオルコメノス[1]に發見された「ミニュアスの寶庫」と呼ばれる圓頂式墳墓、スパルタ西岸のヴァフィオ[2]で發掘された黃金杯、テーバイのカドメイア[3]丘上の宮殿、アッティケー州の各地に遺れる穹窿墓等がミュケーナイ、ティリュンスの遺跡と同一系統に屬することによつて、ミュケーナイ文化の廣汎な範圍が想像せられるのである。



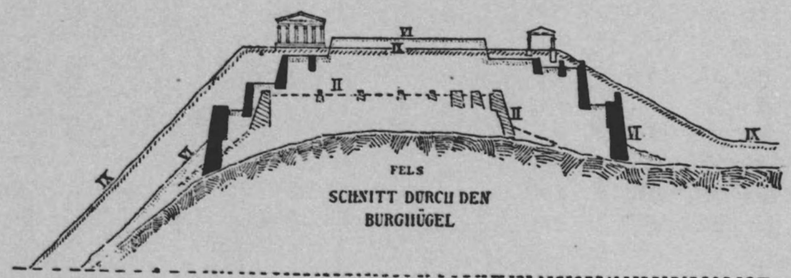
3. ティリュンスに於ける婦人の狩獵

トロイア城址 小亞細亞の北部なるトロイア[4]の遺跡も亦ミュケーナイ文化の系統に屬するトロイア文化を偲ばせる。ホメーロス詩篇を現實に裏書するこの貴重な證跡は、一八七〇年

1) F. Calvert.



4. トロイア城址



5. トロイアの成層の推定圖

シュリーマンによつて初めて地上に暴露せられた。彼はフランク・カルベルト[1]の説を信じて、このヒサルリクの丘を掘り下げ、漸次に九層の都市城趾を發見した。それは實に第一層新石器時代、第二層銅器時代を經て、第九層羅馬時代に至る長期間の都市建設及び破壊の遺跡である。シュリーマンはこの第二層都市を以てホメーロス詩篇のトロイア戰爭により破壊されたものと考へたのであるが、後にデルフェルドの研究により、それは第六層都市であることが證明せられた。卽ち第六層より發見せられた遺物がミュケーナイ文化の系統に屬し、且ホメーロス詩篇の內容と照應してゐるのである。

第二節　希臘民族の進出

希臘民族のエーゲ世界進出　希臘民族は、他の歐洲諸民族と共に、所謂印度歐羅巴人種の系統に屬する。この人種は、南方「セム人種」と相對して、世界の民族の二大系統の一をなしてゐる。それはもと西方亞細亞カスピ海東北方の草原に住んでゐたものであるが、牧畜を營み水草を逐うて東西の二方向に進出した。卽ち一は東方に移つてメディア、波斯、印度等の「アーリア族」となり、他は西方に移つて希臘、伊太利、ゲルマニア、スラヴ等の諸民族となつたのである。斯くて希臘民族の進出は印度歐羅巴人種の西方發展の一部であり、彼等はカスピ海の東岸より黑海の西岸を經てダニューブ河畔の水草を逐ひつゝ次第にバルカン半島の方向に進み、やがてオリュムボスの白雪を仰ぎ、テッサリアの綠野を過ぎ、つひに紀元前二千年頃には紺碧のエーゲ海に達して、こゝに初めて先住民族の文化と接觸した。

希臘民族のバルカン半島占據並びにエーゲ世界獲得は、紀元前第二十世紀頃から第十世

紀頃までに亙つて成就せられた大事業であり、それは彼等の中の代表的種族によつて分擔せられ、且幾度かの段階を經て行はれたものと思はれる。その種族の種類と進出の順序とに關しては明確な斷定を下し得ないけれども、吾々は諸說を綜合して大體次の如くに推定したいと思ふ。

アカイア族の進出　先づ彼等の先鋒ともいふべきアカイア族(アカイオイ[1])は希臘本土を次第に南下してペロポンネーソス半島に入り、更にクレーテー島を掠奪し、小亞細亞の沿岸にまで發展し、斯くして殆んど全希臘の地に足跡を印したものと思はれる。この事實はホメーロス詩篇に於て「アカイオイ[2]」若くは「全アカイオイ[3]」といふ呼稱が希臘人の總稱に用ひられ、且彼等の住所たる「アカイアの地[4]」がペロポンネーソス半島若くは全希臘に名づけられてゐることによつても想像せられる。このアカイア族が果して如何なる資性であり、如何なる文化を有したかに就いて吾々は殆んど知る所がない。蓋し彼等の文化は、やがて更に新來の希臘民族が到着した頃には、既に爛熟を過ぎ衰頽の途に向つてゐたからであらう。

イオニア族の進出　これより先アッティケー州(及び恐らくは又エウボイア州)には土着のアッティケー族の外にイオニア族(イオーネス[5])が住んでゐたのであるが、上述のアカイア族の南下に逐はれてアッティケー州に逃げ込んだ諸民族のためにそこが狹隘となり、エーゲ海の諸島並びに小亞細亞中部西岸の所謂イオニア地方へ進出した。トゥキュディデースによれば、アッティケ州は土地が痩せてゐるため希臘民族相互の爭奪の的となることを免れて安全地帶となり、そのために又諸方から逐はれた民が多く入り込み狹隘を告げたのでイオニア族の植民が行はれたとのことである。[1] このイオニア族は希臘民族の中最も明朗活潑にして進歩的な特性を具へ、殊に植民地の自由な生活態度によつて、最も純眞な囚はれざる文化を發展させ、斯くて當初のイオニア文化とは、希臘文化の精華を代表するものとなつたのである。

1) Ἀχαιοί.　2) Ἀχαιῶν (Il. VII. 403)　3) παναχαιῶν (Il. II. 404, VII. 73)　4) Ἀχαιΐδα γαῖαν (Il. I. 254), Ἀχαιΐδος (Cd. XIII. 249)　5) Ἴωνες.

エオリア族の進出　アカイア族の南下、イオニア族の小亞細亞發展等と時を同じうしてエオリア族(アイオレイス[2])も亦バルカン半島のテッサリア地方から、先づレスボス島に移り、それよりキュメー市方面に進出し、更に小亞細亞北部西岸の所謂エオリア地方に發展した。この種族は素朴で文化程度が割合に低く、彼等の植民地も概して農業植民地としての特色を保つてゐた。

ドーリア族の進出　以上三種族の進出を希臘民族の第一次進出として、次に第二次進出ともいふべき劃期的事件が所謂「ドーリア族侵入」によつて行はれた。このドーリア族(ドーリエイス[3])は紀元前十五世紀頃にはペロポンネーソス半島に達して次第に同族の先輩たるアカイア族

1) Thoukydides. I. ii. 6.　2) Αἰολεῖς.　3) Δωριεῖς.

を征服し、十四世紀頃には海を超えてクレーテー島に渡り、クノーソスを攻略し、又附近の島嶼をも占領し、進んで小亞細亞の南部西岸地方にも發展し、十一世紀頃までに彼等の地盤は略々固定したものと思はれる。彼等は周く知られてゐる通り、質實素朴にして保守的性質を有し、當初は先住民族の文化を破壞して自ら低き水準に留つてゐたが、やがてスパルタを中心とする軍國主義的都市國家を建設し、强固なる實力と徹底せる自己統制とによつて、希臘史の上に至大の役割を演じたのである。

斯くの如くにして希臘民族の前史時代はアカイア、イオニア、エオリア及びドーリアの四種族の活動によるエーゲ世界獲得の大業を以て充たされてゐたのであるが、これ等の中、後の三種族がバルカン半島、エーゲ海の島々及び小亞細亞の沿岸に夫々の領域を占めて落着いた頃を以て前史時代が終り、歴史時代が始まつたのである。これ等歴史時代の登場種族は同時に各々の特色ある言語を以て現はれ、そこに希臘の三大方言たるイオニア語とエオリア語とドーリア語とが生じた。

希臘語の方言 希臘語の方言を、その行はれた範圍と時代とそれによつて著された主要文獻とに就いて概觀すれば次の如くである。第一にイオニア語はアッティケー州並びにエーゲ海と小亞細亞とに於けるイオニア植民地で行はれた。

これは時代の推移によつて新舊二種に小分せられる。古イオニア語はホメーロス(前八五〇年—八〇〇年頃)及びヘーシオドス(前七五〇年頃)の叙事詩に用ひられてゐるもので、別名叙事詩語とも呼ばれる。新イオニア語はヘーロドトス(前四八四年—四二四年)の史書を以て代表せられてゐる。尙イオニア語の一種なるアッティケー語は波斯戰役後黄金期アテーナイを中心として行はれたもので、悲劇詩人アイスキュロス(前五二五年—四五六年)、ソフォクレース(前四九六年—四〇六年)、エウリピデース(前四八五年—四〇六年)、喜劇詩人アリストファネース(前四五〇年—三八五年)、史家トゥキュディデース(前四六〇年—四〇〇年)、哲學者プラトーン(前四二七年—三四七年)等によつて代表せられ、斯く希臘古典の大部分がこの方言を以て著されてゐることから、これは古典的(標準的)希臘語とせられてゐる。第二にエオリア語はテッサリア州、ボイオティア州、レスボス島及び小亞細亞のエオリア植民地に行はれたもので抒情詩家アルカイオス(前六一〇年頃)、サッフォー(前六〇〇年頃)等の作品に用ひられてゐる。第三にドーリア語は北部希臘、ペロポンネーソス半島、クレーテー島、シケリア島、伊太利半島南部の所謂大希臘地方等に行はれたもので、抒情詩人ピンダロス(前五二二年—四四八年)、田園詩人テオクリトス(前三一〇年—二四五年)等によつて代表せられてゐる。因に希臘末期に於てアッティケー語及び其他の希臘語に小亞細亞、埃及等の言語が混じて所謂「共通語」[1]を生じた。アリストテレース(前三八四年—三二二年)の著書はアッティケー語より共通語への過渡期を示し、新約聖書原典は共通語の代表をなしてゐる。

1) ἡ κοινή (διάλεκτος).

1) Ἑλλην. 2) Ἕλληνες. 3) βάρβαρος. 4) Χάος. 5) Δευκαλίων.
6) Φθία. 7) Πύρρα. 8) Αἴολος. 9) Δῶρος. 10) Ἀχαιός. 11) Ἴων.

汎希臘的同胞意識 希臘民族は上述の如き種族的小區分と方言的相違とを以て、競爭的に對立して現はれたのであるが、それにも拘らず、斯かる對立の根柢に汎希臘的同胞意識を藏して相結ばれてゐた。卽ち彼等は共に同一の祖先ヘルレーン[1]の血を分けたものとして自らをヘルレーネス[2]と誇稱し、そして多少の方言的相違にも拘らず同じ希臘語を語るヘルレーネスをば言語の異なれる異民族(バルバロス[3])から區別した。彼等の傳へた神話(その廣汎複雜な全貌を本書に掲げる餘裕はないけれども、希臘民族の同胞意識に關する部分だけ)を摘記するならば、神々の祖カオス[4]より第六代目に當るデウカリオーン[5]はテッサリアのプティア[6]の王であつたが、ゾェウスは人類の不敬虔を憤り、ノアの洪水にも比すべき大洪水を起して全希臘の住民を絶滅せしめ、唯敬虔なるデウカリオーンとその妻プュラ[7]とだけが殘され、彼等より新に人類が生み出された。その中の一人がヘルレーンで、やはりテッサリアのプティアの王となり、ヘルレーンの子のアイオロス[8]とドーロス[9]とは夫々エオリア族とドーリア族との祖となり、又ヘルレーンの當るアカイオス[10]とイオーン[11]とは夫々アカイア族及びイオニア族の祖となつた。〔後述九三頁系譜參照〕そしてこれ等デウカリオーンの後裔は何れもテッサリアを支配したとのことである。この神話は前述の如く、希臘民族が東北方より南下して先づテッサリア地方を占據し、それよりエーゲ世界の各方面に進出した史實を反映すると共に、同一祖先の血を分けたと

1) Ἑλλάς. 2) Homeros, Il. II, 684; IX, 395. 3) Τάναγρα.
4) Γραῖα. 5) Cumae. 6) Graeci. 7) Graecia.

信ずる汎希臘的同胞意識の象徴として頗る意義深きものと言はねばならぬ。

ヘラスの擴大 希臘民族は自らの住地をヘルラス[1](地又は光の意)と呼び誇つてゐた。ヘラスは初めテッサリアのプティア地方のみを指したが[2]、次にテッサリア全州に用ひられ、更にコリントス地峽以北を普ねく含み、やがて又ペロポンネーソス半島及び附近の島々にも及び、最後にはデルプォイ宗教同盟の發展と共に希臘民族の住する限りのあらゆる國土をヘルラスと稱するに至つた。このことは希臘民族發展の徑路を裏書するものとして注目に値する。

グライキアの呼稱の起源 希臘をグライキアと名づけたのは羅馬人である。卽ちボイオティア州東南部のタナグラ[3]の町がもとグライア[4]と呼ばれ、この町が伊太利のクーマイ[5]に植民したので、羅馬人はこの希臘植民地の人々をグライキ[6]と呼び、それより希臘人の住地をグライキア[7]と稱するに至つたのである。因に漢字「希臘」はヘラス(ヘルラス)のヘラの音を表はすものである。

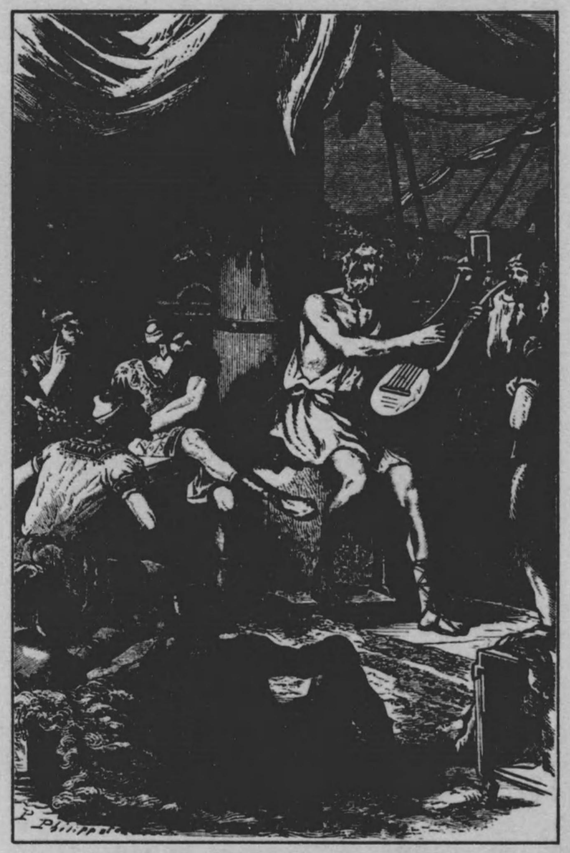
第三節 ホメーロスの詩篇とその教育的意義

一　ホメーロス詩篇に關する文獻學的諸問題

ホメーロス詩篇の重要性　上述の如き希臘民族のエーゲ世界獲得の大事業を記念する金字塔は、ホメーロス[1]の名を冠して傳へられた二大叙事詩『イリアス』[2]及び『オデュセイア』[3]である。それは單に希臘民族の[4]史を語る記念塔であるばかりでなく、歴史時代の希臘民族の精神的教養の大教科書となり、彼等の世界觀・人生觀竝びに民族精神の基調を啓培し、文學・美術の盡きざる題材を提供したものであつて、世に「希臘の聖書」と呼ばれてゐるのも決して不當ではない。

ホメーロス詩篇の文獻學的概說　遠征・創業・建國の壯圖を遂行しつゝある民族、若くは近き祖先の斯かる壯圖を記憶してゐる民族が、この壯圖に卓拔の功業を樹てたる人々を讃仰し、永くこれを子孫に語り傳へんとするは自然の情である。斯くて早くテッサリアの平原地方には、神々の住家と信ぜられた雲深きオリュムポスの嶺を仰ぎつゝ、祖先の輝かしき業績をば、神々や英雄達を主人公として想ひ描き、それを各種の詩に作つて、琴に合せつゝ王侯貴族の前に吟唱した「彈唱詩人」[4]の群が生じたものと思はれる。特にもテッサリアの英雄アキッレウス[5]・が全希臘の將卒と共に、エーゲ海對岸のトロイア[6]（若くは別名イリオン[7]）に遠征したといふ傳

1) Ὅμηρος.　2) Ἰλιάς.　3) Ὀδυσσεία.　4) ἀοιδός.　5) Ἀχιλλεύς.
6) Τροία.　7) Ἴλιον.



7. 彈唱しつゝあるホメーロス

說は、希臘民族の最も感激に充てる誇りであり、彈唱詩人達も亦この傳說を中核として、祖先の數多き功業を歌つたのであらう。そしてそれ等の詩章は前十世紀頃には小亞細亞及び附近の島々のイオニア植民地に傳へられ、そこでも彈唱詩人團によつて相傳へ朗吟せられた樣である。

斯くてイオニア地方には、天才ホメーロスの出現以前に既に斷片的に傳へられたアキッレウスのトロイア遠征詩が行はれてゐたのであつて、これが所謂「ホメーロス以前のイリアス」[1]である。ホメーロスその人は斯かる地盤に生れ、その卓越せる詩的天分と、希臘民族特にイオニア種族

の典型的個性とを以て、斷片的なる先輩の傳承を一篇の纏まつた作品に仕上げ、こゝに『イリアス』篇の原型を成したのであらう。

爾來スミュルナ[1]若くはキオス[2]地方には、ホメーロスを尊崇追蹤し、その後裔乃至門徒を以て自任せる詩人の群―所謂「ホメーリダイ」[3]が長くその業を繼ぎ、ホメーロスの原作に增補彫琢を加へて前七〇〇年頃までには、略々今日傳はれる形態に近きものを作り上げたものと思はれる。『オデュセイア』篇に就いても亦、初めトロイア攻圍戰に於ける希臘軍の賢將オデュセウス[4]の歸國冒險譚が斷片的に傳へられ、それをホメーロスが、『イリアス』篇よりも稍々後れて一篇の詩形に整へ、更にホメーリダイ其他の人々の修補を經て、今日に傳はつたものと言ひ得るであらう。

（ホメーロスその人が何時何處に生れ、如何に生活したかに就いては、諸說紛々として應接に遑なき程であり、右の二大詩篇が果してホメーロスといふ實在せる個人の原作であるか否かに就いても幾多の論議が錯綜してゐるけれども吾々は最近の通說に從つて、彼をば前九世紀頃にイオニア植民地キオス若くはスミュルナに實在せるイオニア人と推定する。その外的生活は、人々の傳へる如く貧窮であり、晩年は盲人として過したかも知れないが、その詩篇に現れた限りの彼の性格は頗る明朗快活であり、詩人に適はしき久遠の靑春的情調がそこには高く波打つてゐる。そして又彼の作品の顯著なる特徵は、如何なる詩にも優れる客觀性に存する。敍事詩の本領たる對象そのものへの拘束から來る抒情的色彩が殆んどない。傳へられる如き作者の貧窮も盲目も、彼の作品に對しては何等陰慘なる暗影を投じてゐないのである。

斯くの如くにして、一人の天才によつて代表せられた希臘民族―特にイオニア種族―の明朗潑剌たる情調と熾烈なる民族精神とは、久しき傳承に蓄へられたる豐富なる材料を洗鍊し醇化し整頓して、玆に希臘民族創業の記念塔を建設した。」それになほ所謂ホメーリダイその他無數の人々の增補彫琢が加へられたとしても、それ等の人々は皆ホメロスといふ名の下に傳はつた一人の偉大なる天才の精神に導かれてはたらき、その指し示した方向に於て、彼の事業を保存し繼續し模倣したのである。部分に於ては矛盾も不調和もあるに拘らず、二つの名詩が全體としてまとまつた筋の通つた、鮮かな特色ある世界及び人生の姿を示してゐるのは、その背後に一個の詩人の活きた精神が潛み又動いてゐたからである。」〔波多野精一氏　西洋宗教思想史　希臘の卷第一　六頁〕

「ホメーロス問題」　『イリアス』及び『オデュセイア』が、誰によつて、何時何處で、如何なる事情の下に作られたかといふ所謂「ホメーロス」問題は、セネカが言つた樣に「これを研究するには人生が

1) Σμύρνα.　2) Χίος.　3) Ὁμηρίδαι.　4) Ὀδυσσεύς.

短か過ぎる程」の難問題である。[1] 吾々は通說の歸趨に從つて大體上の如くに概說したのであるが、なほこれに就いて主要な論點と代表的な意見とを次に補說して置かう。

ホメーロスに關する古記錄 ホメーロスの事を記錄に上せた最古の人は、前七〇〇年頃の抒情詩人カルリーノス[2]であつて、この人がホメーロスを『テーバイース』[3]といふ叙事詩の作者であると言つたことが、パウサニアスによつて述べられてゐる。[4] 次にヘーロドトスは、前五八〇年頃のシキオンの僭主クレイステネース[5]が『イリアス』篇の中に『アルゴス人達とアルゴスとが實に多く歌はれてゐる』ことに就て嫉妬したと記してゐる。[6] この二つは古記錄の間接報告であるが、自ら直接にホメーロスの事を述べてゐる最初の文獻は、前五〇〇年頃のコロプォーン出身の放浪詩人クセノファネース[7]の『諷刺詩』[8]である。そこでは「古來すべての人々がホメーロスに從つて學んで來た」ことを指摘し、而もホメーロスとヘーシオドスとは人間達の間に於て咎むべく恥づべき一切の事、窃盜や姦淫や相互の爭鬪を、神々に負はせてゐる」とて攻擊してゐる。又前六六四年頃のコスの抒情詩人シモニデース[9]は初めて『イリアス』篇の詩章を引用し、且この作者（ホメーロス）をばキオス人としてゐる。尙希臘最古の史家ヘーロドトスは前四五〇年頃の人であるが、ホメーロス及びヘーシオドスをば自分より四〇〇年位前の人で、それ以上の古い人ではないと記してゐる。[10]

1) Seneca, De Brevitate Vita, IX. 9, 5.　2) Καλλῖνος.　3) Θηβαΐς.　4) Pausanias, II. 53.　5) Κλεισθένης.　6) Herodotos, V. 67.　7) Ξενοφάνης.　8) Σίλλοι〔Diels, Fr. 10. 11〕　9) Σιμωνίδης.　10) Herodotos, II. 53.

1) οἱ χωρίζοντες.　2) Ξένων.　3) Ἑλλάνικος.　4) Ἀρίσταρχος.　5) Σωΐδας.　6) Vico, Principi d'una scienza nuova, 1725.　7) F. A. Wolf, Prolegomena ad Homerum, 1795.　8) ῥαψῳδοί.　9) Πεισίστρατος(r. 560—527)

二大詩篇の作者 斯くの如く前五世紀中葉迄の古代人は、單に『イリアス』『オデュセイア』のみならず、他の多くの叙事詩をもホメーロスの作と信じて來たが、併し該世紀の終頃には、他の詩は除いて、大體この二大詩篇だけはホメーロスの作と見做されるに至つた。アレクサンドリア時代に入つて、所謂「分離派」[1]—例へばクセノーン[2]やヘラニコス[3]等—が二大詩篇の間に存する詩風の相異を指摘して、『イリアス』のみをホメーロスの作とし、『オデュセイア』を別人の作としたが、それは直ちに同じアレクサンドリアのアリスタルコス[4]其他の學者によつて反駁せられた。故に羅馬時代に入つてセネカも分離派の說を信ぜず、ビザンチオン時代の希臘辭書著作者スーイダス[5]もホメーロスが二大詩篇の作者なることは論爭の餘地なきものと斷定した。古代中世は斯かる通說を以て貫かれたのであるが、近世に入つて、ナポリの人ヴィコはその名著『新科學原理』[6]に於て、古代の偉大なる立法者及び詩人等の名は象徵に過ぎず、ホメーロス」の名は希臘敍事詩そのものを意味するに過ぎぬと斷じ、二大詩篇に就いても、初め北部希臘に於て幾人かの詩人が『イリアス』を作り、次に少くとも一世紀後に西南希臘に於て幾人かの詩人が『オデュセイア』を作つたと主張した。[7] 更に獨逸のウォルフは『ホメーロス序說』に於て、二大詩篇は初めから完結した作品ではなく、多くの吟唱詩人[8]が英雄達の個々の業績を讃へた斷片的な詩章が既にあつて、それが前六世紀のアテーナイの僭主ペイシストラトス[6]の校訂事

業によつて初めて『イリアス』及び『オデュセイア』として纏められ、更に後世の人々の增補改竄がそれに加へられたと主張した。爾來この說に贊成するものが多く現はれ、二大詩篇はホメーロスといふ個人の作品ではなくて、民族精神が多くの詩人の手を協力せしめて產出したものであるとの通說が成立するに至つた。[1] そしてこの說の主たる論據は、文字の無かりし時代(前七世紀以前)に斯くも長篇の詩が作られ傳へられることは不可能であること、『イリアス』篇の各詩章間に矛盾が存すること、その內容として現はれる金屬や武器や戰法等が想定されたホメーロス在世時代よりも後の時代の文化であること等の諸點に存する。然しながら吾々はこの說をまた次の論據によつて反駁することが出來る。卽ち第一にペイシストラトスの校訂事業は前一世紀のキケロ[1]及び前二世紀のパウサニアス[2]によつて初めて述べられてゐるだけであつて、アリストテレースは何等これに言及せず、從つてこの事業が果して『イリアス』『オデュセイア』の成立を劃する程の重要性を有したか否かが疑問である。第二に文字なかりし古代の人々が記憶によつて隨分長篇の詩を作り得たことは想像され得べく、例へば文字を書き得ざりし作家によつて十三世紀に作られた獨逸の詩『パルチワル』[3]は『イリアス』篇よりも更に長い。又長篇の傳承を可能ならしめた古代人の强記に就いては時代は稍々降るが、クセノプォーンの『饗宴』篇に『イリアス』『オデュセイア』全篇の譜記の可能性が實證

1) Cicero, De Oratore, III. 34, 137. 2) Pausanias, VII. 26. 3) Parzival.

せられてゐる。[1] 第三に假令石に刻せられた希臘文字が前七世紀以前に遡り得ないとしてもその他の物的材料に記して文字を使用することが例へばブォイニケーに於ける如く更に古くから行はれたであらうことが想定せられ得る。第四に文化史的見地よりのホメーロス否認論に對しては、一部分は最近の考古學がトロイアより發掘せる遺物の中にホメーロス詩篇の內容に符合するものゝ存することによつて反駁せられ、又概して後期の文化程度に該當する內容の詩章は後人の挿入として、原型をホメーロスの作と見ることは差支ないのである。第五に各詩章間に存する矛盾は畢竟解釋の仕方の問題であつて、例へばヴィラモヴィッツ[2]の如く、斯かる矛盾は存せずとの解釋も成立ち、又假令矛盾が存在するとしても「論理的分析によつて矛盾を指摘したとて、詩人の創造的想像による作品を批判する標準とはならない。想像的作品に於ては論理的矛盾は絕えず起り得るのであるから」[3]といふ藝術的見解が一層尊重せらるべきである。斯くして最近に於ては再び古代の通說に還り、而も近世の論議をも止揚して、結局さきに概說した如く、ホメーロス以前の斷章にホメーロスが原型を與へ、それにホメーリダイの增補彫琢が加へられて今日の二大詩篇となつたといふ見解が一般に承認せられてゐる。それにしてもこの成立過程に就ては更に立入つて考へて見なければならぬ。

1) Xenophon, Symposion. III. 5. 2) Wilamowitz Moellendorf(und andere), Die Griechische und Lateinische Literatur und Sprache, 1912. 3) A.T. Murray, Homer, The Iliad, Introduction. 4) Ἀχαιοί.

二大詩篇の成立過程『イリアス』篇に於ける希臘軍が「アカイア人達」[4]といふ呼稱を以て總

括せられてゐる所を見れば、この詩の原始的內容は、イオニア族の活動及びドーリア族の侵入以前に於けるアカイア族の發展を素材としたものと思はれる。この事は詩中の文化が、ドーリア族侵入によつて一時低下せる文化とは異つて、更に高き水準にあること、又それはイオニア族の商業的活動が現はれる以前の文化的雰圍氣を暗示してゐること等によつて裏書せられる。そして斯かる原始的材料を初めて英雄譚的な短詩の幾つかに作り唱へたのは恐らくエオリア人達であつたであらう。それは一般に詩の成立は、その詩の內容たる事件のあつた時よりも稍々後れるのが當然であること、且ホメーロス詩篇は微かにエオリア方言の殘影を含んでゐることによつて想像せられる。斯くしてテッサリア地方に行はれてゐた原始的『イリアス』は移住者の手によつて小亞細亞に傳へられ、イオニア植民地に於て彈唱せられる間に、多くの增補改竄を受けたものと思はれる。即ち內容的にはイオニア族及びドーリア族の發展に關係ある英雄達の事績が插入せられ、形式的にはエオリア語の代りにイオニア語を以て朗唱せられるに至つたのであらう。そして斯かる情勢の下にホメーロスがイオニア植民地に現はれ、一代の天才を以て、これ等斷片的『イリアス』を纏まつた一篇に仕上げたのである。『オデュセイア』篇は、その內容が『イリアス』篇を前提とする所から、『イリアス』篇よりも稍々後れて作られたものと思はれるけれども、この兩詩篇が極めてよく連絡せられ

1) Σμύρνα. 2) Ῥόδος. 3) Κολοφών. 4) Σαλαμίς. 5) Χίος.
6) Ἄργος. 7) Ἀθῆναι. 8) The Homeric Hymns, To Delian Apollo. 172.
9) Magistes. 10) Orbis de patria certat, Homere, tua!

て居り、又略々同一の筆致を以て表はされてゐるのを見れば、やはり同じホメーロスの手に成つたのであらう。斯くして出來た『イリアス』・『オデュセイア』の原型が、その後所謂ホメーリダイ其他幾多の人々の增補彫琢を經て、今日傳はれる如き形態となつたのである。

ホメーロスの生地 ホメーロスが實在の個人であり、二大詩篇の原型の作者であるとしても、彼が何時何處に生れ、如何に生活したかに就いては諸說紛々としてゐる。先づその生地に關しては古來七つの都市が主張せられて來た。即ちスミュルナ[1](小亞細亞西岸の都市)、ロドス[2](小亞細亞南方のロドス島の首都)、コロプォーン[3](小亞細亞西岸より十哩奧の都市)、サラミス[4](アッティケー州西岸の海港)、キオス[5](小亞細亞西岸のキオス島の首都)、アルゴス[6](ペロポンネーソス半島アルゴス灣の奧の都市)、アテーナイ[7](アッティケー州の首都)がそれである。右の中キオスは所謂「アポローン讃歌」[8]の作者が自らキオス人であるといひ、そしてこの讃歌がホメーロスの作であると信ぜられてゐたことから主張せられ、又コロプォーンは、やはりホメーロスの作と信ぜられてゐた喜劇的な詩篇『マギステス』[9]によつて主張せられ、その他の諸市は年次不明の諸々の諷刺詩によつて主張せられてゐる。故に或る羅甸作家は、七つの都市を列擧した後に「ホメーロスよ、世界が汝の祖國に就いて爭つてゐる」[10]と述べ、又詩人バイロンは「生けるホーマーがパンを乞うて廻つた七つの富みたる町は、死せるホーマーのために爭うた」と嘆じてゐる。固より何れ

の都市に關しても確證はないのであるが、ともかく彼はイオニア系の人で、イオニア植民地の何れかに(多分スミュルナ又はキオスに)生れたのであらうとの通説になつてゐる。

ホメーロスの年代　ホメーロスの在世年代は、クラテース・エラトステネース・アリストテレース・アポロドロス・ヘーロドトス等の諸説を綜合すれば、前一一八四年から前六八四年までの間である。ヘーロドトスが既述の如く、ホメーロスを自分より四〇〇年以上古い人ではないと特記してゐる所を見れば[1]、それまでは更に古い人と傳へられてゐたのであらう。

吾々はヘーロドトスと最近の通説とに從ひ前八五〇年頃を以てホメーロスの年代として置かう。

ホメーロス 7.

ホメーロスの名とその面影　ホメーロスは別名を「メレシゲネース」[2]といふ。それはスミュルナのメレス[3]といふ河の名から出たのであらう。又別名を「マイオニデース」[4]といふのは、父がマイオーン[5]といふ人であつたとの傳へによるのである。更に「ホメーロス」といふ名は盲人又は人質を意味する普通名詞で、卽ちこの種の物語を竪琴に合せて歌ひ歩いた伶人を指すとの說もある。ホメーロスの外貌や生活狀態に就いては確實な所傳がないけれども、デーロスのアポローンに獻げたるホメーロス風の讃歌に「岩多きキオスに住める盲人」[1]とあり、又これに從つてアレクサンドリア時代に作られた胸像が傳はつてゐる所から、恐らく晩年を盲人として過したであらうと信ぜられてゐる。又彼の如き遍歷の吟唱詩人は貴族富者の饗宴の席に請じ入れられて一席の朗吟をなすことにより生計を立てゝゐたのであるから、彼も亦貧窮の人であつたらうと思はれる。唯この白髮盲目の老詩人が一たび琴を彈じて謠ひ出せば、青春の明朗情熱は油然として湧き起り、滿堂の聽者はトロイア戰士さながらの悲喜哀歡に浸されたのである。

1) Herodotos, II. 53.
2) Μελησιγένης. 3) Μέλες. 4) Μαιονίδης. 5) Μαίων.

二　ホメーロス詩篇の梗概

トロイア戰爭の全貌　『イリアス』及び『オデュセイア』は、その內容から言へば、トロイア戰爭に關する全體の物語の一部分であつて、この物語の全貌を明かにするためには、二大詩篇の前後及び中間に、他の傳說を補綴しなければならない。それ等の傳說は、前七七六年から前五五〇年に到る間に、イオニアの詩人の群によつて幾つかの叙事詩に作られた。それが所

1) The Homeric Hymns, To Delian Apollo. 172.

謂『叙事詩のキュクロイ[1]』である。その中で『イリアス』篇の内容の前階を成す所のトロイア戰爭の原因を叙したものが、『キュプリア[2]』といふ詩である。吾々はそれによつて先づトロイア戰爭の遠因及び近因を知らねばならぬ。

トロイア戰爭の遠因 トロイア戰爭の遠因は神々の間の人間的な爭ひ事に宿されてゐた。テッサリアのプティア地方のミュルミドネス[3]と言はれるアカイア種族の人々にペーレウス[4]といふ王が君臨してゐた。王は海の女神テティス[5]と結婚したのであるが、その婚禮の席に一他の多くの神々は招待せられたのに一不和の女神エリス[6]だけが省かれたので、エリスは憤慨して、黄金の林檎一箇を客の中へ投込んだ。その林檎には「最も美しき方へ」と書いてあつた。三人の女神ヘラ[7]とアテーナー[8]とアプロディテー[9]とは美を競つて夫々に林檎を自分のものだと主張した。ゾェウス[10]はその煩はしい裁判を厭つて三人の女神をばイダ[11]の山に行かせ、其處でゾェウスの羊を飼つてゐた所の美少年パリス[12]にその判決を委せた。パリスは別名アレクサンドロス[13]とも言ひトロイア王プリアモス[14]の第二子である。三人の女神は夫々に勝利を希つて、ヘラはパリスに力と富とを贈ると言ひ、アテーナーはパリスに功名手柄を得させようと言ひ、アプロディテーは世界第一の美しい女をパリスの妻に獻ずると言つた。所がつひにパリスはアプロディテーに味方して美の勝者と判決した。これが實に次に述べる様なパリスのスパル

1) Ἐπικοῦ κύκλου Λείψανα. 2) Κυπρία.
3) Μυρμιδόνες. 4) Πηλεύς. 5) Θέτις. 6) Ἔρις. 7) Ἥρα 8) Ἀθηνᾶ.
9) Ἀφροδίτη. 10) Ζεύς. 11) Ἴδα. 12) Πάρις. 13) Ἀλέξανδρος. 14) Πρίαμος.

1) Μενέλαος. 2) Ἑλένη. 3) Τυνδάρεως.

8. 三女神とパリスの裁判

タ王妃奪掠事件を生み出す原因であり、從つてトロイア戰爭の遠因となつたのである。そして三人の女神達はこの事件に關する私情私怨を長く胸に含んで、アプロディテーはパリスに對する好意からトロイア軍に味方し、アテーナーとヘラとは反對の感情から希臘軍に味方をすることになる。

トロイア戰爭の近因 美の競爭の勝利者アプロディテーの保護によつて、裁決者パリスは希臘に渡り、スパルタ王メネラオス[1]の歡待を受けたにも拘らず、王のたぐひ稀なる美妃ヘレネー[2]をば、ひそかにトロイアに拉し歸つた。これより先希臘第一の美人たるヘレネーを巡つて多くの求婚者があつた時、求婚者一同はその中の一人なるオデュセウスの發議によつて、すべての迫害から彼女を守り、若し彼女が害せられたならば一同協力して復讐しようといふ誓約を結んでゐた。(別の傳說によれば、ヘレネーの父テュンダレオス[3]は彼女の求婚者達に向つて若しヘレネーに害を加へる者があつた場

1) Ἀγαμέμνων. 2) Ἀχιλλεύς. 3) Ὀδύσσευς. 3) Σῆρος. 5) Λυκομήδης. 6) Ἰθάκη. 7) Πηνελόπεια. 8) Τηλέμαχος.

合には相共にその復讐に當つて欲しいとの約束を結んだとのことである。）然るに今パリスはアプロディテーの保護の下にヘレネーを誘惑してトロイアへ連れ歸つたのである。そこでメネラオスの兄にしてミュケーナイの王たるアガメムノーン[1]はヘレネーの求婚者達竝びに他の希臘諸將を召集して、かねての誓約に基づき、ヘレネー奪回のためにトロイア遠征の師を起すことゝなつた。これが卽ちトロイア戰爭の近因である。

兩軍の名將　戰爭の經過を述べる前に、希臘軍及びトロイア軍の主なる名將に就いて一言することが後述の諸事件の理解に便利であらう。先づ希臘方には總帥アガメムノーンの下に勇將アキレウス[2]と賢將オデュセウス[3]とがゐた。アキレウスは前述の海の女神テティスの子であるが、彼は母から、遠征に加はれば功名を立てゝ早く死すべく、加はらなければ長く不名譽の生涯を送るであらうとの豫言を告げられ、前者を選んで出陣することゝなつたのである。（一說によれば母テティスの計らひによつてスキュロス[4]島のリュコメーデース[5]王の宮廷に侍女に扮して身を隱してゐたが、オデュセウスが商人に化けてその宮廷に婦人の裝飾品を賣りに行つた時、その商品の中に交ぜられてあつた武器に思はず手を觸れたことから、オデュセウスの炯眼に見破られて、一緒に出陣することゝなつた。）オデュセウスはイタケ[6]（イオニア海上、エピルス州の沖合にある島）の王であつて、妻ペーネロペイア[7]との間に王子テーレマコス[8]を擧げ、

1) Παλαμήδης. 2) Πάτροκλος. 3) Φοίνιξ. 4) Νέστωρ. 5) Αἴας. 6) Διομήδης. 7) Ἕκτωρ. 8) Ἀνδρομάχη. 9) Αἰνείας. 10) Δηΐφοβος. 11) Γλαῦκος. 12) Σαρπηδών. 13) Αὐλίς.

親子睦まじく暮してゐたので、トロイア戰爭に參加する意志はなかつた。智者パラメーデース[1]が催促に來た時も彼は狂人を裝つて、驢馬と牛とを一緒に鋤に結びつけ、種の代りに鹽を蒔き初めたが、パラメーデースが試みに彼の子テーレマコスをその鋤の前に置くと、オデュセウスは鋤を外らしたので、悖りの狂氣が看破せられ、已むを得ず征戰に參加することゝなつた。尙アキレウスの竹馬の友であり學友であるパトロクロス[2]も重大な役割を演ずる名將である所のパトロクロスとアキレウスとの師傅たるプォイニクス[3]も共に出陣して、アキレウスとの間に涙ぐましい師弟の裏情を示す。この外老將ネストール[4]は最年長者として希臘諸將の相談役となり、アイアス[5]は巨軀と剛力とを以て勇名を轟かし、ディオメーデス[6]はアキレウスに次ぐ第二の勇將として有名である。次にトロイア方に於ては、國王プリアモスは既に老齡ではあつたが、名君で善政を布き、隣邦とも同盟を結んで強固な國家を保つてゐた。併しその王位の柱石となつてゐたのはその長子（パリスの兄）ヘクトール[7]であつて、彼はアンドロマケー[8]と結婚し、夫としても父としても高貴な品格を具へ、武士の典型であつた。彼は初めから祖國の敗亡を豫感しつゝも勇敢に希臘軍に敵對したのである。尙トロイア方の名將としては、アイネイアス[9]、ディープォボス・グラウコス[10]、サルペードーン[11]等が數へられる。

『イリアス篇』の內容　扨て希臘軍は二年間戰備を整へた後に、ボイオティア州のアウリス[12]

港からトロイアに出征した。兩軍一進一退して容易に勝敗は決せず、攻圍九年の歳月は流れた。然るに第十年目に至り、希臘軍の總帥アガメムノーンと勇將アキレウスとの間に深刻な軋轢を生じ、こゝに『イリアス』篇の內容は始まつてゐる。全篇一五四二三行は、アレクサンドリア時代の文獻學者ゼーノドトス[1]によつて、希臘文字二十四を冠して二十四卷に分けられ各卷に題名が附せられた。吾々は今特に後述の如き一般希臘思想史竝びに希臘教育史に取つての主要樞機に注意しつゝその梗概を辿つて見よう。

開卷第一に記されてあるのは全篇の主題たるアキレウスの「憤怒」[2]である。抑〻この憤怒は如何にして生じたのであるか。希臘軍が獲得した戰利品の中にクリュセーイス[3]といふ處女があつて、それがアガメムノーンの有となつた。その處女の父にしてアポローンの祭司たるクリュセース[4]は、法服を着け、身代金を携へて、娘の返還を乞ひに來る。そして「オリュムポスの神々は、貴方がプリアモスの都を攻略して無事に歸國することを許してゐる。だからどうか私の愛兒を返してこの身代金を受けて吳れ」[5]と懇願する。然るにアガメムノーンは頑として聽かずに祭司を追ひ返す。そこで祭司はアポローンに新願して希臘軍に疫病を送らせる。アキレウスは卜者カルカース[6]にトせしめた所、カルカースは疫病の理由は、アガメムノーンが處女クリュセーイスを返還せずしてアポローンの怒を買つたことに存すると告げる。アガメムノーンは怒つてカルカースを罵り、クリュセーイスへの戀着を述べ、併し同胞の救濟のためにはその少女を返すことを厭はぬから、その代償として、アキレウスが獲て居た少女ブリセーイス[1]を自分に渡さんことを要求する。女神アテーナーが來たり、老將ネストールが來たりして、アガメムノーンとアキレウスとを和解せしめようとするが、兩將はつひに和解せずして分れ去る。アガメムノーンは人を派してアキレウスより少女ブリセーイスを奪ふ。アキレウスは悲み怒つて母テティスに訴へる。母はこの由をオリュムポスなるゼウスに傳ふべきことを約し、アキレウスに對しては、長く希臘人に恨を抱き征戰より手を引けと命ずる。そしてテティスはゼウスに乞ひ、希臘人がアキレウスに對して悔い敬ふまでは、トロイア軍に加擔して希臘軍を苦しめる樣にと賴む。アポローンはそれを諾する。ゼウスの妻ヘラはゼウスがテティスと語りその願を聽いたことを嫉妬するが、その子ヘーパイストス[2]の取りなしによつて機嫌を直す。

アポローンは夢の神オネイロス[3]に命じ、ネストールに變裝してアガメムノーンの枕頭に現れしめ、「今やオリュムポスの神々はヘラの嘆願により一致團結してトロイア勢を呪詛するから、今日は汝は必ずトロイアを攻略し得るであらう。速かに武裝せよ」と告げしめる。アガメムノーンは翌朝將士を集めてこの夢を告げる。併し老將ネストールはゼウスの奸計を見破り將士を警める。依てアガメムノーンもその夢の僞瞞を知り、既に九年を經過せる征戰も前途

1) Ζηνόδοτος. 2) Μῆνις. 3) Χρυσηΐς. 4) Χρύσης.
5) Ilias, I. 13—21. 6) Κάλχας.

1) Βρισηΐς. 2) Ἥφαιστος. 3) Ὄνειρος.

勝算なきを嘆じ、寧ろ故國へ引返さんことを誘ふ。斯くして希臘軍が歸國の準備をしてゐる所へ、女神アテーナーはヘラの勸めによりオリュムポスから降つてオデュセウスの許に現れ、希臘軍がトロイアを殘しヘレネーを殘し、この征戰の目的を空しうして歸還することの果敢なさを嘆き、オデュセウスの力によつて友軍を引留めんことを慫慂する。そこでオデュセウスは友軍に說いて歸國の意を飜さしめ、そしてカルカースの豫言が十年目にはトロイアを攻略し得べきことを告げた旨を語つて將士を激勵する。ネストールも亦アガメムノーンを勵まし、軍を分團に分ち相競つて勇戰せしむべき策を建白する。アガメムノーンも意漸く動き、諸將と共にゾェウスを祀つて戰勝を祈る。斯くして希臘軍は戰に向ひ、アテーナーは陣中にあつてこれを助け大いに勝利を得る。

トロイア軍の將パリスと希臘軍の將メネラオス(彼等こそはヘレネーを巡る仇敵である)とは、他の將士をして戰を止めしめ、二人だけの一騎討によつて勝敗を決し、勝者がヘレネーとその寶とを取らんことを約し、これを固くゾェウスに誓ふ。そして二人は互に槍を投げ劍を揮つて鬪つたが勝負は容易に決しない。その中にメネラオスがパリスを突き刺すと見えた刹那に、アプロディテーが現れパリスを拉して一室に置き、ヘレネーを迎へてこれに逢はせる。斯くてパリスとヘレネーとはアプロディテーの仲介によつて甘き戀に耽る。その間にメネラオスはパリスを探しても見當らず、依てアガメムノーンはこの勝負をメネラオスの勝と宣し希臘軍は喝采を揚げる。

神々の間では饗宴が開かれゾェウスはなほもこの戰を續けしむべきか和を結ばしむべきかに就いて神々に諮る。ヘラは希臘軍にトロイアを滅さしめんとする彼女の意圖を貫かんがために平和に反對する。そして彼女の建策により、ゾェウスはアテーナーを戰陣に遣はし、先づ初めにトロイア軍を勝たしめる樣に取計らはせる。よつてアテーナーは戰陣に赴き、トロイアの一强兵をしてメネラオスを射させる。斃れゆくメネラオスに向ひ兄アガメムノーンは終局の勝利のなほも友軍に來るべきことを語り、奮鬪の決意を示す。一方陣中より醫者を呼んでメネラオスの矢を拔取らせる。やがて將士は戰に向ひ、アガメムノーンも陣中に馳驅して諸將を激勵し、希臘軍は大いに敵軍を打破る。而もアキレウスはなほ戰はんとせず「舟の中に留まつて彼の激しき怒りを抱きしめてゐる。」[1] 戰は益々慘憺に續けられ、敵も味方も「その顏を塵に埋めて相竝んで斃れて行く。」[2]

兩軍の激戰をイダの山頂から見下してゐるゾェウスは大體トロイア軍に味方して希臘軍を苦境に陷れる。ヘラやアテーナーは希臘軍に味方して色々と焦慮するが如何とも致し方なく、つひにヘクトールの率ゐるトロイア軍は希臘軍をその艦隊にまで追ひ詰め、舟に火を點じ

1) Ilias. IV. 513.　2) Ilias. IV. 544.

ようとする。アガメムノーンはヘラの助けによつて奮起し、全希臘軍を叱咤激勵し、又ゾェウスに向つて加護を祈願する。ゾェウスはこれを憐んで希臘軍の滅亡を免れさせ、逆にトロイア軍を敗戰せしめる。併しやがて又ゾェウスはトロイア軍に味方し、ヘクトールは希臘軍を慘々に打破る。

アガメムノーンは味方の敗戰を慨き、ゾェウスがその初め彼に希臘軍の勝利を約しながら、彼を欺けることを恨み、トロイアの攻略の絶望を告白し、舟を解いて歸國せんことを諸將に謀る。勇將ディオメーデースはこれに反對し、假令アガメムノーンが歸國するとも他の兵を以てトロイアを攻略せずんば止まざる慨を示す。老將ネストールは併し極めて慇懃に誠意を以てアガメムノーンに向ひ、アキレウスより奪へる少女ブリセーイスを返還すべきことを勸告する。アガメムノーンも前非を悔いブリセーイスを返すことを宣言し、且それに添へてアキレウスに贈るべき數々の寶物やすぐれた男女などを數へ立て、更に凱旋後に於けるアキレウス優遇の途を述べ立てる。ネストールは喜び、アキレウスに先づ師傅プォイニクスを遣はし次に勇將アイアスと賢將オデュセウスとを使者として遣はすべきことを建言する。老師傅プォイニクスは後述の如く、師弟の裏情を訴へてアキレウスの飜意を促すけれども、怒れる勇士はなほこれを聽き容れない。次でアイアスとオデュセウスとが訪ねて行くと、アキレウスは竪琴を

1) Ποσειδῶν.

奏しつゝ勇士を讃へる歌を歌つて居り、親友パトロクロスがその側に歌の終るのを待つてゐる。アキレウスは二人の使者を親み深く迎へ入れる。歡待の饗宴の果てた後、オデュセウスは徐ろに口を開き、アキレウスにその長き怒りを棄去つて希臘軍を救はんことを懇望する。併しアキレウスはブリセーイスを奪はれた心の傷が猶ほ癒え難く、アガメムノーンへの盡きぬ恨みを訴へて、オデュセウスの勸告を拒絕する。そして彼の母テティスから告げられた自分の運命—若し留まつてトロイア軍と戰ふならば、その報酬は莫大なものであるが早く死んで歸國の望は絕えること、若し又歸國すれば、自分の報酬は失はれるが長く生き延びるであらうこと—を語り、今やトロイア攻略の望なきが故に寧ろ歸國を欲する旨を告げ、そして師傅プォイニクスをも若し望むならば伴れ歸らうと言ふ。

アキレウスの征戰不參加とゾェウスのトロイア軍援助とによつて、希臘軍が慘敗し艦隊の周圍の堡壘にまで穴を明けられて船が燒かれさうになつたとき、海神ポセイドーン[1]は希臘軍に同情し、豫言者カルカースの姿と化して喊聲を以て戰士を勵まし、そのために希臘軍は盛返し、アイアスはヘクトールと渡り合ひ大石を投げつけてヘクトールを負傷させる。ヘラはこの間に全美を盡して身を裝ひ、更にアプロディテーから、すべての神々や人間を魅惑する力のある不思議な帶を借り受け、それを着けてオリュムポスの山から降りイダ山に赴いて、そこから戰

を見下してゐるヴェウスの前に現れる。ヴェウスはヘラの美に魅惑せられ、過ぎし日の初戀の情熱が蘇つて、妻ヘラを抱きつゝ陶醉の眠りに墮ち、戰爭も政治も忘れてしまふ。然しながらヴェウスはやがて眼ざめて、戰場を見下し瀕死のヘクトールを認めるや、怒つてヘラを逐ひ立て、虹の女神に命じてポセイドーンに戰場を去らせ、又アポッローンを遣はしてヘクトールの負傷を癒させる。

つひに老將ネストールはパトロクロスにアキッレウスの出陣を勸誘することを依頼する。パトロクロスはアキッレウスと共に遠征に出發する時、二人とも親達に反對された事や、また遠征に行く以上はアキッレウスに功名を立てさせるやう、そしてパトロクロスの方が年長だからよく氣をつけて手落のないやうにせよと言はれて來た事などを思ひ出す。ネストールは「友を說得するのはよい事であり、若しアキッレウスが豫言を恐れて出陣を肯んじないならば、彼の手勢たるミュルミドネス[1]を借り、又彼の鎧を着けて出征するやうに」と言ひ含める。パトロクロスは熱淚を湛へてアキッレウスの船に近づき友軍の苦境を訴へて、出陣を懇望する。アキッレウスは氣の毒に思つて、手勢と鎧とを貸與する。パトロクロスはその燦然たる鎧を着け、アキッレウスの二輪車に乘つて出陣する。トロイア軍はアキッレウスの鎧を見て狼狽して逃走する。パトロクロスは進んで散々にトロイア軍を破り、ヴェウスの子なる敵將サルペー

1) Μυρμιδόνες.

ドーン[1]をも殺す。併しやがて敵將ヘクトールと渡り合ひ激戰の後つひに槍で刺し殺され、アキッレウスから借りた鎧もヘクトールに奪はれてしまふ。パトロクロスの屍體を護るアイアスやミネラオスと、それを奪はんとするトロイア勢との間に激しい戰鬪があり、勝敗の決せぬ中に、ヴェウスは天空一面を黑雲に封じてしまふ。アイアスはアキッレウスに親友の死を報ずべき使者を探し、黑雲を散ぜんことを熱禱する。ヴェウスがこの祈禱を聽いて雲を霽らしたので、アイアスは使者をアキッレウスに送つてパトロクロスの死と、その屍骸のために起つた凄まじい戰鬪を報告する。

親友の死を聞いたアキッレウスは、深き悲嘆に心初めて動き、アガメムノーンへの餘りに長き怨恨と、そのために親友までも喪ふに至つた自らの執拗さとを後悔し、友の弔合戰に勇躍出陣することゝなる。アキッレウスの悲嘆の泣聲を海底深く聽いた母のテティスは急いで馳せ參じ、我が子の出陣のために鎧を與へることゝなり、オリュムポスなる鍛冶の神ヘーファイストス[2]の宮殿に赴き、一夜にして見事な鎧を作つて貰ふ。就中有名なその楯には天地と海原と日月と、都と鄙と、戰と平和と、結婚と死と、死と舞踏と五つの圖に天地人生の一切は描かれてゐた。アキッレウスは雀躍して喜び、その鎧を着けて軍營に赴き、諸將を集めて、自分の長き怨恨を棄て、パトロクロスの不幸を嘆き、直ちに戰場に向ふべきことを促す。アガメムノーンも一

1) Σαρπηδών.　2) Ἥφαιστος.

切の經緯を不和の女神アテー[1]の咎にして、兩雄はこゝに全く和解する。

扨て復讐への飢ゑと怒りとに奮ひ起つたアキレウスは、向ふ所敵なく、トロイアの城下に攻め進む。ヘクトールはアポローンの戒めによつて遠く離れてゐたが、敵の勇將アイネイアスがアキレウスと渡り合ふ。ポセイドーンが危きアイネイアスを雲に包んで救ひ去る。トロイア王プリアモスは城門を開いて、敗走し來れる味方の軍を收容したが、肉迫せるアキレウスがこれに侵入せんとするや、アポローンは、トロイアの勇將アゲーノール[2]に扮してアキレウスと戰ひながら故意に城外に逃れ誘つて、トロイアの城を安全ならしめる。つひにヘクトールが近づいて來たので、アキレウスはそれと戰ひ、城壁に迫るヘクトールを遮つては廣場に誘ひ出しつゝ三たび町を廻つて相闘ふ。アポローンはヘクトールを支援し、又アテーナーもヘクトールの弟デーイプォボス[3]に扮してヘクトールに力をつけたが、やがてデーイプォボスの姿が消えるや、ヘクトールはアテーナーの僞瞞を悟り、自分の運命を覺悟して猛然と闘つたが、つひに頸を突かれて倒れる。倒れたヘクトールはアキレウスに最後の念願を述べて言ふ。「自分の屍骸をアカイア人達(希臘軍)の船の側で犬に喰はせることだけは容赦して呉れ。自分の父と母とから金銅や贈物を受取つて屍骸だけは家へ返して呉れ。そしてトロイア人達とトロイア婦人達との手で葬らせて呉れ[4]。」怒りに燃えたアキレウスは假令十倍二十倍の黄金を償うたと

1) Ἄτη.　2) Ἀγήνωρ.　3) Δηΐφοβος　4) Ilias. XXII. 338–344.

て願ひを聽くことは出來ぬと斷り、ヘクトールの鎧を剝ぎ屍骸を繩でくゝつて二輪車の後につけ、トロイア城下を曳きずり廻す。餘りの悲慘事に國王プリアモスと王妃ヘカベー[1]とは、地面に身を投げて死せんとする程に嘆き悲しむ。號泣の聲を聞いて城壁に駈け出して來たヘクトールの妻アンドロマケーは、これも城壁から身を投げたい程に悲しみ、氣を失つて侍女等の腕に危く支へられる。

アキレウスはヘクトールの屍骸を海岸に曳いて來て、パトロクロスの靈に復讐の成就を告げ、亡友の葬儀を盛大に執行する。次で葬祭のために後述の如き各種の競技を催し、夫々の勝者に賞品を與へる。

パトロクロスの葬祭が濟むと他の諸將は夫々自分の船に引取つて休んだが、アキレウスは獨り夜を徹して亡友の追憶に耽り、未明にヘクトールの屍骸をば二輪車につけてパトロクロスの墓の周圍を二度まで曳きずり廻し、つひにそれを墓の中に棄てゝしまふ。ヘクトールの死屍に加へられた侮辱にゾェウスは痛く同情し、アキレウスの母テティスを呼んで、息子にヘクトールの屍骸を返すやうに言ひ聞かせて呉れと賴み、同時に虹の女神をプリアモス王に遣はして、アキレウスの許にヘクトールの屍骸を乞ひ受けに行けと命ずる。王は黄金寶物を携へ老式部官一人を伴つて、使の神ヘルメース[2]の案内でアキレウスの陣中に入る。切々たる父

1) Ἑκάβη.　2) Ἑρμῆς.

9. アマゾーン女人軍の戰

子の情を訴へて哀願するプリアモスの言葉に、アキレウスは故國の我が老父を懐ひ、我が亡友の面影を偲び、潸々と涙しながら、鄭重にヘクトールの亡骸をプリアモスに渡し、その葬儀のために十二日間の休戰を申出る。英雄の亡骸を迎へたトロイア城下に母も妻も涙を新にし、人々の盡きせぬ悲嘆に日は暮れる。プリアモスの命によつて、九日間に葬式の準備は整へられ、十日目に鄭重な葬儀は營まれる。群がる人々は熱き頬に涙しつゝ、やがて酒を燃屑に注ぎ消し、白骨を黄金の甕に納めて紫の衣に包み、墓穴に埋めて大きな墓石をその上に建てる。人々はプリアモスの王宮に引上げて盛大な饗宴を張り、斯くしてヘクトールの葬祭完了と共に『イリアス』二十四卷の物語は終る。

二大詩篇の中間物語　ヘクトールの死を以て終つてゐる『イリアス』篇と、オデュセウスの漂浪記を內容とする『オデュセイア』篇との間を連絡させるためには、所謂『叙事詩のキュクロ

1) Αἰθιοπίς. 2) Ἀμαζόνες. 3) Πενθεσίλεια. 4) Ἄρης. 5) Πολυξένη. 6) Θύμβρη. 7) Euripides, Hecuba. 40. 8) Στύξ.

イの中から物語を取つて來なければならない。卽ち先づ引用せらるべきは『アイティオピス』[1]篇の物語である。ヘクトールの死後トロイア軍を援けて抵抗を續けた同盟者中、特に目ざましかつたのは、アマゾン人達[2]の女王ペンテシレイア[3]の娘であり、一隊の女武者を率ゐて勇戰し、わけてもその怖ろしい鯨波を以て希臘軍を大いに苦しめたが、つひにアキレウスと渡り合つて殺される。アキレウスは死にゆく女王を支へ起しつゝ、その若さと美しさと勇氣とを思ひ廻らしながら、勝てる己れを烈しく悔いを誰に與ふべきかに就いて母テティスは、アイアスとオデュセウスとが救ひ出したけれども、かの有名な鎧

アキレウスは不圖したことから（恐らくヘクトールの葬式のために許した休戰の間に）、敵王プリアモスの娘ポリュクセネ[5]と戀に陷る。そしてプリアモスに對し、若しその娘を與れるならば、トロイア軍と和する樣に盡力しようと約束し、イリオンに近きテュムブレ[6]のアポルローンの社殿に於て結婚の相談をしてゐる所を、アポルローンの手引きによるパリスの毒矢に踵を射られて殺される。[7]（アキレウスの幼時、母テティスが彼を冥土の河ステュクス[8]に浸したので、その時母が握つてゐた踵を除く外は全身が傷を負はぬことになつてゐたのである。）斯くして殺されたアキレウスの屍骸はアイアスとオデュセウスとが救ひ出したけれども、かの有名な鎧

判を求めた所智慧は勇氣に優るとて、勇將アイアスへの代りに賢將オデュセウスに與へられる。アイアスは憤つて自殺しその血の浸み込んだ所からヒュアキントス(ヒアシンス)の花が咲く。

トロイア戰爭の終末は、やはり『叙事詩のキュクロイ』によつて綴られてゐる。木馬の計を叙した『小イリアス』[2]、トロイアの陷落を叙した『イリオン攻略』[3]、諸英雄の歸國譚を載せた『歸還』[4]の諸篇がそれである。トロイア軍の抵抗が中々頑強であつたのでやがてオデュセウスは一策を案じて、友軍がトロイアの攻圍を解いて退却するやうに見せかけ、一つの巨大なる木馬を作り、その中に武裝せる勇士を潛伏させ、敵がこの木馬をトロイアの城中に曳き入れて勝利の祝宴に醉ひ疲れた頃、木馬の中から勇士達が躍り出て敵軍を殺し、つひにトロイアを陷落させるのである。トロイアの王子パリスは軍中に戰死し、國王プリアモスもアキレウスの息子ネオプトレモス(別名ピュロス)[5]に殺され、王妃ヘカベーは娘カサンドラ[6]と共に捕はれて希臘に連れ歸られる。今一人の娘ポリュクセネーはさきにアキレウスに戀したことから、アキレウスの墓前で自殺する。希臘方の總帥アガメムノーンは不幸にもその留守中の妻の密夫によつて凱旋の祝宴の席上に殺される。戰爭の起因をなした當のヘレネーは、戰爭中はトロイアにありながらも陰に陽に希臘軍を助けてゐたが、戰後無事にメネラオスに連れ歸られ、共

1) Ὑάκινθος. 2) Ἰλιὰς Μικρά. 3) Ἴλιον Πέρσις. 4) Νόστοί. 5) Νεοπτόλεμος (Πύρρος.) 6) Κασσάνδρα.

に再び王位に卽く。そしてその娘ヘルミオネー[1]はアキレウスの息子ネオプトレモスと結婚する。

『オデュセイア』篇の梗概 『イリアス』篇の梗概叙述に案外多くの筆を費した吾々は『オデュセイア』篇の內容をば出來るだけ簡潔に紹介することを力めよう。トロイア陷落後希臘の將士は海路故國へ凱旋したのであるが、その途上風波のために方向を失して諸方を流浪したものがあつた。オデュセウスは就中有名な漂流者で、故郷イタケー[2]へ歸る途上多くの奇怪な國國に漂着し、彼の狡智に近き聰明が重なる冒險を巧みに切抜け、漸くにして故郷に着き、二十年孤闘を守れる貞潔の妻の手に還つた。『オデュセイア』篇二十四卷一二一一〇行の長詩はこのオデュセイアの漂浪冒險記を詠じたものであろ。「トロイア城を攻略した後、まことに多くの放浪をなせる一人の男、多くの人々の町を眺め心を知り、自らの命と仲間の歸國とを守りつゝ、海上に幾多の苦難を感受した男：：その數々の事の蹟を、女神ムーサよ、ゾェウスの娘よ、何處からでも御意のまゝに始めて吾等に語り給へ[2]」これが『オデュセイア』篇卷頭の書き出しである。

開卷第一に吾々に示されるオデュセウスは、トロイアを立去つたばかりの彼ではなくて、それから既に十年間も經過した彼—家鄕を遠く憧れながら然もなほ海の眞中オーギュギエー島[3]にニュンプェー[4]なるカリュプソー[5]の執拗な戀に煩はされてゐる彼—である。カリュプソーはオデュセウ

1) Ἑρμιονη. 2) Odysseia I. 1. 3) Ὠγυγίη. 4) Νύμφη. 5) Καλυφώ.

スに永遠の生命を與へることの代償として彼を我がものとし永く島に留めようと力め、七年間を經過したのであるが、オデュセウスは故國の妻子への憧れを棄てず、今やヅュウスはカリュプソ-に命じて彼を歸國せしめんとし、神々も亦—海神ポセイドーンがキュクロープスのことからに彼に惡意を抱いてゐる外は—彼を(勿論多くの苦難には遭はせるが結局は)歸還せしめることに助力しようとしてゐる。そこでカリュプソ-は已むなくオデュセウスに筏を與へて順風に送り出す。陸の近くで暴風雨に襲はれ、或るニュムプェーから貰つた腰帯を浮袋の代りとし、アテ-ナ-に助けられて辛うじてファイエ-ケス(若くはファイア-ケス)[1]と呼ばれる人達の國、スケリア[2]に漂着する。[3] 豐饒な自然と得意の航海とによつて富み榮え、明君アルキノ-ス[4]に治められてゐるこのスケリア國は後述の如く、希臘民族に取つて平和の理想國土である。王の娘ナウシカア[5]はアテ-ナ-に送られた夢によつて結婚の日の近きを知り、海岸の泉に衣服を洗ひに行つて、そこに漂着し眠つてゐたオデュセウスに會ふ。王女の勸めによつて彼はその國の都城に行くこと、なり、或る乙女に假裝したアテ-ナ-に助け導かれて王宮に入る。漂泊の旅人に同情した國王や王妃は歡待の上、船を用意して、盛大な送別の饗宴と競技會とを催して呉れる。この競技に於てオデュセウスは後述の如く無雙の技倆を示す。送別宴に彈唱詩人デ-モドコス[6]がトロイア攻略の木馬事件を歌ふや、オデュセウスは感に堪へずして落涙し、その因由

1) φαίηκες. 2) Σχερία. 3) Odysseia. VI. 7. 4) Ἀλκίνοος.
5) Ναυσικάα. 6) Δημόδοκος.

を國王に怪み追究せられて、つひに自分がトロイア攻略の賢將オデュセウスであることを告白する。驚嘆する國人の前で、乞はれるまゝに彼の語るトロイア出立以來の漂浪冒險譚により、吾々は初めて『オデュセイア』物語の內容上の發端に遡ることが出來、同時に『イリアス』篇との巧妙な連絡を發見し得るのである。[1]

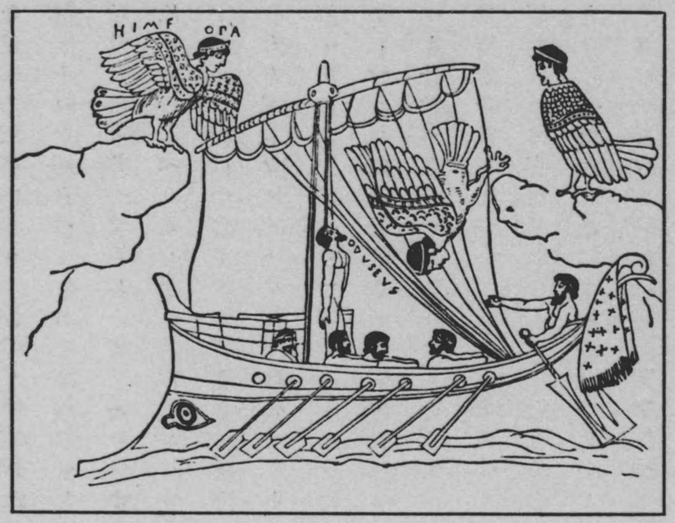
トロイア出發後最初に上陸したのはトラキアの町イスマロス[2]で、そこにはキコネス[3]と呼ばれる人々が住んでゐた。彼等との爭ひによつてオデュセウスの側では各船六人づゝの仲間が殺される。[4] そこから出かけると暴風に襲はれ、九日間海上を漂うた末に『蓮食ひ人達』[5]の國へ着く。[6] 先づ偵察のために進み入つた彼の部下三人は、その國人に歡待せられて蓮の莖を食べさせられる。蓮の莖の不思議な力により彼等は家鄕を忘れてそこに留まりたくなる。オデュセウスはそれ故に彼等を無理に引張つて來て船の腰掛の下に結びつける。次に着いたのはキュクロープス[7]といふ一眼の巨人等の住む國である。[8] そこで牧羊を仕事とし洞窟を住家とするポリュプェーモスの洞窟に十二人の部下と共に入り、巨大な岩で出口を塞がれ四人の部下を喰はれてしまふ。携へた酒によつてポリュプェーモスを醉ひ眠らせ、杙の尖端を火に熱してその巨人の眼を突きつぶす。巨人の悲鳴によつて驅けつけた仲間のキュクロープス達は誰が害を加へたかと問ふけれどもポリュプェーモスは、オデュセウスがさきに教へて置いた

1) Od. IX. 36 f. 2) Ἴσμαρος. 3) Κίκονες. 4) Od. IX. 36f.
5) Λωτοφάγοι. 6) Od. IX. 84 f. 7) Κύκλωπες. 8) Od. IX. 116 f.
9) Πολύφημος.

名前誰でも無し」[1]と答へるので、仲間達はポリュフェーモスが氣狂ひになつたと思つて立去る。翌朝羊の群を洞窟から出しながら巨人は入口に立つて羊の背に觸れては點檢する。オデュセウスは三頭の羊を柳の枝で繋ぎ合せ、その腹の下に部下を潜ませて洞窟の外へ出させ、自分も最後にさうして遁れ出る。この有名な冒險を經たオデュセウス等は今度は風を司るアイオロス[2]王が支配する島に着く。歡待を受けて送り出されるが、王から貰つた逆風入りの革袋を部下が解いたために船は再びその島に吹き戻され、王から怒り見放される。彼等は已むなく自ら櫂を操つて進む中に、ライストリュゴネス[3]といふ蠻族の港に着き、オデュセウスの船を除く外の味方は船も人も皆その蠻族に滅ぼされて辛うじて逃げ延びる[4]。そして今度は太陽の神ヘーリオス[5]の娘なる女神キルケー[6]の住むアイアイエー[7]島に着く[8]。半分ほどの仲間が先づ女神の王宮へ入つて歡待せられたが、併し女神の杖の魔力によつて形だけ豚に變つてしまふ。次にオデュセウスはヘルメースからモーリュ[9]といふ樹を貰ひその效力によつて女神の魔力から身を守り、却て劍を抜いて女神に突き進み、跪坐して許を乞ふ彼女に、仲間を元の人間に返らせることを條件として許を與へ、斯くして一同女神と和し、毎日の歡待にオデュセウスは家鄕を忘れたかの如くに樂み暮す。やがて仲間に勵まされて、キルケーの島を立ち、セイレーネス[10]等の歌の魅力にも耳を塞ぎ身を帆柱に繋ぎつけて通り抜け[11]、怪物スキュレー[12]の六つの頭[13]と、

1) Οὖτις. 2) Αἴολος. 3) Λαιστρυγόνες. 4) Od. X. 82 f. 5) Ἥλιος. 6) Κίρκη. 7) Αἰαίη. 8) Od. X. 135 f. 9) Μῶλυ. 10) Σειρῆνες. 11) Od. XII. 39 f. 12) Σκύλλη. 13) Cd. XII. 85 f.

1) Χάρυβδις. 2) Od. XII. 104 f 3) θρινακίη. 4) Cd. XII. 127 f.



10. オデュセウスとセイレーネス

カリュブディス[1]の渦卷に對しても、[2]キルケーの忠告を守つて無事に通過する。次にトリナキエ[3]といふ島に着いたが、船員等が禁を犯してその島の家畜を殺したので[4]、出發後恐ろしい暴風に遭ひ、船は微塵に碎けてしまふ。オデュセウスは破船の龍骨と帆柱とを集めて筏を作り、それに運ばれて唯一人カリュプソーの島に着く。この島でカリュプソーの戀に引留められ七年の歲月を送つてからの出來事は吾々の既に述べた所である。

吾々は、それ故に、最早カリュプソーの島を去り、スケリア國からも、以上の如き長物語をした後に、故鄕に向つて送り出された所のオデュセウスを語らねばならぬ。扨て故國イタケーでは二十年の空閨を守る彼の妻ペネローペイアに對して百人に餘る求婚者が執拗に言ひ寄つて橫暴を極める。ペネローペイアは、これ

を遁れるために、養父に捧ぐべき衣服を織り上げてから返答をすると約束し、晝間織つては毎夜それを解きつゝ、時日を遷延させる。[1] 然し三年の後この奸策も見破られて求婚者達の狼藉は益々募つて來る。オデュセウスの一子テーレマコスは女神アテーナーに促され、父を探して旅に立つ。ペロポンネーソスのプュロス[2]に赴き老王ネストール[3]に優遇せられ、[4]更にラケダイモーン[5](スパルタ)に行つて王メネラオスの客となつたが、[6]やがてアテーナーの勸告によつて歸國する。一方オデュセウスはイタケーの島へ着くと、アテーナーの助力により乞食に扮して、先づ田舍で豚を飼つてゐる忠僕エウマイオス[7]の所へ行き親切に遇せられる。やがてアテーナーによつて息子テーレマコスに引合はされ、父子相擁して感激に泣く。[8] そこで横暴無頼の求婚者達を殲滅すべき計畫が立てられる。オデュセウスがやはり乞食の扮裝のまゝで宮殿に行くと、求婚者達は饗宴を開いて騒いでゐる。老犬アルゴス[9]は二十年振りに主人の歸還を見分け尾を振り耳を垂れて喜びながらも、敢て近づく力もない程に老衰し、宛もその日を待つためにのみ生き永らへた生命の如く、その場で死んで行く。[10] 求婚者達は乞食のオデュセウスを慘々に侮辱するが、テーレマコスは計畫の旨を守つて敢て忍ぶ。ペーネロペイアは求婚者の選擇條件として、十二の輪を同時に射通すべき弓術の競爭を課する。曾てオデュセウスが朋輩の或る英雄から貰つた剛弓が武庫から取出され、すべての求婚者がそれを試みるけれども誰一人その

1) Od. II. 93 f.　2) Πύλος.　3) Νέστωρ.　4) Od. III. 4 f.
5) Λακεδαίμων.　6) Od. IV. f.　7) Εὔμαιος.　8) Od. XIV. 215.
9) Ἄργος.　10) Od. XVII. 300.

弓を曲げることが出來ない。乞食のオデュセウスはテーレマコスの口添によつてその剛弓を引くことゝなり、見事に十二の輪を射通し、殘る矢を以て求婚者の巨頭を射殺し、更にテーレマコスや忠僕エウマイオスや其他の家來達の協力によつてすべての求婚者達を殺し、玆にオデュセウスは再び宮殿の主となり、王國と妻子とを取戻す。殺された求婚者達の一族共が復讐を計つたけれども、パルラス・アテーネー[1]がオデュセウスの友人メントール[2]に扮して仲介の勞を取ることによつて平和は成立し、『オデュセイア』二十四卷の物語は終るのである。

三　ホメーロス詩篇に現れたる希臘的思想とその教育的意義

當面の課題　『イリアス』及び『オデュセイア』の梗概を叙述した吾々は、その場合に感得された事實と氣分とを手懸りとして、今やホメーロス的特徴に於ける希臘一般思想とそれの教育的意義とを把握しなければならぬ。こゝにホメーロス的特徴といふのは、ホメーロス自身の生存時代よりも、遡つて彼の詩の内容を成せる事實の行はれたと思はれる前史時代を特色づけるものであるが、併しそれがホメーロスによつて詠ぜられ、又ホメーロス時代の聽衆によつて共鳴せられた限りに於て、彼の生存時代の希臘人―特にイオニア人―の思想と相通ずるも

1) Παλλὰς Ἀθήνη.　2) Μέντωρ.

のであることは容易に推定せられる。故にこの詩篇の含む精神は、前史時代のそれを主としながら、歴史時代より投げかけられた光をも反映してゐるものと解せられねばならぬ。次にこの詩篇は固より教育的意圖を以て作られたものではないから、教育的契機をそれ自體獨立に取出すことは困難であつて、寧ろ當代の希臘的思想一般の特徴を捉へ、それが當代若くは後世に於て、如何なる教育的意義を有したかを論究することが當面の課題となるのである。

人間的性情の發露　ホメーロスの詩篇に於て第一に感ぜられるのは、そこに現れて來る英雄達が、人間自然の性情をば、些かの拘束もなく素朴に自由に純眞に發露してゐることである。先づ『イリアス』篇の主人公アキレウスの事蹟を通じて吾々の心を打つものは、その外面的な勇戰武勳ではなくて、それ等の底に流れてゐる人間的性情であり、彼の行動の足跡は實に彼の心境の經過に外ならない。『イリアス』篇の發端そのものが既に味方の總帥アガメムノーンに對するアキレウスの憤怒に存するのであるが、それはまた敵から受取つた美はしき處女を廻つての兩雄の人間的な嫉妬悲戀に根ざしてゐる。愛する乙女を奪はれた男の自然的本能的苦惱は、友軍の苦境にも祖國の危機にも代へ難き深刻さを以て、老將の忠言を斥け、師傅の懇請にも動かないのである。而もまたこの癒え難き怨恨に優つて强烈なものは同じく人間的なる同性愛的友情である。己れを愛する先輩、己れが敬重する先輩パトロクロスの討死を聞いては流石剛情のアキレウスも心初めて動き、自らの執拗さを悔い、勇躍出陣しなければならぬ。仇敵ヘクトールの死屍にまで加へる彼の侮辱は、友への思慕の如何に强く、敵への遺恨の如何に深きかを想はせる。それにも拘らず、敵の老王プリアモスが父子の熱情に訴へて哀願し來れば、アキレウスの凝結せる憤怒も氷の如くに解け、ヘクトールの亡骸を鄭重に送り返し、葬儀のための休戰までも許すのである。『イリアス』篇は實にアキレウスの憤怒の發端と凝結と解消とを主脈として綴られたものであつて、彼の心境が、或は異性のために、或は親友の故に、或は父子を思うて、その人間的純情のまゝに動く所、そこに幾萬の敵味方の運命も亦動いて行くのである。

斯かる主脈に纏はつて、更に敵味方の諸將に於ける人間性の自由なる發露は到る所に見られる。交戰の眞最中と雖もアプロディテーの媒介によつてパリスとヘレネーとは甘き戀に耽溺し、又味方の苦境をよそにしてアキレウスは親友パトロクロスを側に侍らせつゝ竪琴の彈唱に欝を晴らす。アキレウスの槍に斃れ行くヘクトールは息の下から最後の念願を述べて、屍骸だけは家鄕の人々の手に葬らせて呉れと賴む。それにも拘らず城下を引廻されるこの英雄の亡骸を見て父王と王妃と、わけてもも彼の妻とは狂亂號泣して嘆き悲む。事態は

『オデュセイア』篇にあつても亦同様である。カリュプソーの執拗な戀に七年の長年月を島に送るオデュセウス、而も家郷の妻子を片時も忘れ得ぬ彼、それもこれも等しく人間的性情である。スケリアの王女ナウシカアが氣高く強き漂浪の旅人に對して胸深く躍らせる血潮、若く美しきペーネロペイアの孤闘を廻つて激しく言ひ寄る求婚者の群、それを巧みに避け通す彼女の胸に愈々募る夫君への思慕、二十年振りに再會したテーレマコスが父の頸を抱いて注ぎかける熱涙、老い迫る家畜の身ながら今日を待つて永らへた愛犬アルゴスが尾を振り耳を垂れて喜び迎へた時の主人オデュセウスの心の裡、思ひ廻らせば今もなほ感激の新たなるものばかりである。斯くの如くにして、凡そ異性・夫婦・親子・親友・同胞の自然の性情をば、何れを輕しともせず、その時々の發露に任せて敢て拘束せざる所は、實にホメーロスの描ける人生の最も著しき特徴であつて、吾々はそこに當代希臘民族の澄刺たる青春的純情を感得するのである。

擬人的神觀及び運命觀　人間的性情の自然の發露は、單に英雄達に於てのみならず、神々の間にも亦見られる。ホメーロスの詩に現はれる神々は、人間と全く同様に喜び悲み怒り惱む。そして又人間の行動に關與し、人間と共に事件の進展を引受ける。これが周知の如くホメーロスの擬人的神觀であるが、併し文化程度の低き諸民族が共通に示す所の自然崇拜―自然現象の擬人的神格化―としてこれを解すべきではなく、寧ろ明朗無邪氣なるイオニア族の精神を基調として、天才ホメーロスが卓越せる詩的想像力により、英雄達の面目と行動とに一段の生彩を與へんがために創り出した所の獨自の藝術的神觀と見るべきである。「彼の作中に現はれる神々は眞に思ひ切つて人間的である。神々に關する記述の大部分は人間に關するものではないといふことに氣附かずして讀まれるほどである。」〔波多野精一氏 西洋宗教思想史 希臘の卷第一 一五頁〕

既に述べた如く、トロイア戰爭の遠因そのものが、遠く神々の間の人間的競爭心から來てゐる。目出度かるべき結婚の祝宴に爭の種となる林檎を投じた女神エリスは、己れ獨り饗宴に招かれざりし私怨をそこに示したのである。各々の美貌を自惚れて林檎を爭ふ三人の女神、その裁判の勝利を希つてパリスに投げかける誘惑―何れも人の世の婦女子にありがちな自然の動靜である。而もその裁判の勝敗に根深き恩讐を抱いて、トロイア戰爭の近因を作らせ、更に永く敵味方に分れてこの戰爭の經過に干渉するに至つては、神々の人間的執拗さに寧ろ驚く外はない。

アガメムノーンが初め自己の有としてゐた處女クリュセーイスをその處女の父クリュセースに返さねばならなかつたのは、アポッローンがその祭司たるクリュセースの乞を容れて希臘軍に疫病

を送つたからである。卽ち神アポルローンすら己れの祭司とその娘とに私恩を施したものと言はねばならぬ。又アキルレウスが長く希臘軍に怨を抱くのも、希臘軍が慘憺たる敗戰を續けて苦境に立つのも、實は彼の母なる女神テティスがアキルレウスに斯く命じ、且ヅェウスに斯く願つたからである。母子の人間的情愛は祖國と友軍とを不幸に陷れることをも敢て辭さないのである。

神々はまた性愛に因る嫉妬や魅惑に於ても人間的である。女神テティスがヅェウスに上述の願を述べて語り合ふのをヅェウスの妻ヘラは痛く嫉妬し、その子ヘーパイストスの取りなしによつて漸く機嫌を直す。又希臘軍に味方してゐるヘラは希臘軍の形勢好轉の時、ヅェウスをしてトロイア軍を助けざらしめんがために、アプロディテーから魅力の帶を借り全美を盡してヅェウスを誘惑し、戀の情熱に陶醉せしめて、戰も政治も忘れさせるのである。

神々の變裝と僞瞞も亦人間的神觀の顯著な表現である。アポルローンは僞りの夢を送つてアガメムノーンを危く冒險の戰に誘ひ、海神ポセイドーンは豫言者カルカースの姿に化し喊聲を以て希臘軍を勵ます。アポルローンはまたトロイアの勇將アゲーノールに扮し、城門に迫り來るアキルレウスを故意に城外に挑み導いて、城を安全ならしめる。『オデュセイア』篇に於ても女神アテーナーは常にオデュセウスの援護者指導者であつて、或は乙女に假裝して彼をスケリアの王宮に導き、或はオデュセウスの友人メントールに扮して、殺された求婚者達の族黨とオデュセウスとの間の講和成立を仲介する。

人に類して人の如くに行動する神々は、全智全能にあらずして相互の制肘に從はされ、更に人と共に運命の支配下に立つ點に於てやはり人間的である。[1] オリュムポスの神々の首長たるヅェウスと雖も、例へば戰を繼續せしむべきか否かに就いて諸神の意見を求め、ヘラの建策のまゝに戰を經過せしめねばならず、又我が子サルペードーンがパトロクロスに殺されるのを目擊しながら、これを如何ともなし難いのである。アキルレウスが受けた豫言―トロイアを攻略すれば榮譽は絕大なるべきも早生するであらうとの運命[1]―に神なる母テティスも子なる英雄アキルレウスも共に素直に服從せねばならない。尤もこの運命觀は、後期希臘思想に於けるが如く世界の必然的支配力[2]として明確に把握せられ表示せられるまでには至らなかつたけれども、神々をして全智全能ならしめざる擬人的神觀の一面としては隨所に暗示せられてゐるのである。

樂天的民族精神　全智全能ならざる神々と英雄達とが共に運命の支配に從ひながら、而も希臘軍は同胞と祖國とに終局の勝利の來るべきことを信じて疑はなかつた。豫言を知り母の諫止を受けながら、敢て征途に上るアキルレウスの心には、身の早生を代償として祖國

1) μοῖρα, εἱμαρμένη.　2) ἀνάγκη.

に光榮を齎らし得べきことが念ぜられゐた。これに反して敵將ヘクトールはその勇戰にも拘らず、敗亡の豫感に胸騒ぎを覺えたことを、この希臘詩人は歌つてゐる。斯くして希臘軍の勝利とトロイアの陷落とは究極の到達點として豫示せられ、それが『イリアス』篇の基調に安らかさと明朗さとを與へてゐるのである。『オデュセイア』篇に於ても亦、その主人公が、幾多の苦難に身を曝し、愚かなる部下のすべてを失ひながら、なほ自らの狡智多才を以て、己が生命を保ち家鄕の妻子に歸り行くことが、卷頭第一に歌はれてゐる。希臘民族が自らの上に終局の勝利を信ずるといふこの樂天的民族精神は、それ故にホメーロス詩篇を通じて屢々暗示せられ、而も希臘軍の苦境と危機とに際して特に意識的に強調せられてゐる。我が娘クリュセーイスの返還を求める父、卽ちアポローンの祭司クリュセースは、希臘軍の總帥アガメムノーンに向つて、「オリュムポスの神々は、貴方がプリアモスの都(トロイア)を攻略して無事に歸國することを許してゐる。」と斷言する。テティスがゾェウスに乞うて希臘軍に疫病を送らせるのも、祖國を滅亡に誘ふためではなくて、唯希臘人が、アキレウスに加へた侮辱を悔い改めるまでとの條件付である。征戰九年にしてなほ勝算なきアガメムノーンが船を解いて歸國せんとする時、女神アテーナーはオデュセウスに命じてこれを引留めさせ、オデュセウスは、十年目にはトロイアを攻略し得るといふカルカースの豫言を告げて友軍の將士を激勵する。ヘラがゾェウスに建策して先づ初めにトロイア軍の勝利を取計らはせるのも、終局に於ける希臘軍の勝利を豫想してゐるからである。オデュセウスの冒險譚は聽く者をして幾度か恐怖と焦燥とにおのゝかせるのであるが、主人公の奇才はよくその危機を脫却し、神の掩護は常に彼を終局の幸福に導く。

思へばアキレウスの勇武と憤怒とを廻るトロイアの征戰十年、オデュセウスの聰明に貫かれる漂浪苦難の十年、この間に神々は人間的性情のままにまに去就し、英雄將士も亦一見祖國を忘れ同胞を顧みざるが如き素朴なる純情に生きながら、而もそれ等無邪氣なる生活の根柢には、終局の勝利を確信し、祖國に對する神々の最後の支持を疑はざる明朗且敬虔なる心情が貫いてゐたのである。發刺として囚はれざる生活に身を委ね、奔放なる情熱の發露のままに、自然と人生との禍福を豐かに迎へ、成功と失敗と悲喜哀歡とを不斷に繰返しながら、その涙多き眼に結局は輝かしき希望を湛へてゐる姿—これこそは人生靑春の姿であり、ホメーロスの歌へる人生は、實に同胞と祖國とに宿る久遠の靑春に外ならなかつたのである。

戰の理想と平和の理想『イリアス』篇は言ふまでもなく戰の物語であり、『オデュセイア』篇も亦巨人や蠻族や怪物や家鄕の仇敵等に對する爭鬪の記錄である。アキレウスもアイア

スもディオメーデースもパトロクロスも希臘方の勇將であり、トロイア方にあつてもヘクトールを初めとして勇武の戰蹟は著しい。オデュセウスも單なる奸智によつてではなく、雙びなき力に依て其の運命を切開いてゐる。ホメーロス詩篇の內容が希臘民族の武功を詠じ、征服者の高邁な氣品を湛へてゐる事、一言にして戰の理想を示してゐる事は自明の事實である。

それにも拘らずこの二大詩篇はまた平和に於ける希臘民族の理想を描くことに卓拔の筆を用ひてゐる。神々や英雄達の人間的性情は平和の時にも現はれ得べき種類のものであり、吾々は實際ホメーロス詩篇の隨所に於て、それが戰記であることを忘れて、人生の美はしさに醉はされるのである。『イリアス』篇の中でも特に有名なアキレウスの楯は、戰や死の外に平和と結婚と饗宴とを刻み描いて、豐かな生活相を示してゐるのであるが、[1]更に『オデュセイア』篇がすぐれて美はしく傳へるスケリア國の樂土は、當代希臘民族の憧れた平和の理想境を最も端的に表明してゐる。この國人ファイエーケス達はもと巨人キュクローペスの國の近くに住み、この蠻族巨人の壓制に苦んでゐたのであるが、ナウシトゥース[2]といふ王に指揮せられてこのスケリア國に移つて來たのである。オデュセウスが漂着した時はこの王は旣に歿して、その子アルキノースが君臨し、自然の富と國民の航海術と名君の善政とによつて益々繁榮してゐた。都城は城壁に圍まれ、神々の殿堂と王宮と民家とが高く聳えてゐる。王宮の周圍

1) Il. XVIII. 481—614.　2) Ναυσίθοος.

には見事な果樹園があつて、柘榴や桃や林檎や無花果や橄欖が美しく實り、寒さも旱魃も知らぬ葡萄園では滴る葡萄酒を人々が搾つてゐる。花園には一年中花の絕え間がなく、その中に作られた二つの泉水は、花園の灌漑と都城の人々の飮料とに無盡の淸水を噴き出してゐる。宮殿の莊麗はまた格別で、黃金の門の兩脇には金銀の猛犬が据置かれ、眞鍮の壁に添つて並べられた腰掛には、その國の處女達の織つた見事な覆ひが掛つてゐる。五十人の婢女達は穀物を挽いたり、紫色の羊毛を捲き返したり、機織にいそしんだり、夫々に家事向の用を足してゐる。[1]國王も王妃も王女も廷臣達も皆高貴で聰明で親切である。冒險と爭鬪とに疲れた漂浪の旅人は、この國に於て、あらゆる歡待を受け、面目を施し、家鄕への舟路に送り出されるのである。戰を讃し征服に勇む希臘民族は、斯くして同時に平和を愛し、樂土の生活に憧れる民族である。この事實は吾々を誘つて今や一層直接的なる教育的意義をホメーロス詩篇の中に探求せしめるであらう。

陶冶理想としての智勇兼備　以上に列記した諸相は希臘的思想を特色づける契機として、爾來永く希臘民族の生活を支配し、希臘人的教養の基調を成したものであつて、その限りに於ける教育的意義を見逃し得ないのであるが、併し希臘教育史固有の觀點より見て、—換言すれば爾後の希臘教育史そのものを構成する主要契機として—ホメーロス詩篇中特に注

1) Od. VII. 80—132.

目すべきは次の諸點である。第一にホメーロス詩篇はアキュレウスの勇武とオデュセウスの聰明とを以て希臘的陶冶理想の主要契機を示してゐる。この兩英雄は夫々に『イリアス』篇と『オデュセイア』篇との主人公であるが、兩人に體現せられた面目はそのまゝ當代希臘人の理想的生活形態である。而もアキュレウスにも智はあり、オデュセウスにも勇はある。結局智勇兼備の人、更に言へば和戰何れを問はず、透徹せる頭腦と強力なる實行力とを有する人が、ホメーロスの描ける理想的人物である。この事は二大詩篇の全體を通じて捉へられるのであるが、就中『イリアス』篇中の次の一節は、師傅が子弟に對して端的に示せる陶冶理想として注目に値する。即ちアキュレウスの老師傅フォイニクスは、アキュレウスに向つて、友軍の苦境を見棄てゝ希臘に歸らんとする彼を諫止せんがために、既に久しき師弟の情愛を回想するのであるが、その言葉の中で、アキュレウスの父ペーレウスが息子の師傅としての自分に托した使命は、アキュレウスが「話の語り手であり、仕事の實行家である」[1]樣に、すべてを教へることに存したと告白してゐる。「話の語り手」とは即ち事理に通じ判斷が正しく、而もその知識判斷をよく表現し得る人であり、「仕事の實行家」とは即ち實踐上の勇氣と練達とを具へた人である。換言すれば事物の道理をよく觀る所の理論（テオーリア）[2]と、それに從つてよく爲す所の實踐（プラークシス）[3]とを兼備せる人がそこに目ざされてゐるのであつて、これこそはホメーロス時代の陶冶理想であると共に、

1) μύθων τε ῥητῆρ' ἔμεναι πρηκτῆρά τε ἔργων. [Il. IX. 443]
2) θεωρία. 3) πρᾶξις.

爾後の希臘教育史全體を通じて一貫せる陶冶理想である。アキュレウスとオデュセウスとは、その本來の面目に於て、まさにこの陶冶理想を具現せるものと見らるべく、茲にホメーロス詩篇の最も主要なる教育的意義が存するのである。

智慧と勇氣との兼備が求められ、理論的觀照力と實踐的堪能とが共に必要とせられたとは言へ、この場合に智慧が勇氣に優り、理論が實踐を指導する地位に置かれたことは更に注目に値する希臘人的陶冶理想である。[11] アキュレウスの勇はよく敵の勇將を斃し得たが未だトロイア攻略の究極目的には到達し得ず、これを成すためにはオデュセウスの智によらねばならなかつたのである。又アキュレウスの鎧を誰に與ふべきかといふ裁判に於て、智慧は勇氣に優るとて勇將アイアスよりも賢將オデュセウスがそれを與へられた。これ等の事蹟は、既述の如く、ホメーロス詩篇の內容ではなくて、所謂『叙事詩のキュクロイ』の傳へる所であるが、ともかくそれによつて智慧と勇氣との價値に關する希臘人的評價を察することが出來る。希臘教育史を一貫する主知主義的特色が茲に早くも萌芽を示してゐると言つても恐らく過言ではないであらう。

師弟關係と友情　上述の如き陶冶理想をアキュレウスに於て實現せしめるために師傅フォイニクスは力めたのであるが、この場合に吾々は老師傅が愛弟子に對して告白する切々た

る情愛に心を打たれる。「お前をさうあらせたいために、おゝ神的なアキレウスよ、俺は心からお前を愛して育てたのだ。お前は俺と一緒でなければ食事もしなかつた。そして俺がお前をこの膝にのせて先づお前においしい肉の一口を食べさせ、酒をお前の唇に含ませてやるまでは、食事をしなかつたのだ。覺束ないお前はよく酒をこぼしては俺の胸かけを濡らしたものだ。俺はお前のために隨分苦勞をした。でも俺には神樣が子供を授けて呉れさうもなかつたので、おゝアキレウスよ、實はお前を自分の息子にしたかつたのだ。後日俺が恥かしい末路を遂げぬ樣にお前に守つて貰ひたいばかりに。だからアキレウスよ、大それた考は止めて呉れ。無情な心はお前に適はしくないのだ。[1]」訓諭と懇請とを交へた老師傅の告白は綿々として盡きない。「生みの親より育ての親」を敬愛する師弟の情誼は後の希臘教育思想を通じて屢々顯現せられるのであるが、ホメーロスに於けるプォイニクスの心情はこの點に就いての原型を供してゐるものと言はねばならぬ。

老師傅の斯かる衷情にも拘らず、アキレウスの「憤怒」はなほ解消し難きほどに深刻であつた。彼の心を最後に動かし得たのは、師弟愛でも祖國愛でもなくて實にパトロクロスに對する友情であつた。アキレウスの祖父アイアコス[2]はパトロクロスの父メノイティオス[3]と兄弟であるから、この二人は親友であると共に親類關係でもあつたのである。パトロクロス

1) Il. IX. 485—496. 2) Αἰακος. 3) Μενοίτιος.

は幼少の時心ならずも殺人の罪を犯し、そのために父に伴はれて、プティアのペーレウス王の許に逃亡し、そこでアキレウスと共に(プォイニクスを師傅として)養育せられた[1]。斯くしてこの二人は一種の同性愛的關係に於て結合し、希臘人の所謂パイディカ[2](愛せられる後輩)とエラステース[3](愛する先輩、こゝではパトロクロス)として現れてゐるのである。自らの鎧をパトロクロスに貸して出陣させるアキレウス、更にパトロクロスの討死を聞いては海底にまでも響く號泣を以て哀悼し、一切の怨恨を棄てゝ親友の弔合戰に奮起するアキレウス、つひに仇敵ヘクトールの屍骸を亡友の靈前に具へて綿々たる思慕を寄せるアキレウス、吾々は彼に於て友情の力の如何に絶大であるかを目のあたり示されるのである。希臘軍の運命を救つたのは實にアキレウスの友情に外ならない。さればこそ後世の希臘人は、例へばプラトーンが『饗宴』篇のプァイドロスをして說かしめてゐる如く、アキレウスとパトロクロスとの關係をばパイディカとエラステースとの最も美はしき愛の典型として讃美したのである[4]。そしてこの同性愛的關係としての愛若くは友情(エロース[5]、プィリア[6])こそ、希臘に於ては師弟關係にも優つて教育的機能を發揮し、從つて教育本質觀の基調を成したものであり、否寧ろ希臘に於ける師弟關係は畢竟エラステースとパイディカとの結合に外ならなかつたのである。後に詳述せらるべきこの主要問題に就いて、『イリアス』篇が最も偉大なる範型を描いてゐるのは、實にホメーロスの名

1) Il. XXIII, 85—93. 2) παιδικά. 3) ἐράστης. 4) Platon, Symposion. 180. 5) Ἔρως. 6) φιλία.

を希臘教育史の劈頭に輝かせる不拔の功績である。

陶冶内容としての體育と文藝　智勇兼備理論と實踐との結合といふ陶冶理想に對應して、希臘の教育は體育[1]と文藝[2]とを永く陶冶の主要内容として傳承したのであるが、その源泉がやはりホメーロスの詩篇に現れてゐる。先づ體育に就いては、『イリアス』篇第二十三卷に、希臘軍がパトロクロスを火葬に附したとき、その墓前に於てアキレウスの主催により盛大な葬祭競技を行つたことが描かれてゐる。[3]この競技は死者の靈を慰めるためであつて、後世の如く神の祭として行はれたのではない。而もこの場合に死者の慰靈として先づ念頭に浮べられたのは、恐らく人々に種々の品物を分與することで、その分與の方便として競技に品物が賭けられたといふ趣がある。故にパトロクロスの火葬が終つて人々が解散しようとするのをアキレウスが呼び留め、先づ船から種々の賞品を持運んでそれを競技の成績等級に割當てることが行はれるのである。そして單に最優勝者だけでなく、參加者のすべてに賞品が宛てられてゐるのを見ても、競技の目的は本來葬儀の主催者が物惜みせずに品物を人々に分與することに存したといふ事實を暗示してゐる。

扨て先づ行はれた競技は騎士に關するもの、卽ち戰車(二輪車)を御して走る戰車競走[4]であつて、その賞品は第一等には手技に熟練した奴隷の娘と把手の附いた三脚釜、第二等には六

1) γυμναστική.　2) μουσική.　3) Il. XXIII. 260.　4) ἡνιοχεία.

1) Il. ΛXIII. 262 f.　2) πύγμαχίη.　3) Il. XXIII. 651 f.
4) παλαισμοσύνη.　5) Il. XXIII. 700 f.　6) ταχυτῆτος ἄεθλον.
7) Il. XXIII. 740 f.　8) Il. XXIII. 798—882.

歳になる元氣な牝馬で腹に騾馬を孕んだもの、第三等にはまだ火に掛けたことのない大釜、第四等には黄金二タラントン、第五等には二本の把手の附いた新しい盃が與へられた。[1]次に行はれた競技は拳鬪[2]で、その勝者にはまだ馴らされぬ六歳の騾馬、敗者には二本の把手の附いた杯が賭けられた。[3]第三に行はれたのは角力[4]で、勝者には十二頭の牡牛に値する大きな三脚釜、敗者には四頭の牡牛に値する奴隷娘が與へられた。[5]第四に徒歩競走[6]が行はれ、第一等には銀の混ぜ皿、第二等には肥え太つた牡牛、第三等には黄金半タラントンが與へられた。[7]なほそれに次で槍投・圓盤投及び射術の競技が記されてゐるけれども、[8]通説に從へばこの三種の競技は後世に竄入せられたものと思はれる。

ホメーロスはこれ等各種の競技に就いて、夫々の賞品の價値や由來・性質を語り、又競技に參加した諸將の系譜や特徴や競技振りや觀衆の喝采などを如實に精叙してゐる。吾々はそれによつて、凡そ名聲ある戰士たる者は當然何等かの卓越せる力倆を有し、それを單に戰鬪に於て發揮するばかりでなく、競技に於ても輝かしく顯揚するものであることを想察し得るのであつて、既に武人のたしなみとまでなつてゐる競技の地位をそこに見出すのである。この事は『オデュセイア』篇に於て一層端的に示され、競技の堪能は戰士を商人から區別する主要標識とせられてゐる。卽ちスケリア國の王はオデュセウスを歡待し彼を故郷へ送り出

1) Il. XXIII. 262 f.　2) πύγμαχίη.　3) Il. XXIII. 651 f.
4) παλαισμοσύνη.　5) Il. XXIII. 700 f.　6) ταχυτῆτος ἄεθλον.
7) Il. XXIII. 740 f.　8) Il. XXIII. 798—882.

す船の用意が整つたとき、送別の饗宴を開いた上に、側近の貴族の若者達に競技を行はせてオデュセウスに見せ、故郷への土産話としてその國人の競技に於ける卓越を報告せしめようとする。その種目は、徒歩競走、角力、跳躍、圓盤投、拳闘であつて、賞品は賭けられなかつたが若い貴公子達が夫々妙技を揮つて歡び競ふ。つひに王の息子ラオダマス[1]がオデュセウスにも何か競技をさせようと發議し、王も自らそれを勸めたが、オデュセウスは只管に歸國を急いで辭退する。そこでエウリュアロス[2]といふ青年がオデュセウスを面詰して「客人よ、貴方はどうも競技を心得た男らしい男とは思はれない。貴方は船であちこちを航海する水夫達、いつも船荷の事ばかり氣遣ひ國へ歸つてからの儲けに慾張つてゐる商人共の頭領であらう。貴方はどうも競技者[3]らしくない。」と言つたので、オデュセウスは大いに憤慨し、彼等の誰が投げたものよりも重く大なる圓盤を摑み、誰よりも遠く投げて一同を震憾させ、そして望みとあらば拳闘でも角力でも競走でも何でも相手をしようとて彼等を辟易させる。[4] この挿話によつて吾々は當代の希臘諸國に於て競技が上流貴族武士階級一般の教養にまで普及してゐた事實を推定し得るのである。

次に體育と竝んで希臘教育史上に主要陶冶内容となつた文藝―音樂を中心とする精神的教養一般―はホメーロス諸篇に於ては特に取出すべき程の形態に叙べられてゐないけれども、竪琴[1]の彈奏に合せて英雄譚を吟唱することは普ねく行はれたことが察せられる。『イリアス』篇のアキレウスはアイアスとオデュセウスとが出陣を勸説に來た時、竪琴を奏しつゝ勇士の武勳を讃へる歌を吟じてゐた。而もこの竪琴は彼がさきにキリキアのエーエティオーン[2]の都を攻略した時、戰利品として獲得したものである。[3] 又『オデュセイア』篇に於てもスケリア王がオデュセウスのために送別の饗宴を開いた時、前述の競技の始まらぬ中に、先づ彈唱詩人デーモドコスが招かれて興を添へる。[4] そして王の言葉に從へば、竪琴は盛宴には「附物」[5]である。吾々は既に、ホメーロス以前に彈唱詩人と竪琴と英雄譚的な斷片詩とが數多く存在したことを推定したのであるが、ホメーロス詩篇は上述の如く、この事實を十分に反映する章句を含んでゐるのである。

竪琴と英雄譚の彈唱の外に、集會[6]も亦精神的教養を獲得すべき方法と機會とを提供したものと思はれる。ホメーロス詩篇は屢々將士が集會を開いて論議することを述べてゐるが、アキレウスの師傅プォイニクスはこの集會が人間教養の機會であることを暗示してゐる。即ち彼はアキレウスがまだ幼稚な子供であつた時のことを「戰の禍害をも知らなければ、人々がそこで立派な者となる所の集會をも知らなかつた」[7]と述べてゐる。この集會に於て人々の論を聽き又自ら思慮し辯論することによつて、當代の希臘人は所謂「話の語り手」即ち

1) Λαοδάμας. 2) Εὐρύαλος. 3) ἀθλητήρ=ἀθλητής.
1) Od. XIII. 97—207.

1) φόρμιγξ. 2) Ἠετίων. 3) Il. IX. 186—190. 4) Od. VIII. 44.
5) συνήορος=συνάορος. Od. VIII. 99. 6) ἀγορά. 7) Il. IX. 441.

精神的教養の所有者となつたのである。

女子の陶冶理想としての貞潔と勤勉　ホメーロス詩篇が描く所は主として男子の理想と教養とであるが、女子に關しても貞潔、勤勉の婦德を暗示してゐる所が少くない。トロイア戰爭の原因を成したヘレネーは女神達の美の競爭に因つて作り出された奇しき運命に支配されて、パリスに拉し去られたけれども、併しメネラオスに對する愛を失つた譯ではなく、殊にパリスの戰死後は、トロイア城中にありながら祕かに希臘軍を助けてゐた。そしてつひには、前述の如くメネラオスと共にスパルタに歸り舊位に復したのである。更に著しき貞潔の模範は言ふまでもなくオデュセウスの妻ペネローペイアである。孤闈を守ること二十年、執拗な求婚者達をば、智略と忍苦とを以て拒否しつゝ、只管に夫の歸國を待つて、つひに目出度き日を迎へた彼女こそは、希臘民族に取つて永遠に貞婦の鑑となつたに相違ない。

貞操の堅固さにも優つてホメーロス詩篇の描ける婦德は家事的手藝の勤勉堪能である。既に述べた如く、スケリア王國の自然と文化とは當代希臘人に取つての理想の樂土であるが、そこの王宮では五十人の婢女が家事手藝にいそしんで居り、ホメーロスの說く所によれば、「ファイエーケスの人々はその男達が何れの國の男にも優つて海上の航行が上手な樣に、女達は機織の術にかけては何處の女よりもすぐれてゐた。それは女神アテーネーが彼等に何人にも

1) Od. VII. 108—111. 2) ῥαψῳδος. 3) Δήλος 4) αἰοδός.
5) Ploutarchos. Lykourgos. IV. 4.

優れる手藝と聰明な心とを與へたからである。」[1] 要するに夫への貞潔と家事への勤勉はホメーロスの描ける理想的女性の主要特徵であつて、この謂はゞ良妻賢母主義が當代女子の陶冶理想であり、而もそれは希臘教育史を一貫して殆んど變りなき傳統となつたのである。

希臘教育に對するホメーロス詩篇の影響　ホメーロスの歿後その原作が所謂ホメーリダイの手によつて增補修正せられたであらうことは既述の如くであるが、同時にこの詩篇は朗唱詩人[2]によつて、初は貴族の邸宅で、後には祭典の群集の前で、口演せられた。既に前六·七世紀頃、イオニアなるデーロス島[3]のアポッローンの祭典には、各地より集ひ來つた希臘人達がホメーロス詩篇の朗唱に耳を傾けた。以前の彈唱詩人[4]は竪琴に合せて歌つたのであるが、この朗唱詩人は口で朗吟するだけである　この朗唱詩人達の活動によつて、ホメーロス詩篇はイオニア地方から次第に希臘各地に流布せられたものと思はれる。プルータルコスによれば、リュルゴスは諸地方を旅行せる途中イオニアに於て初めてホメーロスの詩を知り、それが快樂や放縱を含むにも拘らず、それに劣らぬ政治的竝びに教育的價値をも有することを認めて、熱心に筆寫し整理して故國(スパルタ)へ持歸つた。當時この詩の名聲は希臘各地に傳へられてゐたが、その斷章を所有する人は少かつた。それをリュクルゴスが初めて故國の人々に如實に知らしめたといふのである。[5] リュクルゴスは後述の如く紀元前九世紀頃の偉人と信ぜ

られてゐる傳說的人物であるが、ホメーロス詩篇の希臘本土に傳はつた年代は傳說に蔽はれてゐる程に古いことが推察せられるので、而も斯く古き時代より既にこの詩の教育的價値が認められてゐたことは吾々に取つて殊に注目に値する。希臘本土の中で特に强くホメーロスへの關心を寄せたのはアテーナイである。そこでは僭主ペイシストラトス[1]が諸學者をしてホメーロス詩篇を蒐集校訂せしめ、且四年毎に開かれるパンアテーナイア[2]の祭にホメーロス詩中の若干章が一定の形式に於て、又一定の順序を以て、朗詠せらるべきことを定めたと傳へられてゐる。[3] 手に文藝の象徴たる月桂樹の枝を翳した朗唱詩人が、ホメーロス詩篇中わけても感激豊かなる二・三の斷章[4]を音吐朗々と吟唱し、幾萬の民衆が胸躍らせてこれに傾聽した光景は、想うても鮮かしいものである。これよりアテーナイを出發點とし中心として、ホメーロスの感化は新たに希臘各地に波及したのである。況んや後述の如く、古典時代の希臘民族が、この國民的詩人の作品を國民教育の主要教材としてより、ホメーロスは事實上全希臘人の精神的教養の基底を支へるものとなつた。勿論ホメーロスの勢力が斯くの如く强大であるだけ、それだけ、これに對する排撃も起らないではなかつた。例へば既述の如く、前五世紀頃の放浪詩人クセノファネースは、「古來すべての人々がホメーロスに從つて學んで來た」といふ教育的勢力をこの詩篇に就いて肯定しながら、まさにそれ故に、ホメーロスとヘーシオドスとが人間達の間に於て咎むべく、恥づべき一切の事、窃盜や姦淫や相互の爭鬪を、神々に負はせてゐることの如何に不當であるかを痛撃してゐる。[1] プラトーンも亦後述の如く、ホメーロス詩篇の神々が人間の如くに爭鬪や殺戮や復讐や淫樂を敢てすることは、教育上如何に排斥すべき神話であるかを力說してゐる。[2] それにも拘らず、プラトーンは、ホメーロスの讃美者が、この詩人を全希臘の教育者となし、人間の統治と教育とのために、この詩を學び、この詩人に從つて全生涯を形成すべきであるとしてゐる所を認めねばならなかつたのである。[3]

1) Πεισίστρατος (r. 560—527 B.C.)　2) παναθήναια.　3) Pausanias, VII.26; Cicero, De Oratore, III. 34, 137.　4) ῥαψῳδία.

1) Xenophanes, Sillci [Diels, 10. 11.]　2) Platon, Politeia. 377 d, 390 c.
3) Platon, Politeia. 606 e.　4) Ἡσίοδος.　5) Δίος.　6) Κύμη.

第四節　ヘーシオドスの詩篇とその教育的意義

一　ヘーシオドスとその作品

ヘーシオドスの生涯　ホメーロスと相竝んで希臘叙事詩の祖と仰がれ、而もホメーロスとは異なれる獨自の詩風を具へ、希臘教育史上に占むる地位に於てホメーロスに次げるものはヘーシオドス[4]である。彼の生涯に就いてはその作とせられる詩篇の章句と、後世の作家が彼の死に關して蒐集せる傳說とに基づき、大體次の如くに推定せられる。彼の父ディオス[5]は小亞細亞のエオリア植民市なるキュメ[6]で農業と海上商業とに從事してゐたが、生計に窮して希臘本

土のボイオーティア州なるヘリコーン[1]山麓の小邑アスクラ[2]に居を卜した。キュメー若くはアスクラに於て二子ヘーシオドスとペルセース[3]とが生れ、父の死後財産はこの二子に分けられた。怠惰で放蕩な弟ペルセースは法官に贈賄して、より多くの財産を取りながら、それを空しく費消して貧窮に陷つたけれども、ヘーシオドスは忠實勤勉に農牧を續けて來た。或日ヘリコーンの山で羊を飼つてゐると、詩神ムーサ達が彼に現はれて「けだかき歌」(多分『勞作と曆日』を指すのであらう)を教へ、そして次の様に言つた。「吾々は眞實に似たる多くの僞りを語ることを知つてゐるが併しまた欲すれば眞實を告げることも知つてゐる[4]」と。これによつてヘーシオドスはホメーロス風の浪曼的な英雄詩に對立して、神々に就いても人生に就いても其の眞實を詠ずることを自己の使命と信じてゐたことが覗はれる。エウボイア州の首都カルキス[5]に於てホメーロスと詩の競爭をして勝利を得たといふ記錄[6]は信ずるに足りぬとしても、ヘーシオドスの詩風が時には希臘人によつてホメーロスの詩風以上に尊重せられたことを暗示してゐる。同じ傳說によれば、この競爭の後ヘーシオドスはデルフォイに赴き、競爭で得た賞品三脚釜を奉獻して神託を求めた所、ネメアのゾイウスの森で死に遭ふであらうとの豫言を受けたので、コリントス地峽のネメアを避けてロクリス[7]のオイノエー[8]に移り住んだ。併しその地もまた亦ネメアのゾイウスに獻ぜられてゐた。ヘーシオドスは其處でアムフィアネース[9]とガニュクトール[10]

1) Ἑλικών. 2) Ἄσκρα. 3) Πέρσης. 4) Theogonia. 27, 28.
5) Χαλκίς. 6) Erga, 655 f; Contest of Homer and Hesiod. 7) Λοκρίς.
8) Οἰνόη. 9) Ἀμφιφάνης. 10) Γανύκτωρ.

1) Ἀσπὶς Ἡρακλέους. 2) Ἔργα καὶ Ἡμέραι. 3) Θεογονία.

といふ兄弟の許に身を寄せたが、彼等の妹を誘惑したとの嫌疑によつてその兄弟達から殺された。彼の遺骸は海に投ぜられたが、海豚によつて岸に運ばれ、オイノエーに葬られた。後年更に彼の遺骨はオルコメノスに移されたとのことである。

ヘーシオドスの生存年代に就いても確證はない。ヘーロドトスは、既述の如く、彼をホメーロスと同時代の人と記してゐるが、併し彼の詩は明かにホメーロスの詩を前提としてゐるが故に(即ち彼の詩風はホメーロスのそれと意識的に對立させられ、又彼の詩の內容には、例へば『ヘラクレースの楯』[1]の如く、ホメーロスの詩に倣へるものがあるから)、彼は恐らくホメーロスより約一世紀後れて前七五〇年頃に聲名を馳せたものと思はれる。(尤もホメーロスを前提とせるヘーシオドス作品の內容は、後人の竄入であるとも考へられるが、それにしてもこれを竄入するに人々によつて一般にヘーシオドスがホメーロスよりも後年の人であると信ぜられてゐたことが覗はれる。)

ヘーシオドスの作と傳へられる叙事詩は十三篇あるけれども、彼の眞作と信ぜられ、全き形に於て遺され、且彼の詩風と思想とを最もよく表現した主要作品は、教訓詩の代表たる『勞作と曆日』[2]及び系譜詩の代表たる『神統記』[3]である。因にヘーシオドス詩篇が、ホメーロスのそれと同じく、所謂叙事詩用語たるイオニア語を以て、六脚韻の詩律に書かれながら、ホメーロスよりも

一層多くエオリア及びドーリアの方言を交へてゐるのは、前記の如き彼の生涯と相照應するものと思はれる。

『勞作と曆日』の梗概　『勞作と曆日』は八二八行から成る長篇の教訓詩で、その内容は大別して三段と見ることが出來る。第一段（一―三八三）は懶惰な弟ペルセースへの忠告として、正義の重んずべく勤勞の貴ぶべきことを、各種の神話・寓話に托して教へてゐる。第二段（三八四―七六四）は農夫の家庭生活や農牧生活に就ての規準を與へたもので、所謂『勞作』の部分である。第三段（七六五―八二八）は農業や其他の仕事に關係して曆日の適不適を述べたもので、所謂『曆日』の部分がそれである。今各段の梗概を辿りつゝ作者の意圖を捉へて見よう。

作者は卷頭に詩神ムーサ達を呼び求め、彼等の父ゾェウスの萬能を讃へしめ、そして「ゾェウスよ、雷鳴を起し、いと高き所に住めるゾェウスよ。その眼を以て見、その耳を以て聽きつゝ、正義を以て正しさを直くし給へ。而して余は、ペルセースよ、眞實を語らん」[1]と言つてゐる。正義の審判者ゾェウスを前にして、兄弟の爭ひを訴へつゝ不正の弟ペルセースに忠告せんとする全篇の主題がこゝに示されてゐるのである。扨て斯かる序曲の次に作者は、凡そ爭ひの神エリス[2]には二つの種類があるとて、一方には有害な、殘酷な、人の好まぬ爭ひがあり、他方には人を勵まし、隣人と競爭させ、怠惰な者を勤勉ならしめる有益な爭ひがあることを告げてゐる。作

1) Erga. 8—10.　2) Ἔρις.

1) ὁσῳ πλέον ἥμισυ παντός.　2) Πανδώρα.　3) Erga. 47—105.
4) Προμηθεύς.　5) Ἐπιμηθεύς.

者と弟との爭ひをこの有益な爭ひであらしめたいといふ念願・忠告がそこに覗はれるのである。斯くして作者は弟との爭ひ事を說明し、兄弟が父の遺産を分けたのに、弟はより多くを持去り、而も法官に贈賄して彼等を買收したことを指摘する。そして作者によれば愚かな法官達は「半分が全體よりも如何に多くあるか」[1]又錦葵（ゼニアフヒ）と百合の中に（貧しい生活の中に）如何に多くの利益があるかを知らないのである。」

作者は進んで人生に於ける禍害の存在と勤勞の必要とを、有名なパンドーラ[2]の神話を以て語る[3]。卽ち狡智なるプロメーテウス[4]がゾェウスから火を盜んで人間に與へたので、ゾェウスは怒つてパンドーラを人間に贈つた。それはゾェウスの命によつて、ヘーファイストスが土と水とを混ぜて愛らしき乙女の形に作り、人間の力と聲と、不死の女神の如き美しき顏とを與へ、アテーネーが針仕事と機織の業とを敎へ、そしてアプロディテーが頭を美しく緣どり、四肢を疲らせる程の熱烈な憧れを與へ、ヘルメースは無恥と僞瞞とを與へたものであつて、斯く多くの神々からあらゆる贈物を贈られたものの謂を以て、ゾェウスはこの美しきパンドーラをば災禍の瓶を持たせて、エピメーテウス[5]に與へた。エピメーテウスはさきにプロメーテウスからゾェウスの贈物は人間の禍害になるものであるから、これを受取らずに返す樣にと言はれてあつたのに、その忠告を忘れてパンドーラを受取り、後に至つて災禍が起

つてから始めてそれを氣附いたのであつた。(プロメーテウスが「後に氣附く者」を意味するのはこのためである。)それより以前には人類の世界に悪も勞苦も病もなかつたのであるが、パンドーラが災禍の瓶の蓋を取るや、あらゆる災禍は人類の上に撒布せられ、唯「希望」[1]だけが瓶の底に留まつた。斯くしてこの世は陸も海も多くの災禍に充たされ、人々は日夜病に襲はれ、聲なく忍び寄る不幸に取りつかれてゐるのである。

パンドーラの神話に次で、作者は更に人類が經過して來た五つの世代を回顧し、愈々現世の悲觀すべき狀態を物語る。[2] この思想は、既に存した傳說を材料として整理加工したものであらうが、ともかくヘーシオドスによつて古代人が抱いてゐた厭世的現世觀——所謂澁季の世を慨く思想——が典型的に述べられたのは注目に値する。彼によれば人類の第一期は黃金種族の代で、天上で言へばクロノス[3]が支配してゐた時代に當る。この代の人類は神々の如くに憂も苦しみも惱みも老もなく生き、あらゆる過失と災禍とから免れて饗宴の喜びに日を送つてゐた。そして眠るが如くに死せる後は、「神靈」[4]と呼ばれ、霞に包まれて地上到る處に住み、人間の監督者として非行を裁き、富を與へるものとなつたのである。第二代は銀の代で、この時代の人類は前代の金族に比べて身心共に遙かに劣り、幼稚な兒童期の百年を過し

1) Ἐλπίς. 2) Erga. 109—201. 3) Κρόνος. 4) δαίμονες.

て成人するや、互に罪惡を犯し、神々に捧ぐべき崇拜と犧牲とを怠つた爲に、クロノスの子なるゼウスの怒を買つて滅ぼされ、「地下の神靈」[1]として崇められてゐる。第三代は青銅族で、秦皮(リコ)の木から生れ、銀族よりも更に劣つて、戰を好み暴力を愛し、青銅の武器や道具を用ひて青銅の家に住み、つひに相互の手に斃れて、名もなく「黃泉」[2]の闇に沒した。第四代の人類は「英雄」[3]と呼ばれ、前代よりも高貴で正しく、テーバイに戰つたり、トロイアに遠征したりした。彼等の一部分は死んだけれども、一部分はオーケアノス[5]の流れのほとりなる肥沃の樂土、死を知らざる「淨福者の島」[6]に移された。第五代は鐵族の代なる現代で、人々は今や日毎に勞苦を負ひ、夜毎に破滅を迎へ、神々は果しなき煩累を人々に與へてゐる。そこでは父子も相爭ひ、主客も相背き、友も更に和することなく、兄弟も相親しむことがない。誓は破られ正義は蹂躙せられ、人々は寧ろ不正と暴力とを讃へてゐる。「畏敬」と「廉恥」[7]とは神々の許に去つて、殘るは人の世の不幸のみである。

五代思想によつて厭世觀を吐露した作者は、次に鷹と鶯との話を以て强者の横暴を諷刺してゐる。[8] 鶯を爪に摑んで天空高く翔り上つた鷹は言ふ。「慘めな奴よ、何を泣くのだ。お前よりも遙かに强い者がお前を摑んでゐるのだ。お前がどんな歌ひ手であらうと、今は俺の欲する所へ何處へでも行かねばならぬ。お前を喰はふが放さうが俺の勝手だ。强者に

1) ὑποχθόνιοι μάκαρες. 2) Ἀιδης. 3) ἥρωες. 4) ἡμίθεοι.
5) Ὠκεανός. 6) Μακάρων νῆσοι. 7) Αἰδὼς καὶ Νέμεσις.
8) Erga, 202—212.

抵抗を試みる者は愚かな奴だ。勝てないばかりか、恥辱に加へて苦痛を受けるに過ぎないのだから。」

強者の暴力を諷刺した作者は今や端的に弟と國の治者達に警めて、正義を讃へ勤勞を勸める。正義を守り正しく裁く人々の國は富み榮えて、戰もなく飢もなく災厄もない。暴力と殘忍とを行ふ人々はゾェウスに罰せられ、飢と災厄とに滅びて行く。ゾェウスは三萬の神靈を霞に包んで人の世に漂はせ、到る處に正義を監視させ不正を罰せしめるのである。そして又ゾェウスの娘なる「正義」[1]の女神は、誰でも僞りの讒謗を以て彼女を害する者をば父なるゾェウスに告げて罰して貰ふのである。ペルセースよ、正義こそはゾェウスが人類に與へた掟である。禽獸は正義を有たぬが故に弱肉强食であるが、人の世は正義によつて榮え不正によつて滅び行くものである。「惡德は得易く淺瀨にあつて、それに至る道は平坦で近い。然るに功德と吾々との間には神が額の汗を置いた。それに至る道は遠く嶮しい。初の道は苦しくとも頂に達すれば苦しかりし道も行き易い。」「萬事を自ら考へ、行く末と究極とがよりよくなる樣に慮る者は最もすぐれた人である。次には他人のよき忠告を聽く人もすぐれた人である。併し自ら考へもせず、他人の忠告をも心に留めない者は、度し難い人である。」ペルセースよ、俺の忠告を聽いて働け。飢はいつも怠け者と共にある。怠け者は働かずに蜜を

1) Δίκη.

食ふ雄蜂の如く、神も人も共に惡む所である。「勞作は恥辱にあらず、無爲こそ恥辱である。」[1]勞作は汝に富と譽とを齎らすであらう。「貧には恥らひが伴ひ、安らぎは富と共にある。」[2]盜みや僞りによつて富を得べきでなく、乞食や來客に不正を加へず、兄弟の妻を姦せず、老齡の父を冷遇してはならぬ。すべてこれ等の不正から遠ざかり、身心を清めて神々に仕へよ。友と隣人とを饗宴に招け。「惡き隣人は大なる不幸であり、よき隣人は同樣に大なる幸福である。」隣人との交易には正しき衡を用ひよ。「與ふることは善であるが、奪ふことは惡であり、それは死を齎らすであらう。」「華美な女の甘言に心を許すな。」「女を信ずることは僞瞞者を信ずることである。」

以上の如く正義と勤勞とを生活の一般的原理として勸奬したのが第一段であつて、次には第二段に入つては各季節に適合する勞作の規準を與へてゐる。春に耕し初めて秋に終れ。神が人間に命じた仕事を働け。家を構へ、妻を有ち、牛を飼ひ、すべての家具を備へよ。耕作の季節を外さず又今日の仕事を決して明日に延すな。適時に必要な器具を正しき形と大さとに作つて置け。二頭の牛と二挺の犂とを用意して、一方が損じたら他を以て代へよ。鶴の聲は耕作の時期と雨季とを告げるものであるから、それを聞いたら耕し初めよ。この期間を逸せず主人自ら犂を執り下僕を從へて、晴雨に拘らず耕作せよ。

1) ἔργον δ' οὐδὲν ὄνειδος, ἀεργιὴ δέ τ' ὄνειδος. (Erga. 311)
2) αἰδὼς τοι πρὸς ἀνολβίην, θάρσος δὲ πρὸς ὄλβῳ (Erga. 319)

霜降り朝風荒んで草木枯れ禽獸も萎縮する頃人々早く仕事を終へては家に歸り厚衣を着け、榮養を豐かに攝り、徐ろに心身の銳氣を養つて來るべき春を待たねばならぬ。やがて燕が訪れ初夏が辿り來れば、人々は夙に起き出で下僕をも促し、萬物生々發育する黎明時を特に忙しく働くべきである。盛夏炎熱の下に葡萄が實り山羊の肥る頃、婦女は最も活氣を得るが、男子は弱り易い。木蔭に暑を避けて新鮮な酒を傾け、食を取り、顏を涼風に向けて神に灌奠を行ふべき時である。つひに牧穫の時節となれば、穀物を容器に納めて家に蓄へ、下僕や番犬によくこれを守らせ、家人を休養させ、牛の軛を解く。斯くしてやがて又鶴の聲を聞き耕作を初める時が來て、年は環り行くのである。農牧を中心とする季節の指示に次で作者は海上舟行の季節に關し詳細な注意を與へてゐる。それから更に家庭生活及び日常の擧止に就て多くの敎訓を逐條的に述べてゐるが、その中には道德上及び敎育上に注目すべき契機が少くない。例へば結婚に就ては男子は三十歲に近き頃を最適とし、妻は四年間養育して五年目に娶るべく、而も成る可く若い娘を娶つて諸々の心得を敎へる樣にし、且その妻は近所から求めるのがよく、但し近所の笑草となる樣な結婚を避くべきことを說いてゐる。作者によれば「男子に取つてはよき妻に優る利益はなく、惡き妻に優る禍はない。」其他友人との交際、神を祭る心得、寂默の功德、饗宴に於ける態度等を述べ、又太陽に向つての放

1) Θεογονία.

尿や途上の放尿や河の上流や泉に於ける放尿を警める如き詳細な注意に及んでゐる。更に妻に接するには不吉な葬式から歸つた時を避けて、神々を祭る饗宴の後を選べといふが如き優生學的胎敎論的思想に類する說をも述べてゐる。

作者は更に第三段に轉じて、每月の曆日に就てゾェウスから來た好き日を指摘し、三十日は仕事に最も好く、一日と四日と七日とは神聖な日であり、上旬の八日と九日も仕事に好く、十一日と十二日とは羊の毛を剪り果物を收穫するに適し、特に十二日は女子が機織を初める に好き日であり、十三日は播種には惡いが植樹には最も好き日であると言つてゐる。其他誕生や結婚や諸般の事に就ての吉日と凶日とを說いた後、最後に作者は「誰でも樣々の日を讀へてゐるが、それ等の日の性質を知つてゐる人は少い。日には繼母の樣な日もあり慈母の樣な日もある。すべてこれ等の事を知つて神に不敬を致さず、鳥類の前兆を識別して反則を避ける所の人は幸福である」と結んでゐる。

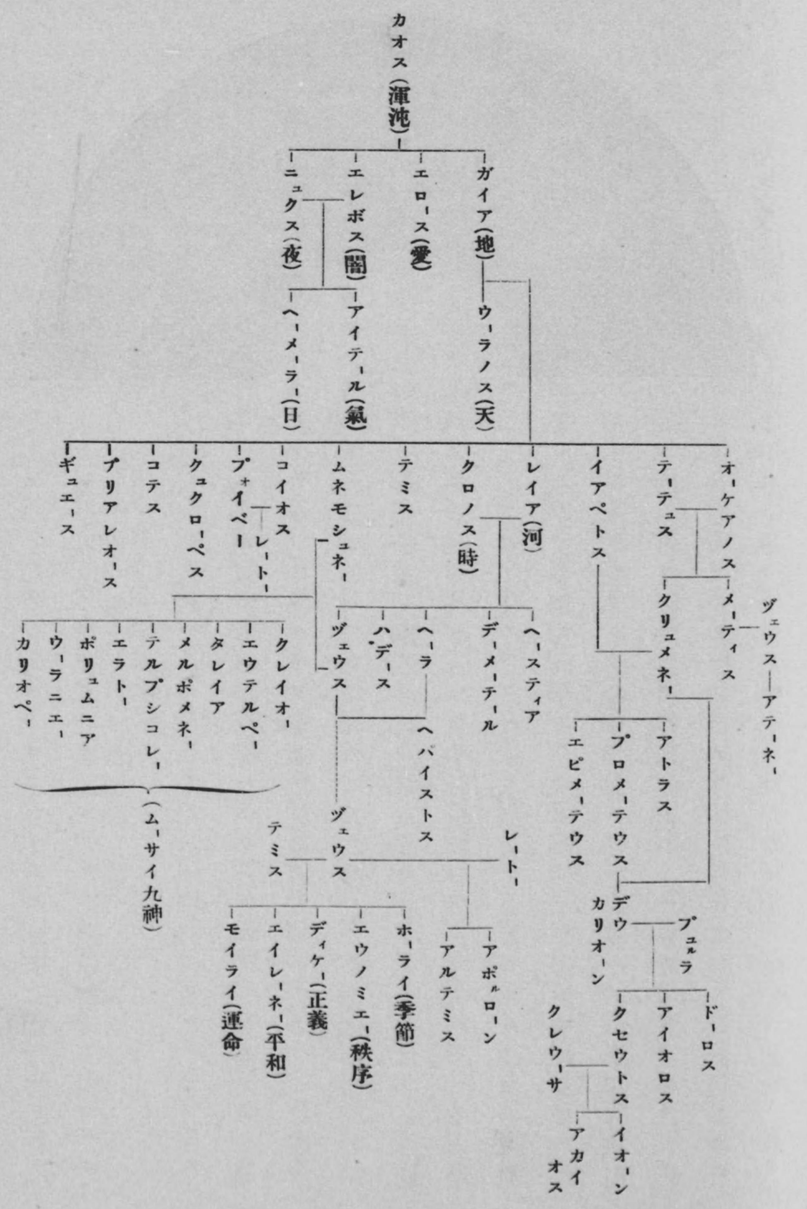
『神統記』の梗概　ヘーシオドスの作と傳へられる詩の第二類は系譜詩であつて、就中最も有名なるは『神統記』[1]である。それは一〇二二行より成り、世界の創造と神々や巨人等に就て、古くからクレーテー島や小亞細や特にもテッサリア地方に行はれてゐた多くの斷片的傳說を一定の系統に整序したものである。この詩に於ては系譜そのものゝ叙述は極めて單調無味で

あるが、その間の挿話は頗る生動的に描かれ、後世にまで重要なる影響を與へてゐる。故に吾々はこの作品の梗概を紹介するに當つて、系譜に關する限りはその要項のみを表示し、挿話の主なるものに就てはその大様を記さうと思ふ。

先づ『神統記』に現はれたる系譜と、それに希臘民族の祖先を知る必要上『婦系圖』[1]其他の所傳を加へて神々の關係を表示すれば次頁所掲の如くである。（この中には神々や巨人神の外に創世記に該當する諸現象や抽象的なる諸々の性質を象徴するものもあるので、それ等の主なるものは括弧内に註して置いた。）

『神統記』に於ける神々や巨人の爭鬪に關する挿話の中、特に重要なるものは、第一にウーラノス[2]とクロノスとの爭鬪であり、第二はクロノスとヅェウスとの爭鬪であり、第三はヅェウス及びオリュムポスの神々が巨人軍に對して戰つた物語である。ガイア[3]とウーラノスとの間に最後に生れた三人の子コトス[4]ブリアレオース[5]及びギュエース[6]は各々その肩から百の武器を發し、五十の頭を有し、四肢強く體軀巨大にして、最も獰猛であつたので、父ウーラノスから怖れ惡まれ、地下深く閨の中に幽閉せられて天日を見ることが出來なかつた。母なる地の神ガイアは彼等を中に含んで窮屈を感じ、夫なるウーラノスに對して惡い計畫を考へ、三人の子等を煽動して父に背く様に勸めたが、彼等は恐れて一語をも發し得なかつた。然るに同じくウーラノ

1) Κατάλογοι Γυναικῶν.　2) Οὐρανός.　3) Γαῖα.　4) Κόττος.
5) Βριάρεως.　6) Γύης.



11. 神々と巨人達との戰

スの子なる巨人神クロノスが母の計畫を實行せんことを申出たので、ガイアはクロノスに鐵の利鎌を與へてウーラノスを殺害せしめた。

やがてクロノスとレイア[1]との間にヘスティア[2]、デーメーテール[3]、ヘーラ[4]、ハデース[5]等が生れたが、クロノスはさきに父母なるウーラノスとガイアとから、汝は自らの子によつて打勝たれるであらうと言はれてゐたので、この豫言を怖れて、生れた子等を悉く呑込んでしまつた。レイアはこれを悲み、最後の子ゾェウスを孕むや、ガイアとウーラノスとの助によつて遠くクレーテー島に赴いてこれを生み、深山の洞窟の中で養育した。そしてクロノスに對しては、石を布に包み新生の子と欺いて呑込ませた。やがてゾェウスは逞しく成長して豫言の如くクロノスを殺したのである。

更にゾェウスはその兄弟姉妹と共に、巨人軍を相手としてテッサリアに戰つた。巨人軍はオトゥリュオス[6]の山に陣し、

1) Ῥεία (Ῥεη). 2) Ἑστια(Ιστίη). 3) Δημήτηρ. 4) Ἥρα. 5) Ἅιδης. 6) Ὄθρυος.

ゾェウスとその同胞諸神はオリュムポスの山に陣して、兩軍の戰は十年間も續けられた。ゾェウスはさきにクロノスがタルタロスに幽閉して置いたキュクロープス達を救ひ出し、その謝禮として彼等から雷鳴電光を與へられた。又ウーラノスが地中に幽閉して置いた恐るべき三人の巨神達をも救ひ出し、彼等の助力を得て巨人軍との戰を益々猛烈に戰つた。戰雲天地に漲つて、雷鳴轟き電光閃き、海陸咆り搖れて、壯烈凄慘極まりなき戰況がそこに展開せられた。これが卽ちティターネス[1](巨人達)とゾェウスとの戰であつて、後世の人がティターネスをギガンテス[2]と混同し、所謂ギガントマキア[3](巨人戰)として傳へてゐるのはこれである。この戰に於てゾェウスはつひに巨人軍を破り、彼等を冥界の奥深き所タルタロスに幽閉してしまつた。こゝに天地萬象の秩序は整ひ、ゾェウスは神々と人類との支配者となつたのである。(『神統記』はほパンドーラの物語を繰返したり、又ゾェウスが諸々の女神を妻として諸神を生んで行く物語を載せてゐるが、これは旣述の『勞作と曆日』の紹介及び前揭の系譜表に讓つてこゝには省略する。)

1) Τιτᾶνες. 2) Γιγάντες. 3) Γιγαντομαχία.

二 ヘーシオドス詩篇に現れたる希臘的思想とその教育的意義

ヘーシオドス詩篇の特徴 ホメーロスからヘーシオドスに眼を轉ずる時、吾々はそこに上流貴族の華やかなる征戰と生活とが影を失つて質朴實直なる農民生活が展開せられてゐるのを見る。ホメーロスとその門徒達とは、小亞細亞のイオニア植民地を地盤として興り、ヘーシオドスの描く所はボイオティアを背景としてゐたのに對して、ヘーシオドスの描く所には作者の個性と主觀的戒告とが强く現れてゐるのを見逃し得ない。無邪氣にして浪漫的なる叙述より切實深刻なる反省へ—そこに兩詩人の面目の相違を、而してその間に存する時代の推移を、吾々も世人と共に肯定しよう。然しながら斯かる特質の故に、ヘーシオドスの詩篇を强ひて陰慘とか憂鬱とかの色調に彩らうとするのは誤である。懶惰放逸の弟を警める彼の戒告には正義と勞作との强調はあつても、決して自らの憎惡や懊惱を含んではゐない。人類五代の墮落史を語る澆季的現世觀も、パンドーラの災禍を受取れる人類の原罪說的運命觀も、正義と勤勞とによつて齎らさるべき幸福を否定するものではない。神々や巨人の爭鬪を描く凄慘なる筆致も、結局は勝つべき者に勝たしめ、不遇なる者に光を與へてゐる。詩神ムーサイに仕へて歌ふ人は、何時でも聽く人の胸から憂を去らしめるといふのが詩人ヘーシオドスの自信である。「人がその心に新しき悲みと惱みとを抱き、胸を痛めて憂き生を送る時に

1) Theogonia. 99—103. 2) Κλεομένης (r. 236—222). 3) Ploutarchos, Agis and Cleomenes.

もムーサイに奉仕する歌ひ手が、古人の輝かしき業績と、オリュムポスに住む幸福なる神々とを歌へば、人は忽ち苦みを忘れ、些かもその惱みを想ひ浮べず、女神達の賜物—(ムーサイの賜物なる詩歌)—はこれ等すべての苦惱を人から去らしめるのである。[1]」

正義と勤勞 ヘーシオドス詩篇が與へる最大の教訓—從つて又それが希臘人の教養に及ぼした最大の影響は、言ふまでもなく正義と勤勞との尊重である。『勞作と曆日』を貫く主題は、往々誤解せられる如く農牧舟行や日常生活の規準を技術的意義に於て指示することに有するのではなくて、それ等の末梢的具體的指示の底に根本的一般的生活原理としての正義勤勞を力說することに存する。『神統記』と雖も神々と人間との支配者なるゼウスをば、正義の支持者、働く者の保護者として描くことを忘れてはゐない。偶々農牧の平民として生れ、特にも生活の戰に疲れ退ける父の後を受けて犂と牛とを賴りに身を興せる作者が、王侯貴族の豪園氣から遠く離れた舞臺を描いたのは、固より已むを得なかつたけれども、彼の教訓は決して下層民衆に對してのみ向けられたものではなく、彼は決して、後のスパルタ王クレオメネース[2]の貶した如く、奴隷達のための詩人」ではない。[3] 全希臘の人々はホメーロスと共にヘーシオドスを愛誦し、普く各自の分に應じて、正義の守るべく、勤勞の尊ぶべきを教へられたのである。餘りに貴族的であつたと言はれる希臘人の教養の中に、そして又事實上希臘教

育史を優勢に支配する貴族主義的色彩の蔭に、なほ上下を通じて正しく勤勉にその分を盡すといふ精神が貫かれてゐることを感ずるとき、吾々はヘーシオドス詩篇の教育的意義の重大さを認めざるを得ないのである。

世界觀の整序　『勞作と曆日』が含む五代思想は、人類過去の各世代に應じて、その當時に支配した神々や行はれた事件を指摘し、それによつて神々や半神的英雄の時間的竝びに價値的序列を整頓してゐる。又『神統記』が(『婦系圖』と共に)、神々や巨人や人間の系譜を明かにし、且天地創造の次第や世界及び人生の諸作用の位置づけを行つたものであることは言ふまでもない。ヘーロドトスがホメーロスとヘーシオドスとの功績を述べて「彼等は希臘人のためにその神々を作り出し、彼等に名を與へ、彼等の役目を定め、彼等の姿を描き出した」[1]と言つた讃辭は、就中ヘーシオドスに對して適切に該當する。神話の形に於ける世界觀は何れの古代民族にも共通であるが、その內容を當初の斷片的形態より體系的形態に整序して、矛盾を除き、疑惑を解かんとする希求は、特にヘーシオドスの勞によつて典型的に充たされた。そこでは單にホメーロスの傳へた神々と、ヘーシオドス自身の鄕土に傳へられた神々との間の不一致が調停せられたばかりでなく、凡そ希臘人の傳承して來た神々の性質·機能によつて、宇宙開闢の次第や神々及び人々の間の秩序が整頓せられたのである。勿論ヘーシオドスの敍述は決

1) Herodotas, II. 53.

定的意義を有せず、それと異なる神話も數多く後世に傳へられたのであるが、併しそれ等の大綱となり、或は代表的典型として、永く希臘民衆の世界觀を支へて來た點に於て、吾々はここにも亦ヘーシオドス詩篇の教育的職能を讃へねばならない。

不倫の爭鬪　自ら生める子等を呑み盡し、殺害し、幽閉する父、我が父に復讐の利鎌を向ける子、夫の殺害に子等を煽動する妻、互に背き爭ふ夫婦—凡そ人間的なる權勢欲や恩讐が執拗に生み出す數々の爭鬪を、ヘーシオドスは憚る所なく描いてゐる。彼の作品は神々や巨人を、單に擬人的に見てゐるのみならず、甚だしく不倫の行狀に描いてゐる。既に述べたる如く、クセノファネースがホメーロスと併せてヘーシオドスを攻擊したのはこの點であり、プラトーンが教育的觀點より排斥した神話も『神統記』の內容を數多く含んでゐる。ウーラノスがクロノスに殺され、クロノスがまたゼウスに殺されたといふ神話が「若し眞實であるならばそれは思慮なき若者達に話さるべきではなく、寧ろ隱さるべきである。」[1]神々の爭鬪や復讐や殺戮や變裝や巨人の戰や其他兒童を怖れさせたり、不倫に誘つたりする神話を極力非難するのが、プラトーンである。吾々はこの點が確かにヘーシオドス詩篇の教育的弱點であることを認める。然しながらこれ等不倫の爭鬪に於て、なほ子等を憐む母の愛情や、不正に復讐する正義觀等が含まれてゐることを見逃してはならない。部分的斷片的に見れば恐るべき不

1) Platon, Politeia, 378 a.

倫殘忍の行狀が描かれてゐても、全體としては却て教訓的意圖を含んでゐるのがヘーシオドス詩篇の眞面目である。クセノフアネースやプラトーンの慨嘆にも拘らず、ホメーロスと並んでヘーシオドスが永く希臘人の胸に共鳴を起させ、希臘人的教養の根柢を支へて來たのも、斯かる全體的特徴に因るものと解せられるのである。

1) Κώμη. 2) συνοικισμός. 3) ἐλευθερία. 4) αὐτονομία.
5) αὐτάρκεια.
6) J. Burckhardt, Griechische Kulturgeschichte. Bd I. S. 57 f.

第二章 古希臘時代第二期〔古典時代前期〕

第一節 スパルタの教育

一 スパルタの建國とその國情

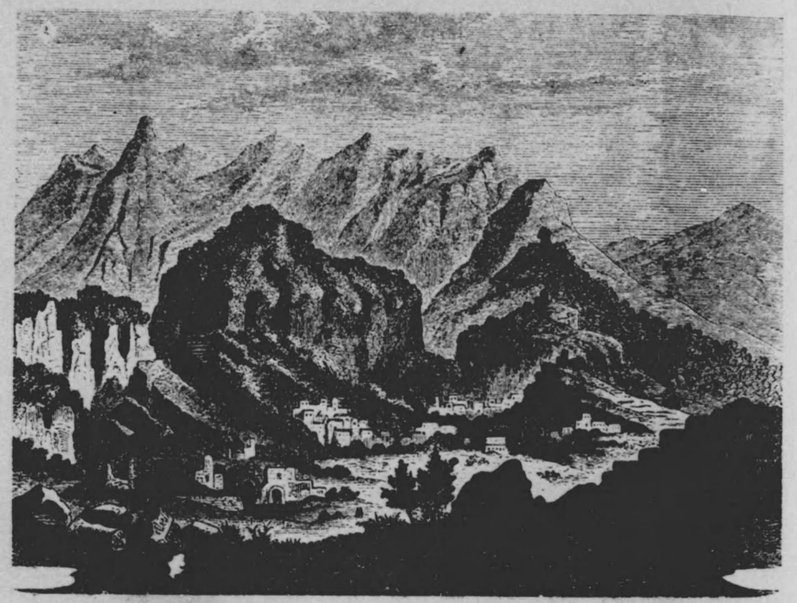
都市國家の成立 前史時代の後を受けて希臘の歷史時代を特色づける主要徵表は、面目顯著なる都市國家の成立である。前章に述べたる徑路によつて、希臘本土、エーゲ海の島々竝びに小亞細亞各地に進出した希臘民族は、或は先住民族を驅逐乃至克服し、或はそれと和協して、夫々の地點に永住的本據を建設した。この本據は初めの間は幾つかの小邑[1]として散在したのであるが、やがて相互の競爭・衝突の結果、或はそれ等の一つが隣接諸邑を從屬せしめることにより、或は幾つかの小邑から人々が一箇所に集まることによつて、一段と強固なる「共住團體」[2]となり、これが對外的には「自由」[3]を、對內的には「自治」[4]を、自己維持のためには「自給自足」[5]を享有するに至つて、こゝに「ポリス」としての都市國家となつたのである。[6] 斯くして成立せる諸々の都市國家は、その土地の自然的事情と、その支配階級の種族的特性と、被支配階級に對する關係とを制約として、夫々の特質を發展せしめた。希臘に於ける政治・經濟・軍事

等の文化とそれ等を背景とする教育とは、各都市國家の特質を前提としなければ理解せられ得ないであらう。吾々はそれ故に希臘教育史上最も顯著なる面目を發揮せるスパルタ及びアテーナイの教育を取扱ふに當つて、先づ各々の都市國家の建設とその國情とを叙述しなければならぬ。

1) Ἄργος. 2) Ἀργολίς. 3) Λακωνική. 4) Λακεδαίμων.
5) Σπάρτα. 6) σπείρω. 7) Ὀρέστης. 8) Ἑρμιόνη.

スパルタの建國　ペロポンネーソス半島に先づ進出したアカイア族は、ティルンス及びミュケーナイを中心とせる先住民族を征服して、そこにアルゴス[1]若くはアルゴリス[2]の王國を建て、附近の土地をも併せて、半島に於ける最強國となつた。他方彼等の一部はまたラコーニケー[3]地方をも占據し、ラケダイモーン[4]を中心として國を建てた。ラケダイモーン市は農耕地の上に散在せる若干の村落より成つてゐたから一名これをスパルタ[5]と呼んだ。蓋しスパルタとは「種を蒔く」[6]といふ語より來た名稱で、種を蒔かれた土地即ち農耕地の謂である。ホメーロス詩篇の内容に現れた所謂英雄時代に於ては、スパルタよりもアルゴスが優勢であり、兄アガメムノーンがアルゴスを、弟メネラオスがスパルタを統治してゐた。傳説によれば、その後アガメムノーンの息子オレステース[7]とメネラオスの娘ヘルミオネー[8]とが結婚して、アルゴスとスパルタとが合體したとのことである。

斯かる前史の後に所謂ドーリア族移住が起つた。ドーリア族は幾つかの群團に分れ、夫



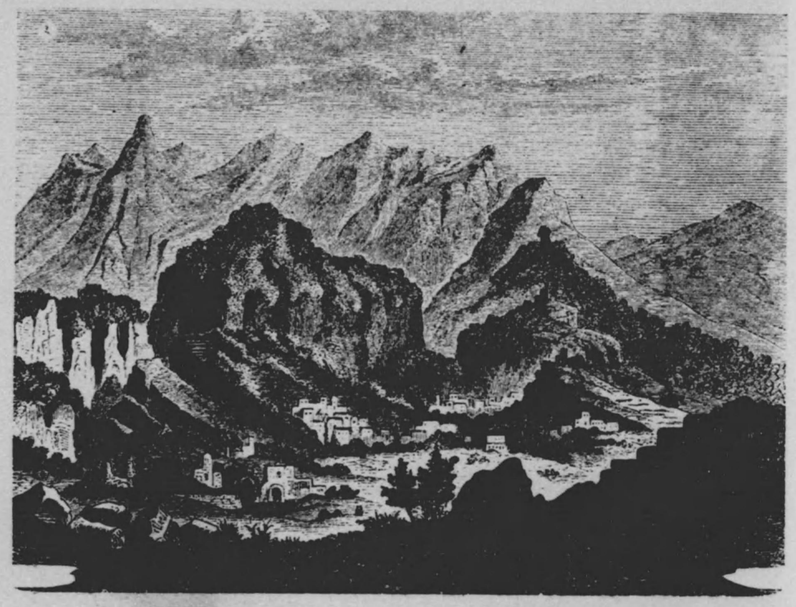
12. スパルタの遠望

夫ペロポンネーソス半島及び附近の島々に侵入して、先住民族を從へ國を建てたのであるが、彼等の中最も強力な一群團がスパルタを占領し、次第にラコーニケー州内を征服し更に西方メッセーニア[1]州や北方アルゴス州をも從屬せしめて、紀元前五世紀頃までには殆んど半島全部に覇を唱へ、希臘全土を通じても最強の國となつた。

スパルタの國情　スパルタはエウロータス[2]河に沿ひ、その河口より約二十哩上流にあり、東はエウロータスの本流により、西北はその支流たるオイヌース[3]河により、南東は同じく支流ティシア[4]河によつて境せられ、西方約三哩メッセーニア州との境に

1) Μεσσηνία. 2) Εὐρώτας. 3) Οἶνους. 4) Τισία.

1) Μεσσηνία. 2) Εὐρώτας. 3) Οἶνους. 4) Τιτία.



12. スパルタの遠望

1) Ἄργος. 2) Ἀργολίς. 3) Λακωνική. 4) Λακεδαίμων.
5) Σπάρτα. 6) σπείρω. 7) Ὀρέστης. 8) Ἑρμιόνη.

等の文化とそれ等を背景とする教育とは、各都市國家の特質を前提としなければ理解せられ得ないであらう。吾々はそれ故に希臘教育史上最も顯著なる面目を發揮せるスパルタ及びアテーナイの教育を取扱ふに當つて、先づ各々の都市國家の建設とその國情とを叙述しなければならぬ。

スパルタの建國 ペロポンネーソス半島に先づ進出したアカイア族は、ティルンス及びミュケーナイを中心とせる先住民族を征服して、そこにアルゴス[1]若くはアルゴリス[2]の王國を建て、附近の土地をも併せて、半島に於ける最強國となつた。他方彼等の一部はまたラコーニケー[3]地方をも占據し、ラケダイモーン[4]を中心として國を建てた。ラケダイモーン市は農耕地の上に散在せる若干の村落より成つてゐたから一名これをスパルタ[5]と呼んだ。蓋しスパルタとは「種を蒔く」[6]といふ語より來た名稱で、種を蒔かれた土地即ち農耕地の謂である。ホメーロス詩篇の内容に現れた所謂英雄時代に於ては、スパルタよりもアルゴスが優勢であり、兄アガメムノーンがアルゴスを、弟メネラオスがスパルタを統治してゐた。傳說によれば、その後アガメムノーンの息子オレステース[7]とメネラオスの娘ヘルミオネー[8]とが結婚して、アルゴスとスパルタとが合體したとのことである。

斯かる前史の後に所謂ドーリア族移住が起つた。ドーリア族は幾つかの群團に分れ、夫々ペロポンネーソス半島及び附近の島々に侵入して、先住民族を從へ國を建てたのであるが、彼等の中最も強力な一群團がスパルタを占領し、次第にラコーニケー州内を征服し更に西方メッセーニア[1]州や北方アルゴス州をも從屬せしめて、紀元前五世紀頃までには殆んど半島全部に覇を唱へ、希臘全土を通じても最強の國となつた。

スパルタの國情 スパルタはエウロータス[2]河に沿ひ、その河口より約二十哩上流にあり、東はエウロータスの本流により、西北はその支流たるオイヌース[3]河により、南東は同じく支流ティシア[4]河によつて境せられ、西方約三哩メッセーニア州との境に

はタイゲトス[1]山脈を控へ、東方にも亦パルノーン[2]山脈があつて、天然の防備に擁せられてゐる。加ふるにその國民の資性と、後述の如き國家組織とにより、彼等は最も勇武果敢であつて、他の希臘諸市の如き城壁を必要としなかつたのである。(後世羅馬時代に初めて城壁が出來た。)

扨てスパルタに於ては征服者と被征服者とが階級的に區別せられ、國民は次の三階級から成つてゐた。最上級はスパルティアタイ[3]即ち眞のスパルタ市民であり、征服者を以て成れる支配階級である。彼等はその數少く何時の時代にも、武器を執り得る男子が一萬を超えることはなかつたが、抽籤によつて土地を分有し、軍事と政治とを本分として、强力なる支配權を確保した。第二階級はペリオイコイ[4]と呼ばれた。周邊に住む人々の義である。彼等はアカイア族の中スパルティアタイに歸順した者の子孫であつて、平時は土地を分與せられて農耕その他の産業に從事し、戰時にはスパルティアタイに屬して從軍した。國家に租稅を納めたけれども市民權即ち參政權はなく、スパルティアタイとの結婚も禁ぜられてゐた。彼等の人口はスパルティアタイの約三倍であつたと傳へられてゐる。最下級はヘイロータイ[5]と呼ばれた。蓋し、捕へられたる者共の義であり、やはりもとのアカイア族であるが、スパルティアタイに抵抗して捕虜とせられた者の子孫である。彼等は國家の奴隷であつて個人の私

1) Ταΰγετος. 2) Πάρνων. 3) Σπαρτιάται. 4) Περίοικοι. 5) Εἵλωται.

有せるものではなく、抽籤によつてスパルティアタイに配分せられた。卽ち各々のスパルティアタイにはヘイロータイの若干家族が分屬し、彼等は主家の土地に固着させられ、それを耕作して、一定量の小麥と葡萄酒と油とを主家に納め、その剩餘を自家の有として生活してゐた。その土地を離れることを許されず、從つて又他家へ賣渡されることもなかつた。彼等はその數ペリオイコイの二三倍にも達し、且スパルティアタイに對し根强き反感を抱いて居り、中には主家の土地の生産品を自ら食するを潔しとせぬ者すらあつた程である。それ故に彼等はスパルティアタイに取つては不斷の脅威であり、スパルティアタイの青年達はヘイロータイを監視すべき義務を負はされ、又その數が餘りに多くなることを防ぐために、後述の如く、彼等をしてヘイロータイを殺させる方策が講ぜられてゐたのである。

スパルティアタイは斯くの如く、外はアカイ族及び他のドーリア族と對抗し、內は十倍にも餘る下層階級特にヘイロータイによつて脅かされてゐたために、その自衞上自らを堅固な軍團として組織し鍛鍊することが必要であつた。スパルタの軍國主義的政治組織及び教育制度は斯かる事情からの必然的歸結であつたのである。

二 リュクールゴスの業績

リュクールゴスの傳說　スパルタの政治的・經濟的・社會的機構竝びに教育制度は、その國民が國家の建設と維持とに努力した長い間の業績として次第に形成せられたものであるが、彼等はこの無數の人々の業績をば、古來彼等の間に英雄として又氏族神として讃仰されて來た紀元前九世紀頃の傳說的人物リュクールゴス[1]の創造に歸した。プルータルコスが言明してゐる通り[2]「立法家リュクールゴスに就いては何一つとして異論なき事は言ひ得ない」のであつて、古代歷史家は各種の異說を彼に關して遺し、近代の歷史家は一般に彼の實在を否定してゐる。彼の創設として傳へられてゐる法制は、その素材は極めて古くから希臘民族一般乃至スパルタ國民の間に行はれつゝ次第に改良せられて來た生活樣式であり、而もそれが彼の業績に歸一せられて略々固定したリュクールゴス傳となつたのは前四世紀頃であらうと推定せられる。そしてこの頃はスパルタがアテーナイを壓し全希臘諸國に威を振つた時であつて、希臘一般に軍國主義的統制國家の形態が理想として要望せられてゐたために、スパルタの國民生活が現實以上に理想化せられ、その理想的法制がスパルタの古代に於て實在したと考へられ、それがリュクールゴスといふ偉人の創造に歸せられたのであらうと思はれる。故に吾々はリュクールゴスの名と共に傳へられたスパルタの法制に於て、實は希臘人の理想國家思想の一典型を捉へ得べく、且この傳說の歷史的意義も後述の如くそれが後世國民の軍國主義

1) Λυκοῦργος.　2) Ploutarchos, Lykourgos. I.

1) Herodotos, I. 65.　2) Xenophon, Lakedaimonion Politeia. X. 8.
3) Aristoteles, Politikon.　4) Ploutarchos, Lykourgos.　5) Εὔνομος.
6) Πολυδέκτης.　7) πρόδικος.　8) Χαρίλαος.

的統制國家の指導精神として傳承せられた點に存するのである。〔原隨園氏　ギリシア史研究　リュクールゴス傳說とその文化史的意義〕

リュクールゴスの傳說はヘーロドトス[1]、クセノフォーン[2]、アリストテレース[3]、プルータルコス[4]等によつて傳へられてゐるが、それ等を取合せ、就中最も代表的なプルータルコスの所傳を中心として大體の筋書を作れば次の如くになるであらう。スパルタ王エウノモス[5]は最初の皇后との間に長子ポリュデクテース[6]を生み、第二の皇后との間に次子リュクールゴスを生んだ。長子ポリュデクテースは父王の歿後王位を繼いだが、間もなく皇后の腹に胎兒を遺して歿した。依てその胎兒が若し男子ならば王位を讓るとの豫想の下にリュクールゴスは「攝政」[7]となつた。然るに姙婦たる皇后はリュクールゴスに提案して、若しリュクールゴスが王位に卽き彼女を皇后とするならば胎兒を殺すであらうことを申出た。リュクールゴスは皇后の野心を憎んだけれども、表面この提案を受諾し、但し墮胎は皇后の健康に有害であるから、分娩後にリュクールゴスが自らその生兒を殺すべきことを約束した。併し愈々男兒が生れるや、リュクールゴスはこれを受取り、スパルタ王は生れたり」と宣し、「カリラオス〔國民の喜びの意〕と名づけて王位に卽かしめた。彼の反對派の人々や皇后の親近者等はリュクールゴスがやがて自ら王位を占めるであらうとの猜疑を抱いてゐたので、リュクールゴスは身の淸廉を表明するために、幼帝が長じてその嗣子の

生れるまでの豫定を以て、海外旅行に出かけた。先づクレーテ島に赴き、其處の法制・慣習を學び、特にタレース[1]といふ賢明な立法家から學ぶ所が多かつた。次で小亞細亞のイオニア諸國に渡り、その奢侈・煩雜な生活樣式をばクレーテ島の質朴・簡素の生活樣式と比較して研究した。又この地方で、既述の如く、ホメーロスの詩を知り、その政治的・教育的價値を認めて熱心に筆寫した。それより更に埃及に行き軍人階級が他の階級から離れて國政を獨占する制度を學び、尙リビア[2]、イベーリア[3]を訪れ、印度にまでも行つたと傳へられてゐる。

長途の旅行の後、スパルタ國民の輿望に迎へられて歸國したリュクールゴスは、國法の根本的改革を決意し、先づデルプォイに赴いて神託を求めた。「神々に愛せられたる者よ、人間といふよりも寧ろ神なる者よ」との讃辭と共に、神はリュクールゴスに世界最良の法制を約束したと傳へられてゐる。斯くして彼は、神の託宣なる「レートラ」[4]の指示に基き、恐らくは少からざる苦難と戰ひつゝ、(そのために一眼を失ふが如き危險をも冒して)所謂「リュクールゴスの法制」を制定したのである。彼はこの法制を永遠に不變ならしめるために國民から、彼の歸還までこれを更改せざることの誓約を要求して、自ら再び旅に上つた。そして何時何處に歿したかは何人も知らないのである。クレーテ島で歿し、その遺骸は火葬に附せられ、灰は海中に撒布せられたとの傳說も、要するにリュクールゴスの法制を永遠に更改せさらんとするスパルタ的保守

4) Θάλης. 1) Λιβύα. 2) Ἰβηρία. 3) ῥήτρα.

思想が生み出した假託に外ならぬであらう。

リュクールゴスの法制　吾々は今リュクールゴスの事蹟として傳へられる法制の要項を擧げ、その各々に若干の說明を加へて、スパルタ教育の背景たらしめようと思ふ。先づ政治上の諸機關に就いて言へば、最高位に二人の王[1]がある。古來希臘諸國は、その初め遊牧團の首長より發展せるものとして、何れも國王を有し、それは行政・司法・宗教・軍事等一切の權力を掌握してゐたのであるが、他の希臘諸國に於ては次第に僭主政治[2]の出現によつて王政は失はれ、唯スパルタのみが名殘を止めてゐた。併し所謂リュクールゴスの法制に於ては、國王の權限は著しく制限せられ、主として宗教上の事柄を掌り、唯名目上のみで頗る尊敬せられた。スパルタが二人の王を常に對立させたのは、その起源に關しては種々の傳說があるけれども、結果に於ては相互に野心・越權を制肘させるに有效であつた。

元老院[3]は二十八人の長老に二人の國王を加へて三十人を以て組織せられた。二十八人の長老はスパルタの各小邑から一人宛選出されたものであり、年齡六十歲以上の者に限られてゐた。司法及び行政上に實權を握り、王の專制を防ぐに役立つた。元來國家友軍等の大事に關し長老の意見を聽くための會議[4]はホメーロス[5]以來一般に行はれた慣習であるが、スパルタに於ては元老院としてその慣習が發達し整頓されたのであらう。

1) βασιλεύς. 2) τυραννίς. 3) γερουσία. 4) βουλή. 5) Il. II. 55,404.

民會[1]は三十歳以上の全スパルティアタイ――但し後述の會食團に割前を出し得ざる者を除く――を以て組織せられ、河と橋との間に呼集められて國王及び元老院よりの提案に對し、贊否を表決した。但し議論を交すことを許されず從つて彼等の意見はその代表者たる監督官に委託せられた。この民會もホメーロス時代以來アゴラと稱して、老若共に必要に應じて隨所に集會した慣習[2]が、參會者の資格と權限と場所との規定によつて整頓せられたのであらう。そしてリュクールゴスが民會召集の場所をば、繪畫や彫刻に飾られた會堂とせずして、河と橋との間と規定したのは、それによつて周圍に眩惑されざる眞面目な思慮を促すためであつたとプルータルコスは傳へてゐる。

監督官[3]は年々全民衆の中より選出せられる六十歳以上の者五人を以て組織せられ、民衆の代表者であると共に國王及び元老院の權能を次第にその手に收め、事實上最も有力な政治機關となつた。但しこの制度は明かにリュクールゴスの業績ではなく、古來ドーリア諸國を通じて廣く行はれてゐたものが、久しき發展を經て前五・六世紀の間に完成したものか、或は盛衰變遷があつてその頃再び擡頭したものであらうと思はれる。

以上の如き政治組織の外に、リュクールゴスの業績と傳へられてゐるものに、土地の分配及び貨幣制度に關する經濟的政策がある。卽ち彼は貧富の懸隔を除くために、スパルティアタイ

1) ἀπελλα.　2) II. II. 788.　3) ἔφοροι.

---

1) κρυπτεία.

九千人に對して豐饒な土地を平等に分配し、それ以下の土地をペリオイコイ三萬人に對して平分したと傳へられてゐる。尤もこのことは歷史的事實であるよりも、寧ろ富の不平等を調節せんとする後世の人々の理想がリュクールゴスの事蹟として生み出した所の歷史的假託と考ふべきであらう。又彼が重い鐵の貨幣のみを通貨として許し、それによつて國民が、金銀貨の行はれてゐる外國から、贅澤な物貨を買入れることを防いだと傳へられてゐるのも、前九世紀頃には未だ何處の國にも金銀貨は行はれてゐなかつた事實よりすれば、リュクールゴスの業績としては考へられざることである。これも蓋し前四・五世紀頃スパルタ人の生活が益々貪慾になつたとき、識者が古の原始的經濟生活を一種の理想として憧れ、その憧れがリュクールゴスの鐵錢制度といふ假託物語を生んだのであらう。

リュクールゴスはまたヘイロータイの人口增加を防ぐために「クリュプテイア」[1]とてスパルティアタイの青年が國內を潛行してヘイロータイを虐殺する所の制度を設けたと言はれてゐる。「クリュプテイア」とは「祕密の奉仕」の意であり、スパルティアタイの青年達にして用心深き者が、懷劍其他の武器を携へて國內に潛行し、晝間は身を隱し夜間街上に出て、出遭ひ次第のヘイロータイを殺す。時には白晝公然と現れ農耕中のヘイロータイの最強者を殺戮したこともあるといふ。この事はプルータルコスも辯明してゐる通り、リュクールゴスの性格と相容れざる所であ

り、彼の業績に歸すべきではないけれども、併し支配階級の人口が被支配階級のそれに比べて次第に減少するといふ憂ふべき事實は、ヘイロータイに對するその非人道的殘虐を餘儀なくせしめ、而も古き傳說はこの事までも、有德の立法家と信ぜられてゐるリュクールゴスに歸して敢て怪まないのである。

更にリュクールゴスの事蹟と傳へられるもの、中で、軍國スパルタの社會制度として最も注目すべきは「ブィディティア」[1]の制度である。これは一般には「シュシティア」[2]（會食の意）と呼ばれ、早く既にホメーロス時代から希臘人の生活に行はれた會食の慣習であるが、[3]スパルタに於てはそれが軍事的訓練の一部として定められたのである。即ち戰時に於て一部隊を編成する若干（十五人位）の市民が、平時に於ては同じ食卓の一團として食を共にするのである。各市民はこの共同の食卓に必ず食料品を持寄り、そこで軍事や政治を語りつゝ會食した。青年や少年も大人とは別の食卓であるが、夫々に會食團を組織してこれに參加するのであつた。私的な家庭の食事が贅澤に流れ易かつたのを、この質素な會食制度によつて防止したことが、軍國の民の訓練として有效であつたのは勿論であるが、そこに行はれる談論作法が國民の精神的敎養に重要なる意義を有してゐたことも容易に想像せられる。

1) φιδίτια. 2) συσσίτια. 3) Il. IX. 69; Od. IV. 621.

1) Ploutarchos, Lykourgos, XIII. 2) op. cit. XIV.

三 スパルタの敎育

優生學的見地とスパルタ婦人 扨て以上はリュクールゴスの名と共に傳へられたスパルタの政治的經濟的社會的諸制度であるが、これ等を成文に記し傳へることを神託によつて禁ぜられてゐたリュクールゴスは、若者の心に深く植ゑ付けること卽ち敎育によつて、それを永久に傳へようとした[1]。實に彼は敎育を以て「立法家の爲すべき最も大なる最も美しき仕事」と考へた[2]。今玆に、やはりプルータルコスの所傳を中心として、スパルタの敎育制度の大要を示せば次の如くである。

軍國スパルタに身を獻ずべき强健なる子女を得るために、リュクールゴスは優生學的見地に立つて先づ强健なる母を作ること、竝びにその母より多くの子供を得ることを工夫した。卽ちスパルタの婦人は男子と同樣に各種の體育を勵み、衣服の美しさよりも肉體美を誇り、ひたすらに强健なる妻たるべき修練を積んだ。結婚は相互の自由意志によらずして仲介人の取計に服從し、結婚後も男子は公共の營舍に暮すのを原則とし、時折ひそかに家に歸つて妻と會するのみであつた。この規定は却て夫婦の愛情を永く新鮮濃厚ならしめ、彼等の活力と健康とを保持するに有效であつたと言はれてゐる。强健なる子女を擧げることは

1) Ploutarchos, Lykourgos, XIII. 2) op. cit. XIV.

1) Λεωνίδας. 2) Γοργής. 3) λέσχη.

結婚の唯一最大の目的であるが故に、他人の妻又は他人の夫であつても、すぐれた者であり、よき子供の父母であると思へば、自分の夫又は妻の承認を得た上で、その理想の人と通じてすぐれた子女を生むことを國法は禁じてゐなかつた。或るスパルタ人は外人から「貴國においては姦通者は如何なる罰を受けるか」と問はれて「吾々の間には姦通者はあり得ない」と答へた。蓋しリュクールゴスの考によれば、子供は國家公有の財産であるが故に、國家に對してよき子供を生むためには、他の男女と關係しても姦通とはならないのである。尤もこの事の故にスパルタの夫婦が貞節を輕んじたといふのではなく、彼等が操守固くして離婚の如きを殆んど考ふべからざる罪惡としてゐたことは史家の傳へる處である。婦人は斯く國家に對する貢獻の故に、男子に對しても何等卑屈の心情はなく、高邁なる態度でこれに臨んだ。或る外人がレオニダス[1]の妻ゴルゲース[2]に向つて「あなた方ラコニケー(スパルタの別名)の婦人だけが男子を支配してゐる」と讃嘆したとき、彼女は「私達だけが男子を生むのだから」と答へた。スパルタ軍人の出征や戰死に關聯して、彼等の母親達が示した健氣な言動は、周く世人の傳へ知る所である。

スパルタ教育の段階　扨て初生の男兒は父が「レスケー」[3]のと呼ばれる公會堂に伴れて行く。「レスケー」は何時でも開放せられてゐる集會所で、社交上の會合を行つたり、天候の惡い日

1) Ἀποθέται. 2) Ἀλκιβιάδης. 3) Ἀμύκλα. 4) παιδονόμος.
5) ἴλη. 6) ἀγέλη (βοῦα).

に通行人が避難したり、放浪者や貧民の宿所となつたりする場所であるが、そこで各區から出てゐる十人の長老が嚴重に初生兒を檢査し、體格がよく强健であれば、その父に養育を命じ、同時に抽籤によつて土地の分前を與へる。若し虛弱又は畸形であれば、タイゲトス山の麓にある岩窟、所謂「アポテタイ」[1]に遺棄した。蓋し斯かる子供を育て上げるのは、當人のためにも國家のためにも、不利益であると考へたからである。母親も亦初生兒を湯水に浴せしめる代りに葡萄酒に浴せしめた。何故ならばそれによつて、病弱な子供は痙攣を起し感覺を失ふのであるが、强健な子供は却て益々鍛へられて頑健な習慣を得ると信ぜられてゐたからである。乳母も亦幼兒を襁褓に包むことなくして四肢の自由な發育を圖り、飮食物を贅澤に流れしめず、暗黑や孤獨を怖れしめず、ずねたり泣いたりすることを許さなかつた。スパルタの乳母はこの嚴格な育兒の故に有名であり、外國から雇はれることもあつた。(例へばアテーナイのアルキビアデース[2]の乳母アミュクラ[3]はスパルタ人であつたと言はれてゐる。

男子七歲に達すると國家の手に移され、少くとも八千人乃至九千人の兒童が共同教育場に於て、共通の訓練と養育とを受けた。こゝでは國家が最もすぐれた人々の中から選任した兒童監督官[4]が教育を總轄した。兒童は多數の分隊[5]に分けられ、若干の分隊を合せて中隊[6]が編成せられ、分隊長と中隊長とが夫々上級の青年中から選拔せられて、各分隊及び中隊に

附けられ、兒童監督官の指揮を受けて、部下の訓練に當つた。これが卽ちエイレーン[1]若くはイレーン[2]と呼ばれた者である。兒童は讀み書きに關しては最少限度の用を辨ずる程度のみを學習し、主力を服從・忍耐等の修養と、戰鬪への準備敎練とに注がせられた。彼等は頭髮を短く刈り、素足・薄着で過し、且大部分は裸體で遊ぶ樣に慣らされた。十二歲以後は下着を禁ぜられて、唯一年に一着の上着だけが供せられた。そのために彼等の身體は甚だしく汚れたにも拘らず、入浴や油を塗ることは一般に禁ぜられ、唯一年間に若干の日を限り許されたのみである。十五歲以後は彼等自らの手を以てエウロタス河から採取して來た蘭の穗を床として眠り、冬期はそれに所謂リュコポーン[3](薊の毛、それに溫熱が含まれてゐると考へられてゐた)を加へた。

食物は粗末で且乏しかつた。それは一面には肥滿を防いで體格の美と動作の敏活とを期するためでもあつたが、主たる目的は兒童をして食物を自ら得しめるためであつた。エイレーンは輩下の兒童に對して、成長せる者には薪を、幼き者には野菜等を盜み來るべきことを命じた。彼等は巧妙に盜んだ場合には賞讃せられたが、拙劣で發見された場合には烈しく鞭打たれ、又缺食の罰を受けた。或る少年の如きは狐を盜んで上着の下に隱し、內臟を喰ひむしられて死するまでそれを顯はさなかつたと傳へられてゐる。

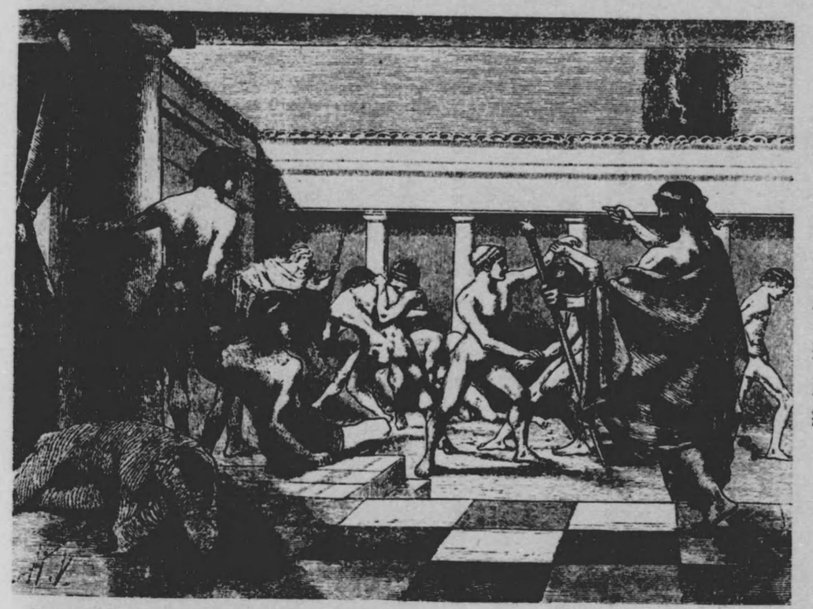
1) εἰρήν. 2) ἴλήν. 3) λυκόφων.

兒童監督官の下には鞭撻係[1]が附いてゐて、兒童に不都合な者があれば常に鞭打つのであつた。更に苦痛を默つて忍ぶ習慣を養ふために年々アルテミス[2]若くは別名オルティア[3]の祭日に鞭撻[4]の行事が行はれ、兒童は血の出るまで鞭打たれた。最も長い間一語も苦痛を訴へずに忍んだ者は勝利の榮冠を授けられたが、大部分の兒童は人事不省に陷り、中には死に至る者もあつたと傳へられてゐる[5]。

十八歲から青年の仲間に入るのであるが、初の二年間卽ち二十歲まではメルレイレーン[6](將にエイレーンたらんとする者の義)若くはメルリレーン(將にイレーンたらんとする者の義)と呼ばれ、二十歲から三十歲までを眞の青年期とし、エイレーン若くはイレーンと呼んだ。青年は頭髮及び鬚を蓄へることを許され、專ら軍事の訓練を受け、實戰にも參加した。彼等青年の中特に優秀なる者三百人が選ばれて國王の護衞軍を編成し、就中オリュムピアの競技に優勝せる者は、戰時に於ては國王の馬前に戰ふの光榮を有してゐた。この三百人の近衞軍は固より衆目仰望の的であつたが、併しそれに列し得なかつた青年と雖も私情を以て不滿怨嗟の念を抱くことなく、寧ろ自分よりも更に優れた同胞が三百人あることを祖國のために祝福した。第二波斯戰役(前四八〇年)にスパルタ王レオニダスが率ゐてテルモピュライ[7]の險に奮戰し、悉く祖國に殉じた有名な三百勇士は、この青年近衞軍であつたのである。

1) μαστιγοφόρος. 2) Ἄρτεμις. 3) Ὀρθία. 4) διαμαστιγόσις.
5) Ploutarchos, Lyk. XVIII; Pausanias, III. 16, 6. 6) μελλείρην.
7) Θερμοπύλαι

1) δρόμος. 2) ἅλμα. 3) πάλη. 4) ἀκόντισμα. 5) δισκοβουλία. 6) πυγμαχία. 7) παγκράτιον.



13. スパルタ青年の角力

三十歳から大人として完全なる市民權を與へられたけれども、多くは公共の營舍に起居して、前述の如き諸々の公職を果しつゝ生活した。若し特定の職責に當つてゐない場合には、後輩を教育し又先輩から教育せられつゝ日を過すのであつた。

スパルタ教育の内容及び方法 以上は年齢の發達に應ずる教育の段階であるが、その間に課せられた教育の内容を示せば大略次の如くである。先づ體育に關しては、兒童期には競走[1]、跳躍[2]、角力[3]、槍投[4]、圓盤投[5]、竝びに軍事訓練が課せられ、青年期に入ると、この外更に擊劍・乘馬・水泳・狩獵が加へられた。拳鬪[6]と格鬪[7]とは單

1) πυρρίχη. 2) Ἰσοκράτης. 3) προφθία. 4) παιάν. 5) ὑπόρχημα. 6) ἐμβατήριον.

に競技者のみに必要であつて、戰鬪の準備には適せぬものとして、スパルタでは一般に禁ぜられてゐたが、それに反して舞踏殊に武器を持つて行ふ演武舞踏[1]は大いに愛好・尊重せられた。スパルタがオリュムピア競技管理の實權を握りながら、派遣選手の數も少く、成績の振はなかつたのは競技を競技として修練することがなく、專ら軍事上の目的に從屬せしめたからである。

次に精神的教養は體育に比して著しく制限せられてゐた。イソクラテース[2]がスパルタ人達は「文字さへも知らない程である」と貶したのも至當であつて、假令最少限度の用を辨ずるための讀み書きを習ふことはあつても、より高き精神的教養への憧れと努力とは決して有つてゐなかつた。但し音樂だけは祭典や軍事上の用具として尊重せられ、兒童は早くから竪琴と笛とを奏することを——恐らくは特定の教師によつて——教へられた。而もそれ等は必ず歌詞に合せて奏せられ、行列歌[3]・讃美歌[4]・舞踏歌[5]・進軍歌[6]等が歌はせられた。これ等は何れも體育及び軍事訓練と結合して行はれ、その單純なる調子、活潑なる律動、勇敢なる歌詞が、軍國の民の心情をそれに適はしく陶冶した。或る祝祭の合唱に於て、老人の一團が先づ「吾等は曾て勇ましき功績を遂げ强き若者にてありき」と歌へば、青年の一團がそれを承けて「今こそ吾等は斯かる者なれ、いざとなれば試み給へ」と歌ひ、最後に少年の一團が「吾等はやがて斯

等の何れにも優りて強くなるべし」と結んだ。彼等の唱へたる歌詞が凡そ如何なるものであつたかはそれを以ても一斑を覗ひ得るであらう。

その他の精神的教養に關しては、特定の系統的施設の下には課せられなかつたけれども、日常生活の間に屢々これを受ける機會を有つてゐた。兒童や青年も大人の會食團と共に會食し、そこに交される政治・軍事の談論、人々の毀譽褒貶、特にもスパルタの誇りであつた短く鋭き皮肉と諧謔等によつて多大の感化・教育を受けた。殊に兒童の教育を擔當したエイレーンは食事後、彼等に歌を唱へさせる外、國家の偉人やその言行に就て種々の質問を發し、簡潔にして肯綮に當れる答を要求した。そして答の不出來な者に對しては罰として親指を噛んだ。大人もこの問答に立會ひ、若しエイレーンが兒童を不當に嚴しく、或は不當に寬大に罰した場合には、兒童の去つた後にエイレーンを罰するのであつた。その他尚後節に詳說する如く、兒童及び青年と大人との間に同性愛的結合があり、それによつて愛せられる若者は愛する壯年者から絕えず模範を示され薰陶を與へられた。斯くて兒童及び青年は行往坐臥先輩の教育を受け、スパルタの國民生活そのものが實に一大教育機關であつたのである。

スパルタ教育の全體的特色とその史的意義　「これを要するにスパルタの國民生活と國民教育とは、個人を全く國家の一員として奉仕せしめることを根本的特色としてゐた。

1) E. Krieck, Menschenformung. S. 148. 2) στρατοπέδου πολιτεία (J. Purckhardt, Griechische Kulturgeschichte. Bd. I. S. 116.)

そこでは人が人として生活し、人としての多方面の教養を積むといふことは考へられず、人は唯國家の成員としてその國家の存續に奉仕する限りに於てのみ存在の理由を有してゐた。而もその國家は內外の敵に對する防衛を根本使命とする「武人國家」であるが故に國民生活の樣式と教育とは、すべてそのために統制せられ、一切の價値活動は勇敢なる軍國の戰士の育成といふ最高價値に從屬せしめられて、そこに、建國期の羅馬と共に、武人國家の類型が形成せられた。[1] 從つてそこでは上下長幼の階級と秩序とが嚴重に守られ、私的生活が極度に壓縮されて公共生活が强要せられ、一般に精神的教養よりも體育が、精神的教養の中では知育や美育よりも德育が尊重せられ、斯くて强壯・敏活にして熟練せる身體と、服從・忍耐・廉恥・勇氣・犧牲等の德に充たされたる精神とが陶冶せられた。そしてこれ等の陶冶は特定の教育的施設機關を通じてではなく、國民の公的共同生活それ自身の中に行はれ、教育と實生活とは不可分に結合して一個の强靱なる「陣營國家」[2]がそのまゝに一大教育場であつた。

斯くの如き國民生活と國民教育とを規制するものは、成文の法律や特定の權力者ではなくて、多年の傳統に培はれたる慣習そのものであつた。スパルタ國民は實に慣習への固着、傳統の墨守に於て最も顯著なる特性を示し、保守主義は彼等の性格の根本的特質であつた。スパルタ國民の生活と教育とが歷史上に極めて明確なる一典型を遺し、その印象が永く鮮

かに人々の腦裡に刻まれたのは、それが單に軍國主義を比類なき程に徹底せしめただけでなく、斯かる國家形態を保守的國民性が支持して、他の諸國の目まぐるしき變轉にも拘らず、スパルタのみが數百年間を通じて殆んど變りなき面目を維持したがためであつた。

而してこの顯著なる國家形態は、次節に述べる所のアテーナイと相對して、個人主義に對する國家主義、文化主義に對する軍國主義、自由主義に對する統制主義の原型として、人間生活の歴史を通じ、永遠に一個の生活類型を代表すると共に、それは既に希臘人自らに於ける一派のイデオロギーとなつてゐた。プルータルコスが指摘してゐる通り、希臘諸國の人々はスパルティアタイの都市をば、秩序ある生活と統制ある國家との指導者として、教師として、仰ぎ見た[1]のみならず後に前四世紀頃の思想家、例へばプラトーン、ディオゲネース、ゼーノーン等が國家論を書くに當つては何れもリュクールゴス的國家形態を範型として念頭に浮べてゐたのである[2]。更に前三世紀に入つてスパルタ王のアギス[3]四世やクレオメネース[4]三世は、リュクールゴス時代への復歸を標榜して國政の改革を企てた[5]。實際運動が傳説を指導精神として動くに至つては、傳説は最早單なる傳説ではなくて生ける力である。假令これ等の運動が、スパルタの頽勢を挽回するに至らず、腐敗せる富者、故老達の反對に遭つて空しく挫折したにもせよ、リュクールゴスの名に結合せる本來のスパルタ的觀念形態が當代の爛熟軟化せる人々に取つて戰

1) Ploutarchos, Lyk. XXX.　2) op. cit. XXXI.　3) Ἄγις (r. 244—240).
4) Κλεομένης (r. 236—222).　5) Ploutarchos, Agis and Kleomenes.

1) Ploutarchos, Agis and Kleomenes.

慄畏怖に値するものであつたことは容易に想察せられる[1]。斯くしてスパルタ的國家そのものが一個の偉大なる教育力を發揮し得ることの外に、所謂スパルタ式教育が、凡そ硬教育の代表として、あらゆる軟弱と放縱と個人的自我への訶諛とを警める力を藏してゐることは世上周知の事實である。

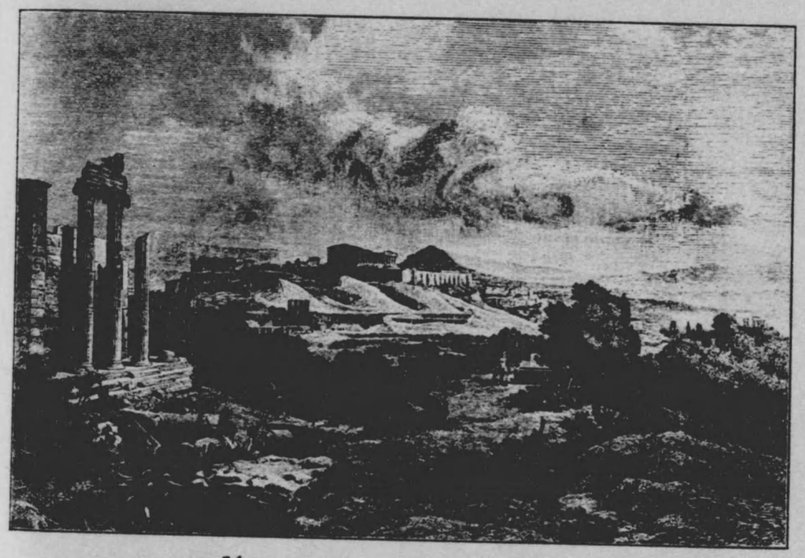
吾々はそれ故に、スパルタ國民がドーリア種族中に於ても特にすぐれたる種族的特性と、その建國の事情體制よりして樹立し維持した堅固なる軍國主義的國民生活と教育とを、歴史に於ける比類なき個性として認識すると共に、その原型は、凡そ國民生活と國民教育とを國家の徹底的統制下に置き、國民の心身を不斷に鍛錬し强化せんとする者に取つて、永遠に一個の指導精神であることを認めるのである。而して斯かる國家と教育とが人間生活一般の理念に照して如何に批判せらるべきかは、次のアテーナイの叙述と併せて考究せられるであらう。

第二節　アテーナイの教育

一　アテーナイの建國と國政の發展

アテーナイの建國　さきに希臘民族進出の徑路の中に述べた如く、アッティケー州を占據したの

1) Thoukydides, II. 15. 2) Ἀθῆναι. 3) Θεσεύς. 4) συνοίκια.



14. アテーナイの遠望

の的と政諸やか者初民い各族には主としてイオニア族であるが、其處には既に本來土着のアッティケー族が居り且他の希臘種族及び先住民族も其處に避難混入し、それ等各種族の混血によつて、進歩的な、融通性の多い、而もよく調和均衡の取れたアッティケー州の住民が生じた。トゥキュディデースによれば[1]、彼等は初め多くの小都邑に分れ、各々が政廳と支配者とを有して、相對立してゐたが、就中最も强かつたアテーナイ[2]に明君テーセウス[3]が君臨するや、彼は平和的に他の諸都市を併合し、爾餘の諸點に就いては諸都市の傳統を認めながら、政治的にはアテーナイの支配に服せしめることによつて、玆にアテーナイを首都とする統一的國家を建設した。爾來アテーナイ國民はこの統一を記念するために、年々「シュノイキア」[4]、共

1) Ploutarchos, Theseus. 2) Αἰγεύς. 3) Τροιζήν. 4) Πιτθεύς. 5) Αἴθρα. 6) τίθημι. 7) Κόδρος. 8) ἄρχων. 9) βασιλεύς. 10) πολέμαρχος.

住の意)といふ祭を行ふことゝなつたのである。(註)

註 プルータルコスが傳へてゐる通り[1]、テーセウスに就いては各種の系統と物語とが歸せられてゐるが、アテーナイ人達の傳說によれば(それは恐らくこの英雄を自國の王統に加へんがために作られた說であらうが)、テーセウスはアテーナイ王アイゲウス[2]を父とし、トロイゼーン[3](アルゴリス州內東南地方)の王ピトテウス[4]の嬢アイトラ[5]を母として生れた。既述(一四頁)のクレーテー島のミノタウロスを討伐した勇士であり、アテーナイの國民的英雄である。「テーセウス」といふ名も「ティテーミ」[6](置く、立てる)といふ語に由來し、「創立者」の意を有するものである。

ドラコーン以前の國情 然しこの王政は漸次に制限せられ、次第に民主政治への方向を辿り進んだ。卽ち世襲の國王の最後であつたコドロス[7]の後に、王室の中から貴族達によつて選擧された者が一代限りの王となり、この制度の下に十二代の終身國王が續き、前七五二年に至り、その任期は十年に縮められ、前六八三年には更に任期一年となり、而も貴族達の間から九人の執政官(アルコーン)[8]を出して政治に當らしめた。アルコーンとは單なる「支配者」の義であり、從來の國王が政治と宗教との兩權を掌握せることから「バシレウス」[9]と呼ばれてゐたのに對し、政權のみを有する者の義を以てアルコーンと呼ばれたものである。アリストテレースによれば、バシレウスからアルコーンに至る間にポレマルコス(將軍)[10]が置かれたこともある。それは

シレウスの或者が軍事に怯懦である場合に、軍隊の總帥として任命せられたのである。[1]と もかくホメーロス時代以來希臘諸國に共通であつた王政は、今やアテーナイに於ては少數貴族による寡頭政治[2]となつた。

尙アテーナイの古制度中重要なるものに「アレオバゴスの會議」[3]がある。それは任期一年の執政官を勤めた終身官の元老より成り「アレイオス・パゴス」[4]即ちアレース[5]の丘(アクロポリスの西方にあり)に會して、秩序を紊る者を處罰し、科料に處し、法律を監視する使命を有したものである。[6]

扨てアテーナイの國民は三階級に分れてゐた。最上級はエウパトリダイ[7]即ち貴族で、彼等は古の英雄達の子孫を以て自任し、アッティケー州の最も肥沃の土地を所有し、その階級内のみの秘密の儀禮を行ひ、國政を彼等のみが獨占した。第二級はゲオーモロイ[8]即ち土地の僅少部分を所有し、自作農を營める者であるが、彼等は貴族からの高利の借財に苦しみ、その抵當の土地を次第に失つて行きつゝあつた。第三階級はデーミウルゴイ[9]即ち勞働者で、彼等は貴族の土地を耕し、名のみ自由民で實質は農奴に近く、而も貴族よりの借財を支拂ひ得ぬために、その家族を擧げて奴隷となり、鎖に繋がれて賣られて行く有樣であつた。(註) 斯かる階級國家に於て、第二第三の庶民階級が第一の貴族階級に對する反感は次第に高まり、何等かの對策な

1) Aristoteles, Athenaion Politeia. III. 2) ὀλιγαρχία. 3) ἡ τῶν Ἀρεοπαγειτῶν βουλή. 4) Ἄρειος πάγος. 5) Ἄρης. 6) Aristoteles, op. cit. III. 7) εὐπατρίδαι. 8) γεωμόροι. 9) δημιουργοί.

くしては革命を避け難い情勢になつて來た。

註 アリストテレースによれば、この最下層の人民はペラタイ[1](附庸)又はヘクテーモロイ[2](六分の一)と呼ばれた。それは收穫の六分の一を自ら取り他を地主に納める契約(一說には六分の一を地主に納める契約)によつて富豪の土地を耕作したからである。そして土地は盡く少數貴族の手に歸し、庶民はこの契約高が支拂へぬ時は、當人も子供も奴隷となつたのである。[3]

ドラコーンの法制 玆に於て前七世紀の後半に貴族達は自己の階級の中よりドラコーン[4]といふ者を選び、彼に托して成文法[5]を作らせ一般國民に知らしめた。蓋し從來は裁判が不文律によつて執政官の任意に行はれたのを庶民が不滿に思つてゐたために、これを成文に規定表示させたのである。アリストテーレスは『政治學』[6]に於てドラコーンの法令は在來の制度を法律に制定したもので、擧ぐるに足る特色はなく、唯刑罰の大なることによる過酷のみが特色であると言つてゐる。故に彼の『アテーナイ人の國家』[7]の中に記されてゐるドラコーン法典の內容は後人の竄入であらうと思はれる。プルータルコスによれば、ドラコーン法典は殆んどあらゆる罪に——例へば怠惰や野菜果實の窃盜にも瀆神や殺人と同樣に——死刑を課した。而もドラコーン自身は、世人の傳ふる所によれば、何故に大部分の罪に死刑を課したのかと問はれて、小なる罪でさへ死に値すると考へてゐる彼に取つては、より大なる罪に對しては更

1) πελάται. 2) ἑκτήμοροι. 3) Aristoteles, op. cit. II. 4) Δράκων. 5) θεσμοί. 6) Aristoteles, Politikon. 1274 b. 7) Aristoteles, Athenaion Politeia. IV.

1) Δημάδης. 2) Ploutarchos, Solon. XVII. 3) Κύλων. 4) ἀκρόπολις.
5) Μεγακλῆς. 6) Ἀλκμαιωνίδαι. 7) Νηλείδαι. 8) Νηλεύς.

に重き刑が思ひ當らないのだ、と答へたとのことである。それは古代諸國一般の法律に比して決して過酷ではなかつたけれども、後世の希臘人から見れば、頗る過酷に思はれた。故に前三世紀のアテーナイの政治家・雄辯家なるデーマデース[1]は「ドラコーンは法典をばインクを以てではなく血を以て書いた」と說破して名聲を博した[2]。そして又ドラコーン的と言へば一般に嚴格過酷なることを意味するに至つたのである。

キュローンの叛亂 前六二一年に貴族の一人なるキュローン[3]は庶民の不平に乘じ、自ら僭主たらんことを企て、その一味を率ゐてアクロポリス[4]を圍んだ。然るに彼の期待した庶民の參加が得られず、却て政府軍に攻められ、自らは他に逃亡し、彼の一味は飢餓に瀕しつゝアクロポリスの神々の祭壇に逃げ込んだ。政府軍の指揮官にして執政官の一人なるメガクレース[5]は、彼等に祭壇を出れば生命を助けてやると約束しながら、愈々彼等が出て來ると、彼の部下の兵は彼等一味を殺した。この事は神々に對する最大の冒瀆とせられ、アテーナイ市民はその祟りの來らんことを信じ怖れた。庶民は自分達の味方であるキュローン一味の復讐の爲に彼等を殺したメガクレースの一部全部—それをアルクマイオーニダイ[6]と呼んだ—を手渡さんことを貴族に要求した。(アルクマイオーニダイはアテーナイの有力な貴族の一族で、コドロスやペイシストラトスと共にネーレイダイ[7](ネーレウス[8]の子孫の一門である。外國との貿易によつて

1) Herodotos, V. 65; VI. 125. 2) Atristoeles, Athenaion Politeia. I.
3) Grote, History of Greece. II. 4) Σόλων. 5) Ploutarchos, Solon.
6) Ἐξηκεστίδης.

巨富を獲得し、富によつて勢力を增したものである[1])貴族達はアルクマイオーニダイを庶民に手渡すべきか否かに就いて意見が纏まらず、一方庶民は貴族政府に對して益々反感を高めて來た。遂に貴族中の賢者ソローンの忠告により、アルクマイオーニダイは裁判に身を委ねることゝなり、瀆神の罪を以て都市から放逐せられた。(註)

註 キュローンの叛亂の年代に就いては確定した說はない。アリストテレース[2]はこれをドラコーン法典の制定よりも先立たせてゐるが、グロート[3]は却てドラコーン法典に對する庶民の反對を利用したのがキュローンの叛亂であるとしてゐる。何れにせよ、時勢は既にソローンの出現を要望するに至つたのである。

二 ソローンの業績

ソローンの家系及び人物 ソローン[4]はスパルタのリュクールゴスの如き傳說の人ではなくて、實在の偉人であるが、併しこの偉人に對する後人の崇拜が史實以上の傳說をその家系や人物や業績の上に附加したであらうことは容易に想像せられる。今プルータルコスの所傳[5]を中心として、彼の生立ちと、前半生の事蹟を通じての性情とを略述すれば次の如くである。彼は前六三八年頃アテーナイの貴族の家に生れた。父エクセーケスティデース[6]はアテーナイの中流商人であつたが、その家系はコドロスに發してゐると傳へられ、母はペイシストラトスの母

の従妹と言はれてゐる。この親戚關係により、特にもペイシストラトスが美貌の青年であつたことの故に、ソローンはペイシストラトスを熱烈に愛してゐた。ソローン自身も美しく高貴な人品を具へ、高邁な態度を持し、富よりも智を愛する人であつた。所謂七賢人の中に數へられ、タレースとも親交があつたと言はれてゐる。彼はまた詩的天分にも惠まれ、若き頃よりの多くの作詩が傳へられてゐるが、それは初期の輕快な感傷的な調子から次第に嚴肅な教訓的な、わけても愛國的な調子に進んで行つた様である。

ソローンが公に活躍した最初の機會は、アテーナイが隣邦メガラ[1]との間にサラミス[2]島の所有を爭つた時である。アテーナイはこの爭ひに失敗し、法律を以て將來サラミスの占領を煽動するが如き演說や詩を作することを禁止した。ソローンはその屈辱的國法を忍び難く、自ら狂人を裝ひ、市場に馳せ往いて、豫め用意して置いた詩句を群集の前に朗唱し、アテーナイ人達の怯懦を慷慨しサラミスの獲得に向つて同胞を激勵した。そして自ら戰陣に立ちサラミスからメガラ人達を驅逐した。尤もこの戰は長引き、結局スパルタの干涉を俟つて（前五九六年）サラミスがアテーナイの有に歸したのであつたが、ともかく愛國の熱情家としてのソローンの名聲は斯くして既に同胞の胸深く刻まれたのである。尙ソローンはその直後（多分前五九五年）にキラ[3]市に對する戰の指導者となつた。卽ちキラ市がデルプォイの神託を乞ひに行く

1) Μέγαρα.　2) Σαλαμίς.　3) Κίρρα.

者から料金を徵集してゐたのをソローンは不當とし、デルプォイのアムプィクテュオニア[1]（同盟）の發動を促し自ら進んでキラ市を征服し、デルプォイ市民をしてアポローンの祭と神託とを管理せしめることゝしたのである。

註　デルプォイのアムプィクテュオニア（同盟）は、デルプォイのアポローンと、テルモピュライに近きアンテーレー[2]のデーメーテール[3]とを信仰の中心として、その周圍十二箇國の希臘民族が結べる同盟であり、毎年二回デルプォイとアンテーレーとに各國の使者が相會して友誼を圖つてゐた。この外にデーロス島のアポローンを中心とするデーロスのアムプィクテュオニアも有名であつた。因にアムプィクテュオニアとは、デウカリオーン[4]とピュラとの息子なるアムプィクテュオーンより來た名稱であり、この同盟に加入せる人々をアムプィクテュオネス[5]と呼んだ。

アテーナイはこれ等の同盟の指導的地位に立つことによつて益々全希臘の中心たる地位を占めて行つたのである。

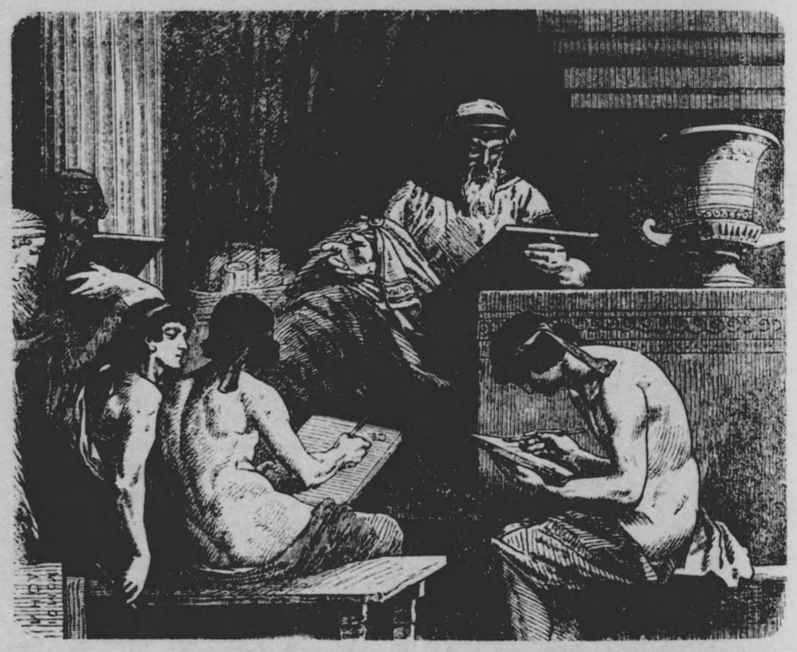
ソローンの業績　ソローンは前五九四年に執政官に選出せられ、殆んど獨裁的權限の附與の下に貴族庶民間の軋轢を中心とする難局の收拾を委任せられた。彼は階級鬪爭の罪を富者に歸し、富者の愛錢と傲慢とを戒めてゐた。「多くの財寶を有ち、飽滿せる汝等よ、心の中の高慢なる情熱を靜めよ。尊大なる心を適度の中に置け。何故ならば吾々も心服しないし、且汝等にも完全には（思ひ通りには）ならないのだから」と彼は詠じてゐる[6]。斯かる見解に出發せるソローンの眞先に着手したのは庶民の爲の負債輕減法[7]である。アリストテレース[8]によ

1) ἀμφικτιονία.　2) Ἀνθήλη.　3) Δημήτηρ.　4) Ἀμφικτύων.
5) Ἀμφικτύονες.　6) Aristoteles, Athenaion Politeia. V.
7) σεισάχθεια.　8) Aristoteles, op. cit. VI.

れば、それは文字通り負債を振り放つてしまふもので、一切の負債を帳消しにしたのである が併し又プルータルコスが引用してゐるアンドロティオーン[1]等の説によればそれは單に負債を輕減せるに過ぎなかつた[2]。多分それによつて彼は債權者たる貴族の權利を過度に侵害せざる限りに於て出來るだけ庶民の債務を輕減し、未濟の負債を成る可く免除し、爾來人身擔保を以て金を貸すことを禁止し(從つて負債の爲に奴隸として賣られることを不可能ならしめ)、利率を制限し、土地の所有をも制限したのであらう。彼はまた貨幣制度を改正し、舊貨七十五ドラクメーを新貨百ドラクメーの割合に改鑄し、而も舊貨百ドラクメーの借財を新貨百ドラクメーを以て支拂ひ得べきことを定めて、庶民の負債を實質的に輕減した。尤もこの貨幣改鑄は對外貿易の圓滑を圖るために、從來のアテーナイ貨幣がアイギナ[3]の標準に從つてゐたのを、エウボイアの大商業市殊にカルキス[4]及びエレトリア[5]の標準に改めたものであつて、負債輕減とは別個の動機に因るとの説もあるが結果に於ては負債輕減となつたのである。

經濟政策の成功によつて名聲を博した彼は更に「憲法[6]」を發布し其他の法律[7]を定めた。殺人に關するもの以外のドラコーン法典をば廢止した。これ等の法律を木板[8]に書きつけて「バシレイアの門[9]」に建て、人々は皆これを遵奉することを誓つた。九人の執政官は石(ヅェウスの祭壇であらう)の上で誓をして、若しこの法律の中のどれでも違犯した場合には黄金の(等身)

1) Ἀνδροτίων. 2) Ploutarchos, Solon. XV. 3) Αἴγινα. 4) Χαλκίς.
5) Ἐρέτρια. 6) πολιτεία. 7) νόμοι. 8) Κύρβεις. (ἄξονες).
9) στοὰ βασιλεία.



15. ソーロン立法者

像を獻納すると約束した。……ソローンはこの法律を向ふ百年間有效と定めた[1]。」ソローンの法制として傳はれるもの〻中には、彼以外の無名の士によつて爲された業績までも併せ含まれてゐるであらうが、今ともかく彼の名の下に傳はれる業績の要旨を擧げれば次の如くである。

第一にソローンは、國民の財產の多寡によつて權利義務を割當る所の金權政治[2]を原則とした。卽ち最上級は年收五百ドラクメー以上の者であつて、ペンタコシオメディムノス[3](五百メディムノス)と呼ばれ、(一ドラクメー[4]は百分の一ムナー[5]卽ち約四十錢、一メ

1) Ἱππεῖς. 2) Ζευγῖται. 3) θῆτες. 4) ἐκκλησία.

ディムノスは穀物一樽、三斗强に當る)、第二級は年收三百乃至五百ドラクメーの者であつて、ヒペイス(馬を有し戰時には騎士として從軍する者の意)と呼ばれ、第三級は年收二百乃至三百ドラクメーの者で、ゼウギータイ(駄馬を有する農夫の意)と呼ばれ、最下級は年收二百ドラクメー以下の者で、テーテス(日雇勞働者の意)と呼ばれた。上の三階級は夫々收入に應じて納稅の義務を有し、且最上級は執政官に選ばれる權利を、第二、第三級は其他の公職に就く權利を與へられたが、最下級は納稅の義務なく、民會で投票する外には何等公職に就く權利を與へられなかつた。戰時には上の三階級は自ら武器を用意し又は自らの馬に乘つて出陣することを要し、最下級はそれ等の必要がなかつた。ソローンの斯かる金權政治は門閥による舊來の差別を出來るだけ少くして全市民の參政を圖らんとする民主的基調に立ちながら、未だ徹底せる民主政治ではなく、却つて民主政治に若干の制限を加へた政治的原則として現れた。彼はこの原則に立つて從來行はれてゐた政治機關の組織と權限とに改革を施し、所謂ソローンの法制を制定したのである。

先づホメーロス以來のアゴラ(集會)の傳統を引ける民會卽ちエクレーシア[4]は當時は事實上殆んど何等的確なる權能を有たなかつたのであるが、ソローンはこれに執政官其他の官吏を選擧し、それ等當局者に在任中の事績の報告を求め、又法律の協贊を與へる權利を得しめた。

1) βουλευταί. 2) βουλή.

但しソローンは別に四百人の議員[1]より成れる議院[2]——所謂四百人會——を設け、民會に提出すべき議案の作製及び外國使節の接待の權限をこれに與へた。これも極端なる民主政治への一種の制限である。

更に古來行はれてゐたアレオパゴスに一層大なる權能を與へ、執政官は退職後その成員に加はることゝした。斯くてアレオパゴスは貴族中で最も經驗ある者から組織される機關となり、若し國家に有害と思はれる法律が民會で議決されたならばその通過を阻止し、又アテーナイ人にして生業を怠り子女の教育を等閑にし、其他市民たるの面目を傷ける行爲のあつた者を訓戒若くは處罰するの權利を與へられた。それ故にアレオパゴスは現實の政治に積極的參與はしなかつたけれども、政治を監督する實權を有し、殊に國民の道德生活を取締る機能を發揮し、從つてその成員は十分の尊敬を受け、それに列することは貴族の誇とせられた。この制度も亦民主政治への重大なる制限である。

以上の外ソローンは幾多の法制を創定若くは整頓したが、彼の事業は上下兩階級から賞讃も非難も併せ受けた。彼はこの褒貶の煩累から身を避け、アテーナイ國民をして新法制に馴染ませる意圖を以て、約十年間埃及・キプロス島・リディア等を旅行して歸り、五五八年頃歿したのであるが、要するに彼の政治的功績の重點は、民主政治の基調に立ちながら、それの極端な

1) Aristoteles, Athenaion Politeia. XII. 2) Ploutarchos, Solon. XX:

る發達が齎すべき弊害を制限するために、傳統を重んじ、精神的優越者・經驗者を尊重せることに存した。彼の原則は貴族と庶民との何れにも偏せざる中庸—否寧ろ兩階級の對立緊張の止揚に存したものと解し得べく、アリストテレースの傳へる彼の詩はよくこの意圖を表明してゐる。「自分は民衆に十分の特權を與へたが、併し名譽をも利益をも(無限には)與へなかつた。力と富とを有てる人々は尊い。併し不當に有つなと自分は彼等に語つた。自分は雙方に對して強き楯を持ち、何れの一方にも不正の勝利を許さなかつた。」[1] 斯かる原則こそアテーナイの國情と國民性とに最によく適合せるものであり、古典時代のアテーナイの國民生活はそれによつて眞に古典的なる發展をなし得たのである。

三 アテーナイの教育

ソローンの教育的法規 前項に述べたる以外のソローン法規中、特に重要なる教育的意義を有するものは、結婚に關するものと、生業に關するものとである。プルータルコスの所傳[2]によれば、ソローンは一般に結婚が、精神的には愛によつて、肉體的には良き子供を生み得べき條件に於て、行はれねばならぬことを規定した。從つて年齢の點で不適當の者や、愛なき者の結合は禁止せられ、又財産を目的とする婚姻を防ぐために、花嫁の持參すべき物は衣服三通り

1) ἑταίρα. 2) Ploutarchos, Solon. XXII. 3) Αἰσχίνης. 4) Τίμαρχος.
5) M. Kappes, Lehrbuch der Geschichte der Pädagogik. Bd. I. S. 123.

と僅少の家具とに制限せられた。夫婦の貞操も嚴重であつて、姦通罪の現行犯を捕へた者には犯人を殺すことを許し、又强姦や合意の姦通は夫々罰金に處せられた。正式の妻にあらざる女—ヘタイラ[1]—から生れた子供は父を扶養する義務なきものとせられた。(何故ならばこの場合の父は、子供の爲にではなくして享樂の爲に女と結合したのであるから。)次にソローンは、アテーナイが元來天產に乏しく、人口は益々增加し、而もスパルタのヘイロータイの如き生產階級を地盤に有せざる事情に鑑み、國民のすべてに商工業を奬勵した。この目的のためにソローンは、父から何等かの業務を教へられざる子供は、父を扶養する義務なきものと規定し、アレオパゴスをして國民各自が必ず何等かの生業に從事する樣に監視せしめ、生業なき者をば處罰せしめた[2]。

右の如き法規はアテーナイ國民の眞摯着實なる生活指針として、教育の健全なる背景となつたものであるが、ソローンは國民教育そのものに就いては何等積極的規定を設けなかつた。アイスキネース[3]のティマルコス[4]に宛てた書翰を通じて傳へられてゐる、ソローンの教育法規も大部分は學校の風紀取締に關する消極的規定に過ぎない。卽ちその條項は次の如きものである。[5]

(一)すべての市民はその息子に體育と文藝との教養を受けさせる義務を有する。こ

の法規に背ける兩親は非難に値する。その子供に相當の教育を受けさせた兩親のみが成長せる子供によつて扶養せられる資格がある。(二)如何なる學校も日出前に教師によつて開かれてはならず、又日沒後にはすべての學校は閉ぢられねばならぬ。(三)兒童が學校に居る間は大人は何人も學校に入つてはならぬ。但し教師の子や孫や婿はこの限りでない。この規定に抵觸した者は死刑に處せられる。(四)ギュムナシオンの長は、ヘルメース(體育の神)又はムーサ(文藝の神)の祭(その機會に少年達は氣晴しの爲にギュムナシオンの中を自由に遊遙するのであるから)の日に大人を入らしめてはならぬ。これを守らず侵入者を退出せしめない場合には彼は少年凌辱者と同じ法によつて罰せられる。(五)少年の合唱團の世話をする團長は四十歳以上でなければならぬ。(六)奴隷は體操場に於て香油を塗つたり體操を練習したりしてはならぬ。(七)十ドラクメ以上の價のある物を學校から持去つた者は死刑に處せられる。(この法規の趣旨は後述のエロースの風習に於ける弊害の側面と併せて再説せられるであらう。)

斯くの如く、アテーナイに於ては、スパルタとは反對に國家が國民教育に干渉せざることを原則としてゐた。蓋しソローンによつて代表せられたるアテーナイ人一般の見解によれば、人間陶冶は國家の政治的手段に供せられるには餘りに高いものであり、國家も亦その存立のために成員の自由なる人間性を虐げるには餘りに高いものである。換言すれば、人間性の自由なる發展こそ眞の國民を作り眞の國家を存立せしめる所以と考へられてゐたのであ

1) Guhl und Koner, Leben der Griechen und Römer; M. Kappes, Lehrbuch der Geschichte der Pädagogik. Bd. I.　2) βρέφος.　3) σπάργανα.　4) ἀμφιδρόμιον. ἡμαρ.　5) ἀμφιδρόμια.　6) δεκάτη.　7) γνήσιον.　8) παιδίον.　9) τροφή.　10) τίτθη.

る。それ故に吾々が以下に叙述するアテーナイの教育は[1]、大體に於てソローン時代よりペロポンネーソス戰爭頃まで、卽ち本書に所謂古典時代前期を通じて、アテーナイの不文律的慣習として行はれた教育事實である。

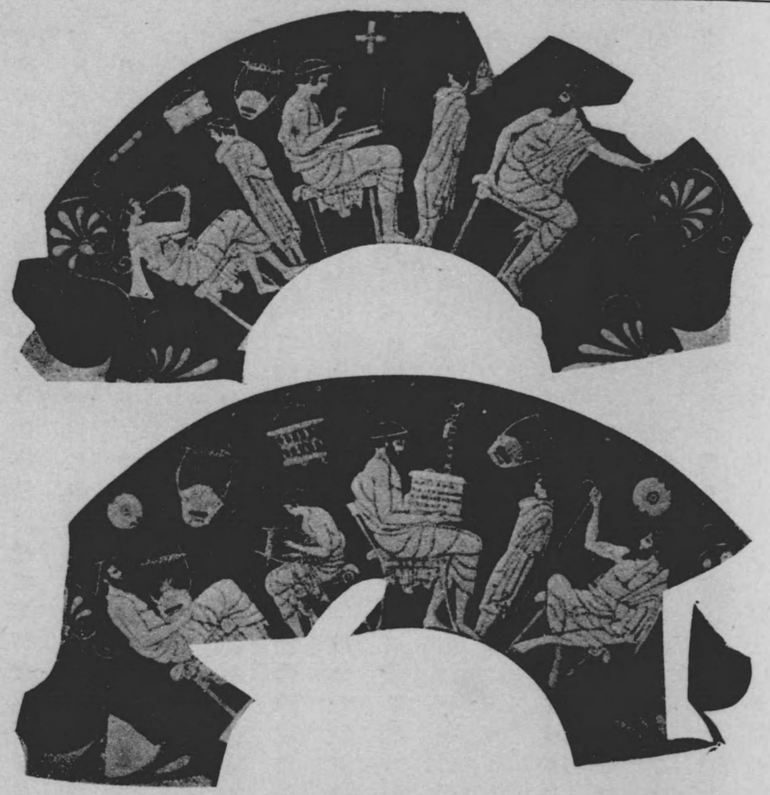
幼兒の教育　先づ初生兒(プレプオス)[2]はスパルタに於ては禁ぜられてゐた所の襁褓[3]を以て溫かく包まれ、五日目又は七日目に助産婦がその兒を抱いて家の神壇の周りを巡廻して淨めの式を行ふ。故にこの日を「巡廻日」[4]といひ、この式を「巡廻式」[5]と呼んだ。當日は家族が祝宴を開き、家の扉には男兒の場合には橄欖の環が、女兒の場合には羊の毛が飾りつけられた。「十日目」[6]に命名の式が行はれ、同時に父により「正當の子」[7]として確認せられた。通常長子には祖父の名が與へられ、又は特に或る神若くは神の性質から名を藉りてその子をその神の特別なる保護の下に置くことが行はれた。この日には出産の神ヘラに供物を捧げ親戚知人が子供に贈るべき金屬製及び陶器製の玩具を携へて祝宴に招かれ、母は特に描かれた食器類を子供に與へた。

乳呑兒(パイディオン)[8]の養育[9]に就いては初期のアテーナイに於ては母が親らこれに當つたが、やがて裕福な階級では乳母[10]を特にスパルタから雇ふことが行はれ、それがつひにイオニア諸國一般の風習となつた。嬰兒は各種の(靴形や腰掛形などの)搖籃に入れて育てられ、子守歌を聞き搖

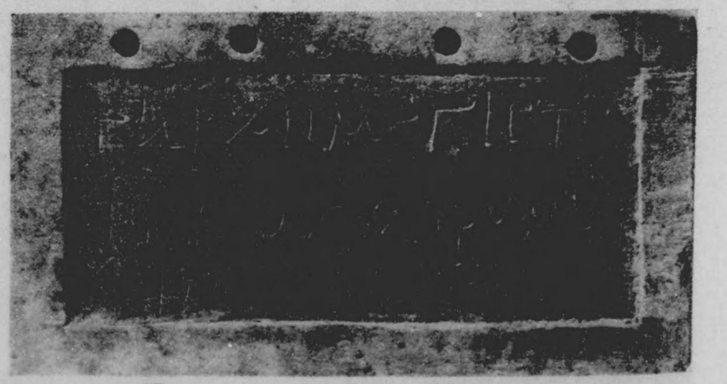
り動かされつゝ眠るのが常であつた。離乳期以後の兒童(パイス)[1]に對しては乳母の代りに侍女[2]が雇はれ、弱に類する軟かき食物、特に蜜を以て養育した。但し母と乳母も常にこれに協力して養育に注意した。玩具を以て子供を樂しく遊ばせ人生の黎明に於て喜悦を味はせることがやがて成人後の明朗な性質を養ふ上に必要とせられた。玩具として女兒には粘土で作られ色彩を施された人形、男兒には鴨・白鳥・鷲鳥等が與へられ、遊戲としては王樣ごつこ・目隱し・球投げ・胡桃や缺片を水面に投げること・竹馬・獨樂ぶらんこ等が行はれた。母親は又子供の道德的訓育に重きを置き、早くから廉恥心羞恥心を教へ、優雅な行儀よき子供に躾けた。男兒は特に嚴格な訓練を受け「打たれぬ人間は教育せられない」[3]とはアテーナイの喜劇詩人メナンドロス[4]の有名な詩句であつた。そして母親は自分の草履を以て子供を打つのが常であつた。

少年の教育 男兒七歳に達すると侍女の手を離れて童僕(パイダゴーゴス)[5]の監督に委ねられ、兒童教育の第二期たる教育(パイデイア)[6]が始まる。童僕には通常聰明端正にして教養ある奴隷が選ばれたが、往往にして又老朽のため他の用に立たぬ奴隷が選ばれることもあつた。彼等は子供の行く所には何處でも從ひ、特に學校と體操教習所とに、書籍學用品・樂器等を携へてついて行つた。そして子供に禮儀作法・容儀擧止等の「端正」[7]に就いて躾けをした。

1) παῖς. 2) τροφός. 3) ὁ μὴ δαρεὶς ἄνθρωπος οὐ παιδεύεται.
4) Μένανδρος (342–290). 5) παιδαγωγός. 6) παιδεία. 7) εὐκοσμία.



16. アテーナイの學校



17. アテーナイ學童の蠟板習字

精神的教養に關しては私立の學校[1]に於て先づ文字綴り・文章を習つた。初めは蠟板[2]に金屬又は象牙の筆[3]を以て書きやがて紙[4](特に反古紙の裏)にインク[5]を以て習つた。「讀み書き」[6]は必須の基礎教科であり、その上に神話を聽かせて宗教的憧憬を養ひ、然る後にキタラ琴[7]又はリュラ琴[8]の彈奏と唱歌とを教へた。算術も種々の遊戲と結合して面白く教へられ、又手指や算用石[9]を用ひて數へることが行はれた。讀み書きの基礎的陶冶を終へた者は詩を教へられた。詩はそれによつて理解力を練り、心情を優雅醇正ならしめ、偉大高尚なる活動への憧憬を鼓吹する爲に課せられた。その目的に選ばれた教材はホメーロスの叙事詩、ヘーシオドスの教訓詩、シモーニデース[10]の弔歌[11]、テオグニス[12]及びプォーキュリデース[13]の格言詩[14]等であり、何れも倫理的基調を帶びてゐた。是等の朗吟及び暗誦に於ては、第一に發音の正確、次に抑揚強弱・調子律動が修練せられた。

この時期の體育はパライストラ[15](體操教習所)に於てパイドトリベース[16](體操教師)より學んだ。パライストラは私設で、專ら少年の體育を目的として設けられたものである。所謂五種競技[17]即ち跳躍・競走・圓盤投・槍投・角力が課せられ、體育の主神ヘルメースの祭日には親業の前で五種競技を行はせた。これと竝んで早くから水泳も課せられ、「泳ぎも讀み書きも出來ない」[18]とは無學無能を代表する標語であつた。その外尙合唱舞踏も行はれ、永き練習の後に祝祭日には盛大に實演せられた。

1) διδασκαλεῖον. 2) πίνακες. 3) στῦλος. 4) βίβλος. 5) μέλαν. 6) γράμματα. 7) κιθάρα. 8) λύρα. 9) ψῆφοι. 10) Σιμωνίδης. 11) θρῆνοι. 12) Θέογνις. 13) Φωκυλίδης. 14) γνῶμη. 15) παλαίστρα. 16) παιδοτρίβης. 17) πένταθλον. 18) μήτε νεῖν μήτε γράμματα.

18. アテーナイの體操教習所

青年の教育 男兒は十六歲に達すればメイラキオン[1](若者)と呼ばれ、通學を止め童僕の監督を離れる。十八歲よりエプェーボス[2](青年)の仲間に入れられる。同族組合[3]の一員としてその名を登錄せられ、劇場の群集の前で槍と楯と黑の外套[4]とを與へられ、武裝してアクロポリスの丘の下なる殉國の女神アグラウロス[5]の神殿に於て新誓を捧げる。(アグラウロスは曾て戰爭の時、アテーナイの勝利の新願のために犧牲として身を神前に供したと傳へられる處女であり、それを祀れる神社に青年は殉國の新誓を行ふのである。)その誓詞は「私はこの武器を決して汚さず、戰友を見棄てることもしないであらう。一人でも他の人々と一緒にでも神々の爲と祖國の安寧の爲に戰ふ。私は私の受繼いだ祖國を決して小さくすることなく、海に於ても陸に於て

1) μειράκιον. 2) ἔφηβος. 3) φρατρίαι. 4) χλαμύς. 5) Ἄγλαυρος.

も、より大きくして後に遺すであらう。私は常に決定を行ふべき人々の言を聽き、現行の法律に從ひ、國民が心を一にして定める所のすべての事に服し、若し誰かゞそれ等を破棄し服從せぬ場合にはその人を容赦することなく、一人でも他の人々と一緒にでもそれ等を擁護する。更に私は祖國の宗教を尊崇する。その誓の保證として、アグラウロス・エニュアリオス(戰の神)アレース(戰の神)ゼウス・タルロー(成長の女神)アウクソー(成長の女神)ヘゲモーネー(指揮の女神)の神々を立てる。」[6]といふのであつた。そこには勇武の戰士としての覺悟と善良なる市民としての抱負とが併せ示されてゐるのである。

青年は(既に十六歳以後)ギュムナシオン[7](體育場)に於てギュムナステース[8](體育官)の指導の下に體育を修めた。ギュムナシオンは公立の體育場でその經費は半官半私のものであつた。青年と大人とは此處に會して相互に身體の鍛練と精神の修養とに努めたのである。ギュムナシオンの中で特に有名なものはアカデーメイア、リュケイオン、キュノスアルゴス等であつた。[註] ギュムナシオンの體育種目は前記五種競技の外に拳闘と格闘とが加へられた。又特に青年期の軍事練習として重い武器を持つての戰闘演習や馬上射術・石投げ・馬術・競馬・戰車競走等が課せられた。水泳や舟の操縱も教へられたやうである。

註 アカデーメイアは又アカデーミア[9]ともいふ。アテーナイの西北郊外にあり、アッティケーの

1) Ἐνυάλιος. 2) Ἄρης. 3) Θάλλω. 4) Αὔξω. 5) Ἡγεμώνη.
6) M. Köppes, op. cit. S. 128. 7) γυμνάσιον. 8) γυμναστής.
9) Ἀκαδήμεια (Ἀκαδήμια).

19. 進行馬騎の年青イナーテア

英雄アカデーモス[1]を祭れる神域。そこにギュムナシオンがあつたのである。前三八八年以來プラトーンがこゝで學塾を開いた。リュケイオン[2]はアテーナイ西北郊外にあり、アポロン・リュケイオス[3]に獻げたるギュムナシオン。前三三五年以來アリストテレースがこゝで敎授を始めた。キュノスアルゴス[4]はアテーナイの東方郊外にあり、ヘーラクレース[5]に獻たげるギュムナシオン。アンティステネース[6]がこゝで學塾を開いた。

斯くて修練せられた諸技能は様々の機會に於てこれを演示し又檢閲を受けた。特にペリボロイ[7]—巡察人の意—と稱し國境に天幕生活を行ひ或は國内の聖地を保護する任務を課せられた。この事は祖國守備の軍事的・警察的修練となつたばかりでなく、鄉土の地勢・風土・人情を知るに役立ち、鄉土科に匹敵する效果を收めた。又祝祭に於ては青年は市民の花として顯著なる役割を演じた。農業の神デーメーテールを祀れる古き社のあつたエレウシス[8]はアテーナイより西北數哩にある

1) Ἀκάδημος. 2) Λύκειον. 3) Ἀπόλλων Λύκειος.
4) Κυνόσαργος. 5) Ἡρακλῆς. 6) Ἀντισθένης. 7) περίπολοι.
8) Ἐλευσίς.

海港であつたが、その祭には青年等は大なる行列の先頭に立つて「神聖なる街道」を練り行き、且祭の重要行事として競技を行つた。又一般の葬祭たるエピタフィオン[1]には青年は松明競走を催した。アテーナイの守護神としてパルテノーン[2]に祀られてゐたアテナーの爲に四年毎に催されるパンアテーナイア[3]の大祭には青年男子は騎馬又は戰車に乘つて美しく雄々しく行列を行ひ、又各種の競技に參加した。短艇競漕もサラミスに於けるアイアスの祭やミュニキア(ピレウス半島の小丘)に於けるアルテミスの祭に行はれた。是等諸々の祝祭には青年は又、舞踏合唱その他音樂上の競技も行つたから音樂の教養も兒童期より更に高められたのである。但し一層高き精神的教養—科學・哲學・文學等—の普及は古典時代後期ソフィステースの出現と共に始まり、前期には未だ特筆すべきものがなかつた。

成人の教育　男子二十歲に達すると市民權を得て政治に參加した。そして既述の如き法制の下に、或は大官として或は議員として、行政・司法・立法に當ることにより、公民としての教養をおのづからに修得した。ソローンは國民をして政治的關心を失はざらしめんがために、必ず何れかの政黨に屬せしめ、然らざる者には市民權を剝奪したと傳へられてゐる[4]。且又成人と雖も心身の修養は決して怠るものではなく、ギュムナシオンを訪れて青年と共に體育及び音樂にいそしみ、益々強健高雅なる心身の陶冶に努力したのである。

1) ἐπιταφίον.　2) παρθενών.　3) παναθήναια.
4) Ploutarchos, Solon. XX.

貧兒及び孤兒の教育　上述の如き「自由民に適はしき教育」[1]—自由教育の原義は玆にあり—は勿論貧民の子弟には得難きものであり、是等貧兒達は早くから生活の爲に働かされ、極めて低き程度の讀書算術と體育とを修めるに過ぎなかつた。又孤兒に對しては後見人が定められて十八歲迄の扶養と教育とが托せられ、十八歲以後には同年輩の青年團員として取扱はれた。祖國の爲に戰死せる者の孤兒は特に優遇せられた。

女子の教育　アーテナイに於ける女子は男子に比してその地位遙かに低く、專ら家庭の人として家事・紡織・裁縫・育兒に勵み、體育や精神的教養に關して何等特別の機關による教育を受けなかつた。男兒が學校や體操教習所に通ふ頃にも女兒は家に留まつてゐなければならなかつた。クセノプォーンの『オイコノミコス』(家政論)といふ書物はその著作年代は古典時代後期に屬するけれども、アテーナイに於ける女子の教育の殆んど前後變りなき趣を傳へてゐる。それに於てイスコマコス[2]がソークラテースに問はれるまゝに自分の妻の教育に就いて語つてゐる所の要點は、彼が十五歲の妻と結婚したとき、その妻は他の知識見聞に於て極めて素養が少く、唯裁縫や料理に就てのみよく教育されてゐたこと、それ故に彼は妻に母及び妻としての心得に就て眞摯に教へ込み、妻はそれを素直に學び習つたこと、卽ち妻は育兒・料理・裁縫を主たる務とし、然も蜜蜂の女王の如く家政を主宰し、下婢等を統督教導し、家財道

1) ἐλευθέριος παιδεία.　2) Ἰσχόμαχος.

1) Xenophon, Oikonomikos. VII.

具の整頓に注意すべきことを教へたこと、そして妻が若し是等の事をよく行ふならば彼女は一家中で最も重き地位を占め老年に至るまで尊敬を受け、彼は彼女の召使となるであらう、と言ひ聽かせたことを述べてゐる。[1] 要するにそれは所謂良妻賢母の典型であり、ホメーロス時代の女子の陶冶理想をそのまゝ發展せしめたものと見ることが出來るのである。

アテーナイ教育の全體的特色とその史的意義　以上が「古典時代前期に於けるアテーナイの教育の大様である。それがスパルタとの對比によつて示せる著しき特徴は第一に國家の成員としての人間のみを陶冶理想に置かずして人間そのものゝ完成を陶冶理想とせることであり、それは教育本來の理念―所謂「人文理念」―を最も典型的に目ざせるものである。第二に併しそれは古典時代後期に根ざし世界主義時代に頂點に達したる個人主義陶冶理想に未だ至らずして、國家の成員としての顧慮をも十分に具へてゐた。この事はまた反面に於てアテーナイの國家理想がスパルタのそれに比して遙かに高級であつたこと、換言すれば自由人としての教養と矛盾せざる國家、却て國民各自の人間的教養の高さと豐かさとにおいてその光耀を誇るべき國家がアテーナイ人の念頭に思慕されてゐたことを示すものである。第三に斯かる陶冶理想を追求する爲の陶冶内容がそれ故に、スパルタに比して多方面であり豐富であつた。體育それ自身がスパルタに於ける如く苦難の耐久力と軍事的修練

1) εὐρυθμία. 2) εὐαρμοστία. 3) ἀνὴρ καλοκαγαθός.
4) καλοκαγαθία. 5) τῆς ἑλλάδος παίδευσις. (Thoukydides, II. XLI.)
6) Isokrates, Panegyrikos. 50.

とのためにのみ爲されたのではなくて、寧ろ身體各部の調和的發展によつて全身の「よき律動」[1]と「よき暢達」[2]とを齎らすために行はれた。その健全にして美しき肉體的基礎の上に、善良にして聰明なる精神的教養を加へ、玆に所謂「美にして善なる人」[3]若くは一言して「善美」[4]の理想が實現せられたのである。最後に斯かる理想と内容とを具へたるアテーナイの教育は公立の教育機關によつてゞはなく、私立のそれによつて行はれることを原則としてゐた。家庭や私塾風の施設がアテーナイの教育の本來の舞臺であつたのである。

上述の如きアテーナイ教育は、凡そ希臘人的教養の代表となつたのであつて、後世の人々が希臘人を讃美し希臘文化の復興を希望する場合には、常にアテーナイの人と文化とが思慕せられてゐた。わけても文藝復興期の「人文主義」及び最近世の「新人文主義」はアテーナイの自由教育を範型としてそれの再生を強調した運動である。古典時代前期に於ては併しながら、上述の一般的特徴は未だ完全に實現したのではなく、唯斯かる教育への方向が、準備が、基礎工事がなされたといふに過ぎない。アテーナイが眞に「全希臘の教育場」[5]となり、アテーナイに學べる者は他の人を教へることが出來、希臘人であるといふことは單に希臘に生れた者の謂ではなくてアテーナイの教育を受けた者の謂である」[6]と言はれるに至つたのは古典時代後期のペリクレース治下のアテーナイである。而もかゝる黄金時代の出現がソローン的なるアーテナ

イに於て用意されてゐた所に、古典時代前期のアテーナイの文化と教育との歴史的意義が存するのである。

第三節　汎希臘的競技とその教育的意義

汎希臘的精神の源泉　希臘民族はその種族的特性と地理上の障壁とによつて分離對立せる多くの都市國家を形成しながらも、それ等の分立を超えて汎希臘的精神に結ばれてゐた。それは既に述べた如く、彼等の間に傳承せられた傳說が彼等をば同一の祖先ヘレーンの後裔として血族的意識に結合せしめてゐた爲であり、又彼等の愛誦し共鳴したホメーロスの詩篇が、彼等の祖先先輩をしてトロイア遠征の爲に汎希臘的結成をなさしめてゐることにも起因したのであるが、他方に於て又既に對立的に發展せる希臘諸國家の間に國際的祝祭が行はれ、そこに各種の體育及び文藝の競技が行はれたことに因るのである。

これ等の汎希臘的・國際的祝祭は、初めは或國の或地方のみの祝祭として起つたものであるが、やがて他國の代表選手の參加をも見るに至つて國際的大祝祭となつたのである。又そこに催された競技も初めは體育の一部分のみであつたが、漸次に各種の體育及び文藝をも加へるに至つた。吾々は今斯かる發展の史實を略述し、就中最も盛大であつたオリュムピア競技に就いて稍々詳細にその面目を敍述し、併せてそれ等の教育的意義を考察しようと思ふ。

希臘の體育競技の起源　希臘文化はその多くの要素を前史時代のクレーテ島及びミュケーナイに負うてゐるに拘らず、その體育競技の起源のみは是等所謂エーゲ世界の文化に見出されずして、寧ろ北方よりペロポンネーソス半島に移住し來れるアカイア族竝びにドーリア族に負うてゐる。蓋し體育競技に對する希臘民族の關心は、エーゲ世界の民族の藝術的性格に由來するよりも、却て北方民族の身體的强壯と鬪志・競爭心とに依存してゐたからである。後に國際的大競技となつたオリュムピア、ネメア、コリントス、デルプォイの四競技の中、初めの三つまでが何れもペロポンネーソス半島にあることは、希臘の體育競技が何處に如何なる種族によつて起されたかを暗示するものである。

註　クレーテ島に於ては、クノーソスより發見せられたる壁畫・花瓶等の意匠に見られる如く、牛を相手とする一種の輕業が行はれ、てゐたけれども、これは體育競技の部類には入れ難い。唯一の競技に數へらるべきものに拳鬪がある。併し總じてエーゲ世界の文化が體育競技の要素を缺いてゐたことはミュケーナイやティリュンスに發見せられたる遺物によつて察知することが出來る。

吾々は既にホメーロス時代の戰士達が、例へばパトロクロスの葬祭や、オデュセウスのスケリ

1) Ἀζάν. 2) Ἄρκας. 3) Ἐρατώ. 4) Μελικήρτης. 5) Ἀθάμας. 6) Ἰνώ. 7) Λευκοθέα. 8) Παλαίμων. 9) Ὄφελτης. 10) Εὐρυδίκη.

ア國出發の送別宴に見られる如く、體育競技に對して大いに親熟し、これを樂み得たことを述べた。そしてパトロクロスの葬祭に見る如く、希臘の體育競技はもと死者への禮拜から起つてゐる。『イリアス』篇の記す競技は唯葬祭のそれのみであつて、神への尊崇から行はれた競技會はそれよりも後の作品に初めて現れてゐる。希臘に於ける定期的葬祭競技の中で吾々に知られてゐる最古のものはアルカディアの王子アヅァーンの爲にアルカディアに於て行はれたものである。四大國際競技もその起源はやはり死せる英雄や怪獸の爲の葬祭の意味を含んでゐたと傳へられてゐる。即ちコリントスの競技は死せるオルコメノスの王子メリケールテース(後の名、パライモーン)の爲に、ネメアの競技はネメアの王子オプェルテース(別名アルケモロス)の爲に、デルプォイの競技はアポルローンに殺されたる蛇プュトーンの爲に、オリュムピアの競技はペロプスの爲に行はれたものである。

註 アヅァーン[1]はアルカディア王アルカス[2]とニュムプェーなるエラト[3]との子である。メリケールテース[4]はオルコメノス王アタマス[5]とイノー[6]との子である。母イノーがヘラによつて狂氣にせられ、子メリケールテースを抱いて海に投身し、二人とも海神に變じてイノーはレウコテア[7]となり、メリケールテースはパライモーン[8]となつた。オプェルテース[9]はネメア王リュクールゴスとエウリュディケー[10]との子である。七英雄がテーバイに遠征の途中、水を求めてネメアに滯在した時、オプェルテースの乳母は七英雄に道を教へ

1) Ἀμφιάραος. 2) Ἀρχεμόρος. 3) Πύθων. 4) Πέλοψ. 5) Πελοπόννησος. 6) Δελφοί. 7) Πύθια.

るためにこの子供を一人殘して行つた所が、子供は蛇に殺された。七英雄はこの子供を埋葬した。然るに豫言者アムプィアラオス[1]はこの事件を以て自己及び同僚の死を豫言するものとなし、「死の先驅者」の意味を以てこの子供をアルケモロス[2]と名づけ、その靈を祀るためにネメア競技を創めた。

ピュトーン[3]はデウカリオーンの大洪水の後に泥土より生れた蛇で、パルナッソスの山に棲んでゐたが、アポルローンがこれを退治し、その勝利を記念してデルプォイのピュティア競技を創めた。

ペロプス[4]はヅェウスの孫でエリスのピーサの王である。各種の傳說が彼に就いて語られてゐるが、要するに最期は身を微塵に切割かれて煮られ、そして英雄ヘーラクレースが彼の死を弔ふためにオリュムピア競技を起したと傳へられてゐる。尙「ペロポンネーソス」[5]といふ地名は、「ペロプスの島」の意であると言はれてゐる。

オリュムピア以外の三大競技 斯くの如く起源を傳說の中に有する古き希臘競技は次第に發達して紀元前六世紀の初頃には、オリュムピア・デルプォイ・ネメア・コリントスの四箇所に國際的大競技が行はれるに至つた。是等の中最も重要なるはオリュムピアであるが、それを詳述する前に他の三大競技に就いて略述しよう。

デルプォイ[6]の競技は前述の如くアポルローンがパルナッソスの山に棲める蛇ピュトーンを討伐し、その記念に創めたものであると傳へられ、その競技會の名をピュティア[7]と呼ばれてゐた。その後

アポ〻ローンを祭る祝祭として行はれ、初めは主として音樂の競技が催された。當初は八年毎にあつたが、前五八六年以來四年毎に—毎オリュムピアード第三年の八月—行はるるに至り、凡そ紀元後三九四年頃まで續いた。所謂アムプィクテュオネスの管理の下に行はれる頃から、オリュムピア競技に倣つて體育及び諸藝術の競技が取入れられた。このプティア競技では優勝者に月桂樹の冠が與へられた。

ネメアの[1]競技はネメアの王子オプェルテースの死を弔ふ爲に起され、やがてメネアのヴェウスの祭として二年毎に—オリュムピアード第二年と第四年—に行はれた。それが公認されて國際化したのはネメアード紀元たる前五七三年の少しく前である。初めはアルゴリス州の小都市クレオーナイ[2]がアルゴス市の勢力の下にその競技を管理してゐたが、前四六〇年から前三世紀の終頃迄の間にアルゴスの管理に移され、更に數世紀後羅馬のハドリアヌス皇[3]帝がアルゴスの競技の名聲を復活せしめた。このネメア競技の優勝者にはみつばの葉の冠が與へられた。

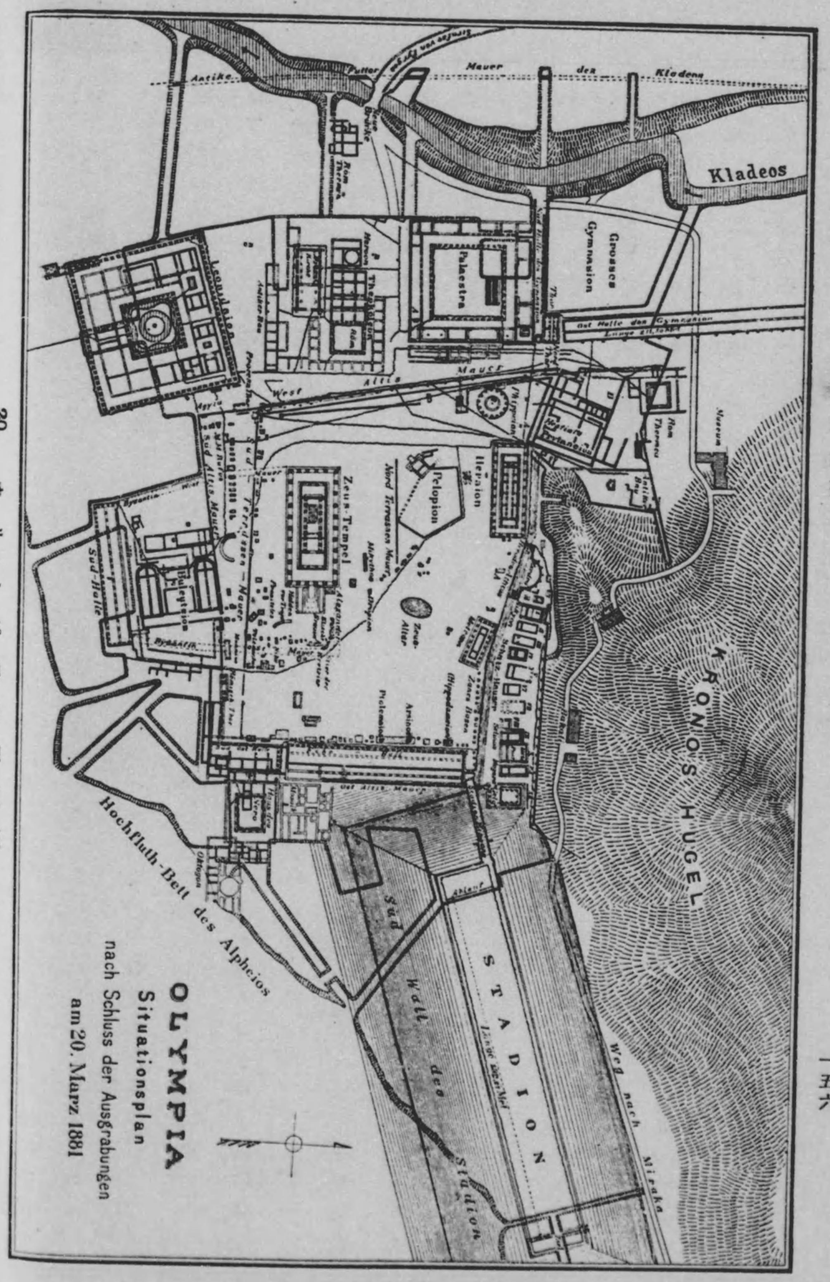
コリントス[4]に行はれた競技はオルコメノス王子パライモーン(もとの名メリケールテース)の爲に起され、やがて海神ポセイドーンの祭として行はれた。その地峽イストモス[5]の名に因んでイストミアの[6]競技と呼ばれた。これも初めは地方的祝祭であつたが、前五八二年に再興せ

1) Νεμέα. 2) Κλεωναί. 3) Hadrianus (r. 117–138). 4) Κόρινθος.
5) Ἰσθμός. 6) Ἴσθμια.

られた。それは或はポセイドーン祭の爲にコリントス借主ペリアンドロス[1]によつて再興されたと說かれ、或は其他の說もあつてその間の消息は不明である。何れにせよ併し、コリントスはその位置の上から幾度かの戰禍に卷込まれ、隨つてイストミア競技は他の國際諸競技に於ける程の名聲を占むるに至らなかつた。その競技は二年毎に—毎オリュムピアード第二年及び第四年の春—に催され、コリントスによつて管理せられた。その優勝者には松の葉の冠が與へられた。

オリュムピア　上述の三大競技に比して更に隆盛を極め重要性を有し謂はゞ全希臘競技の中心となり代表となつたのはオリュムピア[2]競技であつた。ペロポンネーソス半島の西海岸アルプェイオス河の河口から十一哩ほど遡つた所にオリュムピアの平原がある。東北遙かに雪を頂いたエリュマントス[3]の嶺を仰ぎ、近くはそれの餘波たるクロノス[4]及びピーサ[5]の丘を北から東方へかけて控へ、その緩かな斜面には所謂アルティス[6]の森が茂り、無花果、オレンヂ、橄欖、葡萄等の樹が美しく丘陵を彩つてゐる。南にはアルプェイオス河[7]、西にはその支流たるクラデオス河が靜かに流れてゐる。この小さな峽谷—クロノスの丘の麓から兩河の合する所まで長さ七五〇呎幅五五〇呎の小丘陵平原—には古くからヅェウスの社殿があり、その神域を「アルティス」と呼んでゐた。蓋し「神聖なる森」の謂である。このヅェウスの神殿を中心として他の

1) Περίανδρος (r. 625–585). 2) Ὀλύμπια. 3) Ἐρυμάνθος.
4) Κρόνιον ὄρος. 5) Πῖσα. 6) Ἄλτις. 7) Κλάδεος.



1) Ὀλυμπιάς. 2) Ἶφιτος. 3) Κλεοστένης. 4) Κοροίβος.

多くの神々の祠・彫像・競技場其他の公共施設があり、是等を一括して「オリュムピア」（地名の時はピアトにあり）と呼び、こゝに所謂オリュムピア競技（競技名の時はアクセンにあり）が行はれたのである。

オリュムピア競技の起源及び復活 オリュムピア競技は前述の如く希臘の英雄ヘーラクレースがペロプスを弔ふ爲に創めたと傳へられてゐるが、ヅェウスの祭として行はれたのも古くからのことである。卽ちアカイア族の半島移住以前からヅェウスの祠はあり、その祭典に競技が行はれるに至つたのはアカイア族の移住後ドーリア族の侵入前であつたと推定せられる。但しこの競技が重要性を得たのはドーリア族侵入の後であり、而も彼等が攻略征戰を終へて平和を迎へ覇權の確保に腐心するに至つた後のことである。この競技は初めはピーサ市が管理してゐた。ピーサはオリュムピアの東方約六スタディア（一一五四米）にあり、オリュムピアの神域はこの都市の領內にあつたので、その競技もこの都市で管理してゐたのである。エリスの市民はこの管理權を奪ひ取らんとしたが、ピーサ市民は神への宗教的尊崇の故によく抵抗してこれを保持した。この爭亂の爲に競技は一時衰へてゐたが、やがて兩市の講和が成立し、共同管理の下に競技が復活した。これが卽ち紀元前七七六年であり、所謂オリュムピアード（原名オリュムピアース）[1]の紀元をなしてゐる。當時エリスの王はイフィトス[2]、ピーサの王はクレオステネース[3]であり、この復活第一回の競技に優勝した者はエリスの青年コロイボス[4]であ

り、その種目は二百碼徒歩競走であつた。ピーサの市民は併しながら常に從來の獨裁權を回復せんと圖つた爲にこの兩市共同管理は不成功に終つた。そしてエリス市民はスパルタの支持を得て次第に優勢となり、波斯戰役後遂にピーサを亡ぼし、又州內南方のトリプュリア地方なる諸市の反抗を抑壓してオリュムピア競技の獨裁を確保した。エリスとスパルタとは後に相爭ひ、エリスはスパルタ選手の競技參加を拒絕した事もあつたが當初は全くスパルタの援助の下にこの競技を管理し發展せしめたのである。スパルタが斯くエリスを助けてオリュムピア競技を盛大ならしめたのは、この競技を汎希臘的ならしめ、而もその擁護者としてのスパルタが全希臘の指導的地位にあることを周く認めしめんが爲であつた。換言すればオリュムピア競技の發展の背後にはスパルタの政治的功名心が動いてゐたのである。

オリュムピア競技の經過　扨てオリュムピア競技は前七七六年以來毎四年目の夏至の後の滿月の頃を卜して行はれた。初めは一日で終つたが全盛時代には五日又は六日續けて行はれ、その期日を中心として前後一箇月間は、參加選手や應援見物客の往復を安全ならしめる爲、全希臘に亙つて休戰が布かれた。參加國も初めはエリス一國のみであつたが、やがてペロポンネーソス半島全體に擴がり、第七九回大祭の行はれた前四六四年頃から汎希臘的となり、希臘本土は勿論、エーゲ海の島々、小亞細亞、伊太利、シシリー、埃及、遠くは西班牙までも含んで、凡そ希臘民族の住する所の殆んどすべての國々から代表選手を送るに至つた。競技種目も最初は單に二百碼のトラックを端から端まで走る短距離競走のみであつたが、漸次に一往復、七往復、十二往復、二十四往復が加へられ、第二三回頃から拳鬪及び戰車競走が、第六五回頃から武裝競走が加へられた。

他方又體育競技の外に詩、演劇、辯論、繪畫、彫刻、陶器術等の競技も加へられて行つた。然しオリュムピア競技の中心はやはり體育競技であつたから以下それに就いて選手の出場から凱旋に至るまでの經過の大體を述べよう。

オリュムピア競技の期日は少くとも十箇月以前に傳令を以て全希臘諸國に通告せられ、各國選手は夫々故郷に於て練習を重ねる。この競技に參加する者は純粹の希臘民族（ヘルレーネス）の男子であり、未だ宗教的にも政治的にも刑罰を受けたることなく、十箇月以上ギュムナシオンに於て練習を積める者たることを要件としてゐた。年齡も大體十二歲から二十歲迄と、二十歲以上三十五歲迄との二クラスに分けられ、後には十歲前後の少年の競技も加へられた。

鄕國で十箇月の練習を積んだ選手達は大祭の一箇月前に親兄弟を伴つてオリュムピアへ乘込み、ゼウスの神殿に祈りを捧げ、役員の檢閱を受ける。役員は一箇年前にエリスの國民より選出せられた十人の委員であり、それが各選手に就いて前述の資格檢査を行ひ、それを

通過した選手は、この役員の監督の下にオリュムピアのギュムナシオンに於て更に一箇月間練習を重ねる。大祭の十一日前に役員は全希臘に令して一箇月間の休戰を通告する。ギュムナシオンに入つた選手達は毎日晝頃起きて一日二食で練習を續ける。食物は半燒のパンと燒豚、酒は飲まぬ代りに可なり大食した。練習と食事の間には入浴しマッサージを行ひ身體に松脂を塗つて疲勞を回復する。斯くて一箇月間精進を續けるのである。

扨て大祭は前述の如く夏至の後の最初の滿月の頃である。短い夏の夜がアルティスの森のあたりから白みかけてオリュムピアを包む山々の輪廓が鮮かに浮び出る頃、祭典の開始を告げる角笛が朝霧に閉された谷間にこだまして高らかに響き渡る。斯かる牧歌的情緒の漂ふ中でオリュムピア大祭の幕は開かれるのである。祭典は先づ神前に犧牲を捧げ、參列者一同の禮拜によつて式を終り、續いて競技に移る。選手一同は神前に嚴かな宣誓を行ひ、やがて前述の役員(審判官)が一段高い所に立つて出場選手全體の名を聲高らかに紹介する。斯くて愈々壯烈な競技は開始され、日の暮れる迄熱戰妙技を競ひ交し、五日も六日もそれが續けられるのである。

一方大祭の一箇月程前から禮拜者や應援團や觀客が全希臘の各地から續々オリュムピアを目指して集まり、近傍に天幕を張つて露營し、あたり一帶は大きなキャムプ村と化する。商人は露店の軒を竝べ一大市場も出現する。更にこの觀客の中にはすぐれた藝術家が數多く交つてゐて選手の活躍をモデルとした詩や彫刻や繪畫が作り出される。オリュムピア競技はそれ故に宗教・政治・經濟・藝術等希臘文化の殆んどあらゆる領域に關聯して、それ等の凝結ともなり、源泉ともなつたのである。

競技に於ける選手の擧止態度は極めて嚴格な規則によつて統制せられ、一旦競技場に入つた者は如何なる理由によるも退出することを大なる恥辱とし、若し退出すれば重い罰金を課せられた。競技が終ると審判官が立上つて優勝者の名とその出身國名とを高らかに唱へ上げ、その一人々々の頭上にアルティスの森から採つた橄欖の枝を以て作れる冠をかぶせ、その右手には棕櫚の枝を持たせた。滿場は總立ちとなつて拍手を送り、殊にその選手の鄕國の人々は狂喜してそれを祝した。

オリュムピア競技優勝者の優待 元來競技の賞品は既述の如く主催者の物惜みせぬ態度の表現として種々の品物が與へられ、最も多く用ひられた三脚釜を始めとして盃杯・壺・楯・胴甲・外套等も與へられた。然し是等は古き時代に於て、又地方的小競技に於ては後世までも、用ひられた賞品であつて、國際的大競技の盛時に於ける賞品には木の枝を以て作れる冠のみが與へられた。卽ちパウサニアスの記錄によれば、[1] オリュムピアに於ては第七オリュムピア

1) Pausanias, VIII. 48,

ス（前七五二年）以來橄欖[1]をデルプォイに於ては前五八二年以來月桂樹[2]を、コリントスに於ては松[3]を、ネメアに於てはみつば[4]を用ひた。是等の木は何れも神木として尊重せられたものであり、その採伐の場所・方法・採伐者の資格等が夫々定められてあつた。又優勝者の右手に棕櫚の枝を持たせることは各地の競技で一般に行はれた。棕櫚は勝利の象徴として前五世紀の末頃から用ひられたのである。

21. オリュムピア競技優勝者の凱旋

優勝選手達はその夜盛大な晩餐會に招かれ、それから威儀を整へて故郷に歸る。大抵は

1) κότινος. 2) δάφνη. 3) πίτυς. 4) σέλινον.

白馬四頭立の馬車に乘り、特に設けられた凱旋門を通つて—時には都市の城壁をその爲に壞して通路を設け—華々しく凱旋する。マグナグライキア[1]（南伊太利）やシシリー等の西方諸國の都市ではその歡待が殊に大袈裟であつた。シシリーの都市アクラガスのエクサイネートス[2]といふ選手は四頭立の馬車に乘せられて、その市民に曳き迎へられ、三百人の人が夫婦二頭の白馬に乘つてこれを護衞した。勿論鄕國の人々は狂喜し喚聲を擧げてこれを迎へた。優勝者の氏名は柱に揭げられ、詩人がそれを讃へて作つた歌は少年少女によつて合唱せられ、彼等の像は多く彫刻にせられ、出身國の費用を以てオリュムピア若くは鄕國に建てられた。そして鄕國は彼等に様々の褒賞を與へた。アテーナイに於てはソローンの法制によつて、イストミア競技の優勝者には五百ドラクメー、オリュムピア競技の優勝者には百ドラクメーが賞金として與へられ、且彼等はプリュタネイオンの饗宴に招かれた[3]。スパルタに於てはオリュムピア競技の優勝者は戰場に於て國王の馬前に戰ふといふ無上の光榮を得た[4]。恐らく他の諸國に於ても是等に類する優遇が行はれたであらう。優勝者を神若くは英雄として祀ることも西方諸國に起り、やがて希臘本土にも行はれるに至つた。彼等優勝者をば地上の普通の人間の種族と考へずして寧ろ古の神々や英雄達の後裔と信じたのも亦自然の情であつた。そして彼等を尊信する者は强健になり病弱を癒せられるとの信仰も起り、彼等

1) Magna Graecia. 2) Ἐξαινήτος. 3) Pausanias, VI. 13, 1.
4) Pau anias, VI. 18, 6.

の像が各地に建立せられたのである。[1] 而して一方優勝者は宛ら凱旋將士がその戰利品を鄕國の神社に奉納する如く、その競技の賞品を神社に獻ずるのが例であつた。ホメ-ロスの詩には斯かる事實の確證はないけれども、デルプォイの三脚釜がディオメ-デ-スのものとされてゐるのは多分パトロクロスの葬祭競技に於て獲得せる賞品を獻納したのであらう。最も多く獻ぜられたものは最も多く賞品に用ひられた三脚釜であるが、時には賞品の代りにその競技に使用した器具を奉納することも行はれた。例へば俳優はそのマスクを、樂師は樂器を、戰車競走の優勝者はその馬と戰車又はその模型を獻納したのである。

オリュムピア競技の暗黑面 輝かしきオリュムピア競技にも裏面には人間の陷り易き暗黑面が潜んてゐた。吾々はその一つを選手の不正行爲により、他をばこの競技に對する識者の非難によつて察することが出來る。第一に競技優勝者の名譽が斯くの如く强大であつただけそれだけ又賄賂によつて他國に買收された選手の受けた罰も大なるものであつた。例へば南伊太利のクロト-ン[2]のアステュロス[3]といふ者は第七三回より第七六回まで(前四八八年—四七六年)徒步競走で連勝したのであるが、その中最後の二回はシラクサ王に買收されて自らシラクサ人と稱して出場した。彼の鄕國クロト-ンの人々は怒つて彼の家を燒き彼の像を引倒した。[4] 又クレ-テ-の選手ソタデ-ス[5]は第九九回競技(前三八四年)に長距離競走に優勝

1) Pausanias, VI. 11, 9.　2) Κρότων.　3) Ἄστυλος.
4) Pausanias, VI. 13, 1.　5) Σοτάδης.

したが、次回にはエプェソスの國に買收されてエプェソス人として出場し、その爲に追放の刑に處せられた。[1] この類の事例は他にも可なり多かつた。特に恥づべき行爲は競技者相互の間に行はれた買收的妥協である。テッサリアの拳鬪選手エウポロス[2]は第九八回競技(前三八八年)に三人の敵手に贈賄して自ら優勝した。この四人は何れも罰金を課せられ、その金でヅェウスの像六個を作り、後の競技者を警める爲の詩句をそれに刻んで競技場の入口に立てた。アテ-ナイの五種競技選手カルリポス[3]も亦第一一二回競技(前二三二年)に敵手を買收して露顯し關係者すべてが罰金を課せられ、やはり六個のヅェウス像を作つて警められた。

第二にオリュムピア競技に寄せられた全希臘人の熱狂的關心の反面に識者の憂慮警告のあつたことも亦吾々は見逃すことが出來ない。哲人クセノプァネ-ス[4]は競技優勝者に對する民衆の神的崇敬に就いて痛く慨嘆した。[5] 詩人エウリ-ピデ-ス[6]はまた當時漸く現れ初めた競技の職業化を非難した。プラト-ンは戰爭に備ふる爲の、又剛健なる品性陶冶の爲の、身體的訓練を强く贊したにも拘らず、當時の競技が單なる鬪爭に墮し、又職業的競技者が榮養にのみ過度の注意を用ひ、その生涯を醉生夢死に終り、品性が慘忍になり易き虞のあることを嘆いてゐる。[7] 紀元後第二世紀の醫者ガレ-ヌス[8]は競技が競技者自身の爲にも國家の爲にも利益のないことを强調してゐる。

1) Pausanias, V. 18, 6.　2) Εὔπολος.　3) Κάλλιπος.　4) Ξενοφάνης (536–480).　5) Diels, Xenophanes. B.2.　6) Εὐριπίδης (485–406).　7) Platon, Politeia. 410 d.　8) Galenus (130–200).

1) Theodosius (r. 378–395)

22. オリュムピアの遺跡

オリュムピア競技の頽廢 希臘に於けるオリュムピア競技は斯くの如くにして紀元前七七六年以來四年目毎に規則正しく行はれたが希臘の民族精神が世界主義的・個人主義的精神に崩壞し、希臘よりマケドニアへ、それより更に羅馬へと世界の覇權が移つて行く間に、オリュムピア競技も次第にその祖國愛や民族的團結や特にも宗教的信仰などの內面的支持を離れて、職業化し、興業化し、識者の尊敬をも大衆の純眞なる關心をも失つて行つた。斯くてつひに紀元後三九二年の第二九三回大祭を最後として三九四年に東羅馬皇帝テオドシウス[1]によつて(異教神たるヅェウスの崇拜に對する彈壓として)廢止せられた。四六七年にはヅェウスの神像もコンスタンチノープルに移されて燒かれてしまひ、オリュピアの遺跡もゴート族の爲に荒され、加ふるに地震の災厄さへも受けて見る影もなく崩れ埋もれたのである。

近世に於けるオリュムピア競技の復活 オリュムピアの遺跡が地下二十尺の底に埋もれて千三百年を經過した時、獨逸伯林の考古學者エルンスト・クルチウス[1]がオリュムピア遺跡の發掘を思ひ立ち、獨逸皇帝から財政的援助を受けて六年間日夜作業を續け、一八八一年つひにオリュムピア遺跡は地上に現はされ、古代希臘人の燃ゆる闘志と純眞な祖國愛と民族精神と神への敬虔なる心情とが彷彿として思ひ偲ばれた。然しながらこの單なる懷古的感激が未來の世界への强き憧れとなり、全世界の青年の更生の爲にオリュムピア競技そのものゝ復活が計畫せられたのは佛蘭西の青年紳士、男爵ピエール・ドゥ・クーベルタン[2]によつてゞあつた。クーベルタンは一八八三年に巴里の政治學校[3]を卒業した後、二十一歳にして英國に渡り公立學校(パブリックスクール)の教育に就いて研究した。氏はトマス・フース[4]の名著『トム・ブラウンの在學時代[5]』に現れたる教育理想に深く心醉し、それを實現せる英國公立學校の教育を讃嘆し「スポーツマンは紳士なり」といふ標語を英國教育の根本方針として深く體認した。加之職業的競技の弊害に對するアマテュア競技の純眞さも氏が英國に於て痛感せる一大收穫であつた。斯くて氏は佛國に歸り、當時の教養階級青年の餘りに柔弱にして享樂的なる氣風をスポーツによつて根本的に改造せんことを計畫したのである。

1) Ernst Curtius (1814–1896).
2) Baron Pierre de Coubertin (1863–)
3) Ecole des Sciences Politiques.
4) Thomas Hughs.
5) Tom Brown's Schooldays.

クーベルタンの十年に亙る苦心、勸說も中々容易には共鳴者を得なかつた。この間に氏は巴里に於ける若干のリセー及びその他の學校に競技を取入れ、一八八九年巴里博覽會に結合して競技會を催し、又米國諸大學に競技奬勵の行脚を試み、佛國内に「體育競技聯盟」[1]を組織してその機關誌をも刊行した。一八九二年ソルボンヌに開かれた佛國體育聯盟の會合に於て氏は「古代・中世及び近世に於ける體育練習」と題する講演を行ひ、熱辯を振つてオリュムピア競技の復活を力說した。更に當時ブランセトン大學の教授たりしウイリアム・ミリガン・スルーヌ[2]及び英國のアマテュア體育聯盟の幹事ハーバート[3]の兩氏と協力して、アマテュア競技の原則の研究と促進との爲に巴里國際會議の開催を計畫し、一八九四年一月オリュムピア競技復活の必要を說いた書面を英米其他數箇國の體育團體に宛てゝ發送した。その年の六月巴里に英米以下十二箇國の競技團體を代表する七九名の委員が集つて會議を開いた。この會議は一八九六年を期してアゼンスに復活第一回のオリュムピック競技を開催すること、並びに一九〇〇年に巴里大博覽會と結合して第二回を開くべきことを決議した。この計畫はクーベルタンを會長とする國際オリュムピック競技委員の手によつて實現せられ、各國選手が參加して盛大に行はれ全世界の體育競技への關心を俄かに高調せしめた。斯くて一九〇〇年第二回を巴里に、一九〇四年第三回をセント・ルイスに、一九〇六年第四回を再びアゼンスに、一九〇八年第五回をロンドンに、一九一二年第六回をストックホルムに開いた。一九一六年第七回を伯林に開く豫定の處世界大戰の爲に

1) Union des sociétés des sports athlétique.
2) William Milligan Sloane.　3) C. Herbert.

中止せられ、一九二〇年第七回をアントワープに、一九二四年第八回を巴里に、一九二八年第九回をアムステルダムに開き、一九三二年第十回をロサンゼルスに開いたのである。クーベルタン男爵は今は病を得て委員會の第一線を去り、國際オリュムピック委員會は白耳義のラッール[1]伯爵によつて指導せられてゐるが、回を重ぬるに從つて益々盛大に赴きつゝあるは周知の如くである。

汎希臘的競技の教育的意義　以上に吾々はオリュムピア競技を中心とする汎希臘的競技に就いて述べ、併せて近世に於けるその復活を附記した。飜つて想ふに斯かる競技が希臘文化史及び教育史に與へた影響は頗る甚大であつたに相違ない。第一にその競技の内容をなせる體育と文藝とは實に希臘教育の二大眼目であり、それの最高標準がこれ等汎希臘的國際的なる晴の舞臺に於て示され、鄕國の名譽を賭して競はれたといふことは、全希臘の教育に最も輝かしき標的と模範と熱意とを提供したものと解せねばならぬ。オリュムピアを代表とする四大競技に倣つて地方的競技は無數に行はれ、それに殆んどすべての少青年が參加したことを思へばオリュムピア競技の謂はゞ中樞的なる活動が全希臘の末の末に至るまで刺戟を傳へて希臘教育の全神經を興奮せしめてゐたと解することが出來る。體育と文藝との何れが何處の競技に於て特に重んぜられたかといふ差異はあつたにしても、

1) Baillet-Latour.

競技が單なる體育に止まらずして精神的教養としての文學藝術の發展に貢獻したことは殊に注目に値する。體育競技そのものが詩や繪畫や彫刻の題材となりモデルとなつたことの外に、一般にこれ等の文藝の逸品が大祭の期間中披露せられ競演せられたことが、全希臘の文化を刺戟したことは絶大であつたに相違ないのである。

第二にこれ等の國際的汎希臘的行事の根本的意義は祖國愛と汎希臘的精神との調和であつた。祖國を代表してその名譽の爲に他國の戰手と熱戰苦鬪を交へながら、而もその相手は等しくヘルレーネスの純なる血に結ばれ同じきゾェウス、アポルローン・ポセイドーン等の希臘共通の尊崇の的によつて結ばれてゐたのである。國家の獨自なる發展と國際的協調とは人類の永遠の理想であり、汎希臘的競技はそれの實現であると共に又永遠にそれを培養しつゝあつた。そして國民教育と國際教育といふ矛盾し易き要求を止揚するための原型がそこに示されたとすれば、それの教育的意義は測り知れざるものであらう。

第三にこれ等の國際的競技が政治的には平和を、經濟的には商業の隆盛、交通の開拓を齎したことは既に指摘した通りである。この種の貢獻は國際競技そのものゝ圓滑なる遂行が必然に生み出した副産物であるが、而も希臘文化史上に於けるその意義は決して淺少ではなかつたのである。

近代に復活し現に益々興隆しつゝある國際オリムピック競技が、世界の青年の、更に全世界人の意氣を如何に激刺明朗たらしめてゐるかに就いては贅言を要せぬであらう。而もこの事實は希臘民族の業績が現代世界の文化と教育とに如何ばかり強く生ける力を揮ひつつあるかといふ點に關する僅か一つの事例に過ぎないのである。

第四節 エロースの風習とその教育的意義

希臘社會の風習 特定の制度や機關による教育ではないが、日常生活の風習そのものが重要なる教育的機能を果し、且後のソークラテース・プラトーン・アリストテレース等の教育思想の材料となり、基調となつたものとして、吾々は希臘社會に於ける先輩と後輩との同性愛的結合を看過することが出來ない。元來希臘社會に於ける婦人はその地位が甚だ低く社交上には殆んど存在を認められてゐなかつた。アテーナイの婦人が專ら家庭の人として終始したことは既述の如くであり、スパルタ婦人が男子と同樣に體育を勵み又國家に對する貢獻を誇つたとしても、それは强健なる子女の生産といふ優生學的見地に基づくのであつて、男女の同權がそこに行はれてゐたのではない。他方に於て希臘の男子は、スパルタに於てもアテーナイに於ても、軍隊的乃至政治的に共同接觸の機會を有つことが甚だ多かつた。斯くの

如き情勢に於ける古來の希臘社會は、異性間の愛情以上に、男子の同性愛を著しく助長した。この關係は少青年と壯年者との間に結ばれ、愛する先輩、崇拜せられる先輩をエラステース[1]—以下便宜上愛者と譯する—といひ、愛せられる後輩をパイディカ[2]—以下便宜上愛弟子と譯する—と呼んだ。そしてこの愛情をば一般には愛若くは友情（エロース[3]若くはフィリア[4]）といひ、特に又子供（パイス[5]）への愛若くは友情は友情の意を以てパイデラスティア[6]若くはフィロパイス[7]—以下何れも子弟愛と意譯する—と名づけた。

斯かる同性愛は、特定の職業的技術の修得の爲よりも、主として道德的精進乃至は自由人としての心身の教養の爲に有力なる效果を齎し、希臘人に於ては一種の望ましき理想と考へられてゐた。既に述べた如くホメーロスの「イリアス」篇に於けるアキュレウスが親友パトロクロスの復讐の爲に、やがて我が身に降りかゝるべき死の運命をも厭はずして、トロイア軍の擊破に奮戰したのは、同性愛の故の勇ましき振舞として高く仰ぎ慕はれた。戰爭に於てこの關係が有效に作用することは後世の希臘人にも周ねく認められ、スパルタ人やクレーテー人は、戰の前にエロースの神を祭つた。蓋し彼等は互に愛者愛弟子の面前に於て、卑怯に生きんよりは勇敢に死せんことを希つたからである。テーバイの名將エパミノーンダス[8]とペロピダス[9]とは、曾てテーバイがスパルタに加擔してマンティネイアと戰つた時（前三八五年）、相互に

1) ἐραστής. 2) παιδικά. 3) ἔρως. 4) φιλία. 5) παῖς.
6) παιδεραστία. 7) φιλόπαις. 8) Ἐπαμινώνδας. 9) Πελοπίδας.

生死の危險を冒して救ひ合ひ、爾來永く無二の親交を續けたことで有名であるが、後にエパミノーンダスがスパルタ軍をレウクトラの戰（前三七一年）に粉碎してテーバイの覇業を遂げたのは、その部下の軍隊を愛者と愛弟子との關係に組織したことに起因すると傳へられてゐる。

平素の修養に於ても亦この同性愛的關係は極めて有力なる役割を果した。諸々の競技は若者の心身の美しさを示して觀衆の浪曼的心情を躍動させ、又その奮鬪優勝の蔭には、愛する者愛される者の前に自己の優越を證明し愛の維持促進を圖らんとする希望が祕められてゐたのである。斯くして競技の興隆と共に、この同性愛は「次第に希臘人の生活に浸込み、彼等の精神と殆んど本質的に結合して現はれ、加之一種の高き理想的要素たる趣を呈して來た。」[1] ギュムナシオンにはそれ故に、體育の守神ヘルメース[2]の像と、男子の德を象徵するヘーラクレース[3]の像との間に、愛の神エロース[4]の像が建てられてあつた。而もギュムナシオンやパライストラは單に體育愛[5]の道場であるばかりでなく知識愛[6]と子弟愛[7]との壇場と見做されてゐた。[8] 卽ちそこではエロースに結ばれた先輩と後輩とが相助け相誡めつゝ精神的竝びに身體的兩面の教養にいそしんだのである。

先輩後輩の愛の結合は斯くの如く重要なる教育的意義を有したが故に、愛者たる先輩は

1) J. Burckhardt, Griechische Kulturgeschichte. Bd. IV. S. 145. 2) Ἑρμῆς.
3) Ἡρακλῆς. 4) Ἔρως. 5) φιλογυμναστία. 6) φιλοσοφία.
7) παιδεραστία. 8) R. G. Bury, The Symposium of Plato. p. 35.